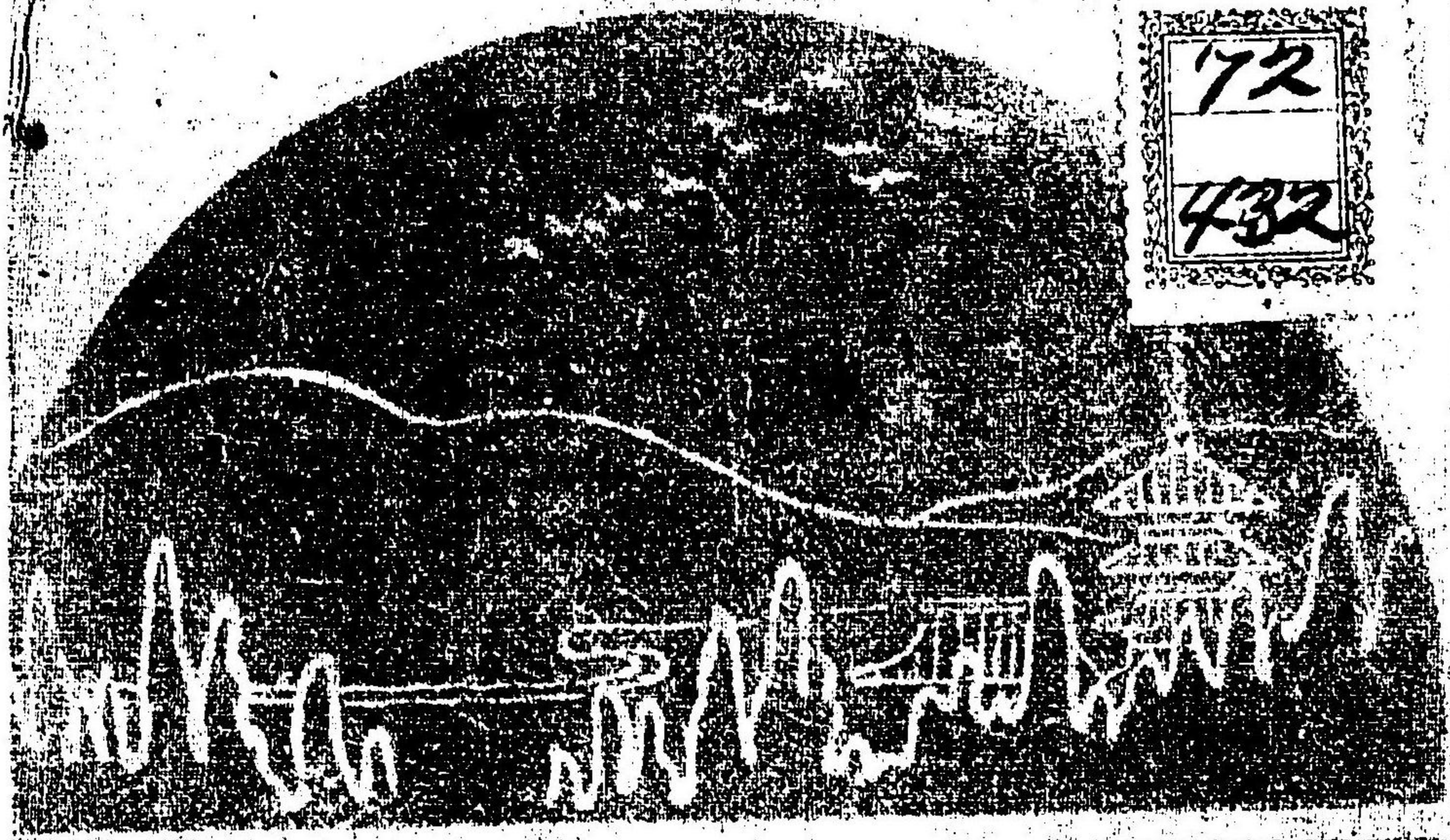


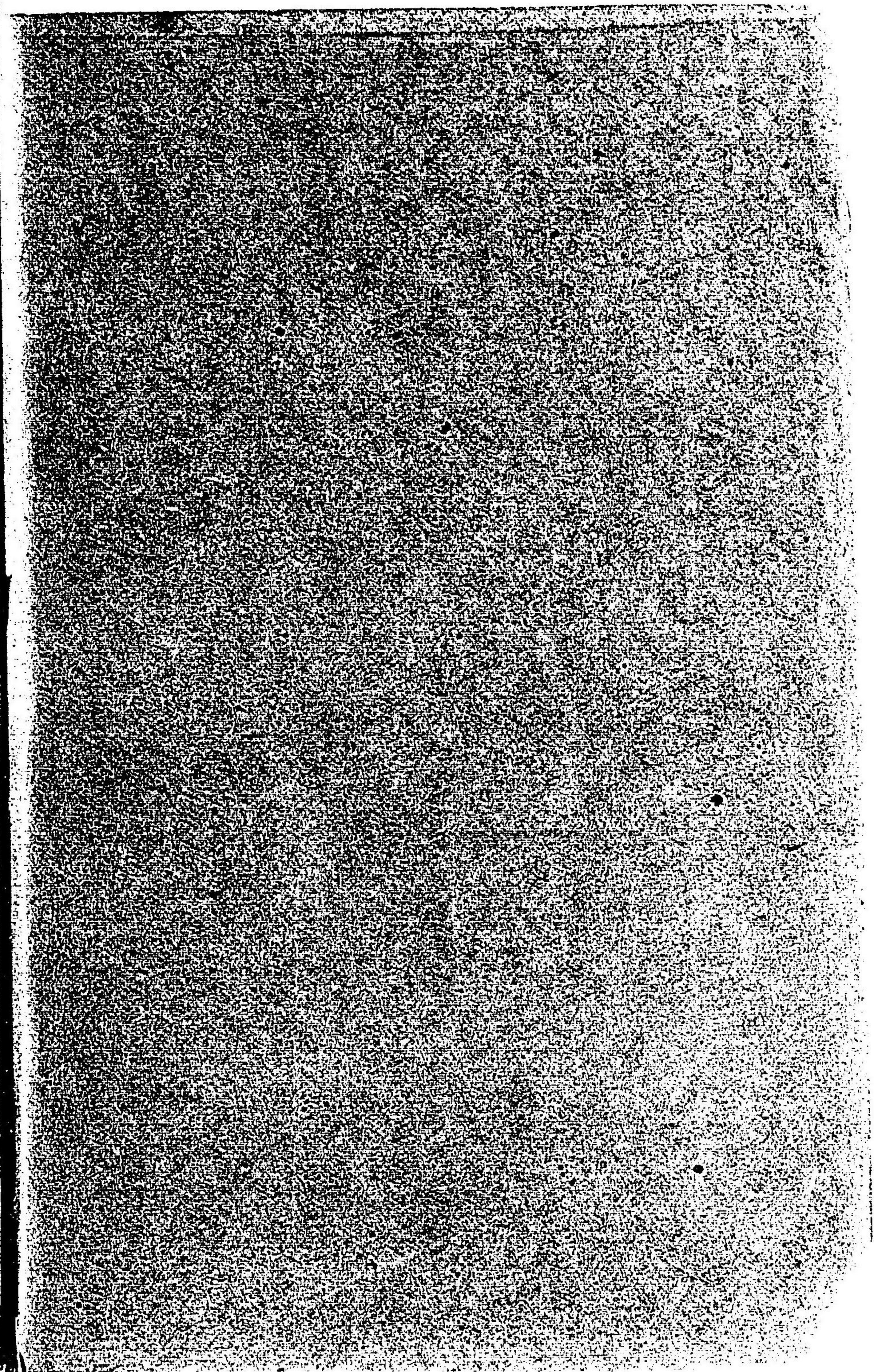
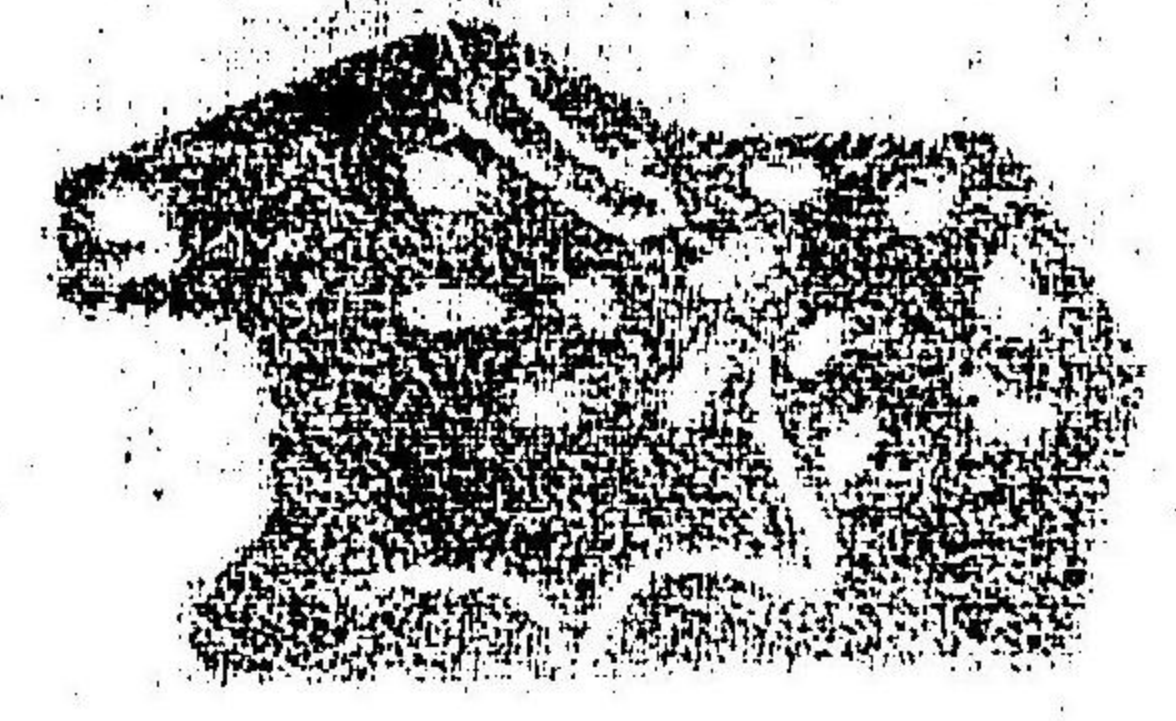
72
432

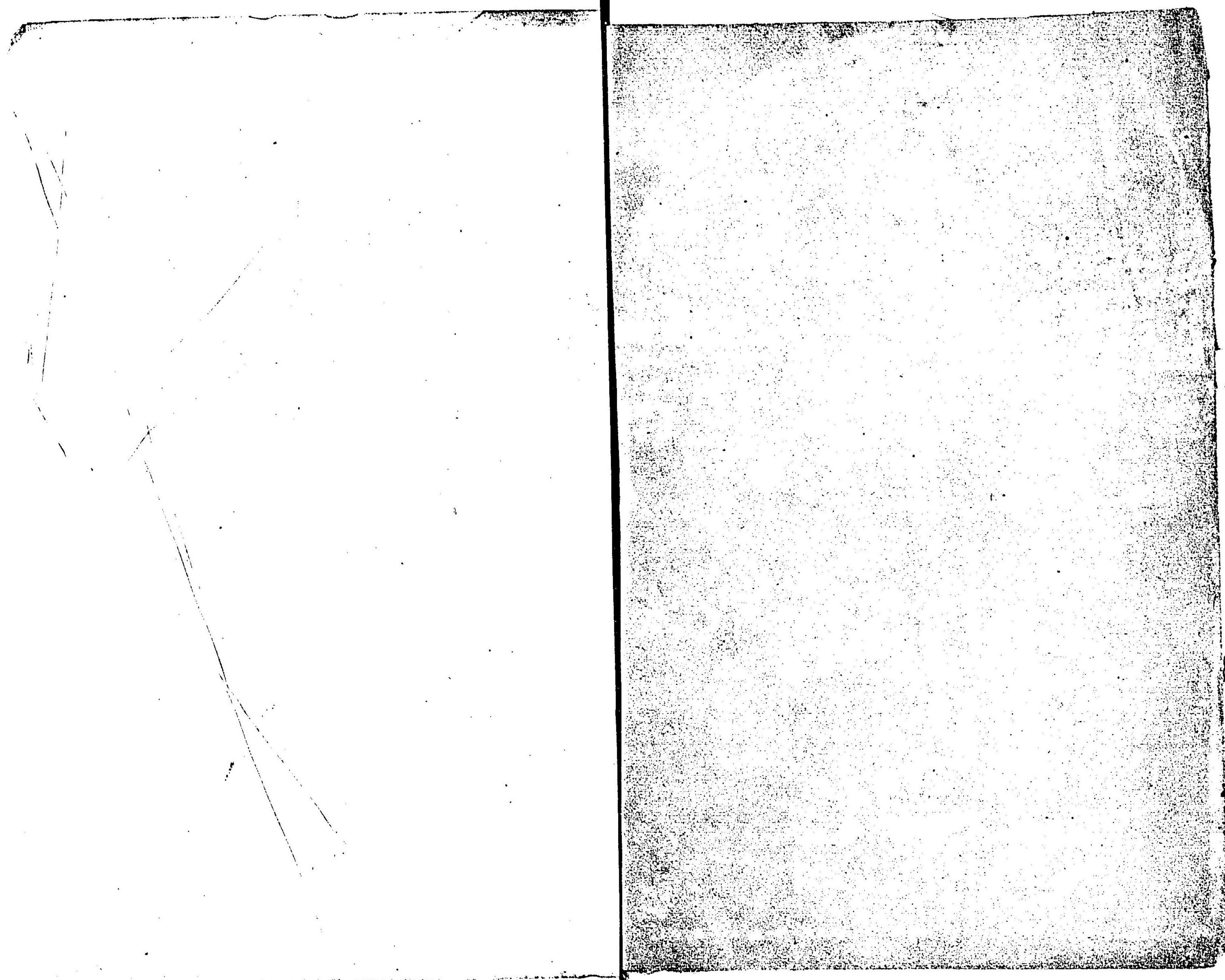


新撰名勝地誌

山東道東部

田山花袋編





72-432

田山花袋編

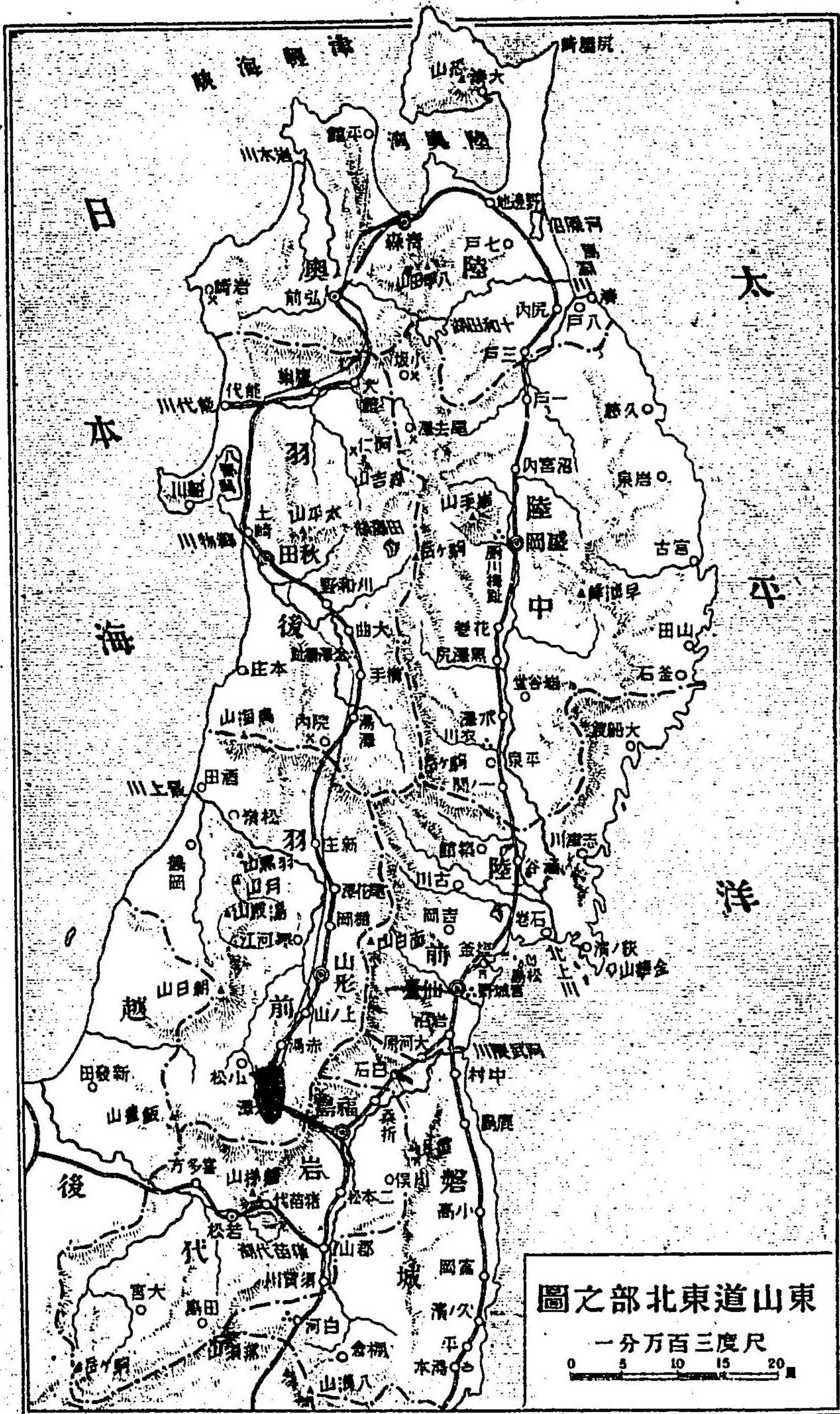
東山道東北部

新撰名勝地誌

卷之五

44.5.5

東京 博文館藏版



凡 例

一 東山道東北部は所謂往昔の陸奥出羽の地にして、人文の發達、關東近畿地方に比して、甚だ遅々たるの觀あれど、面積廣く、隠れたる山水勝地に富み、記すべく録すべきこと亦尠なからず。陸前には松島、金華山の勝あり。陸中には藤原氏時代の建築を見るべき中尊寺あり。陸奥には下北半島と外ヶ濱あり。羽前の三山、羽後の男鹿半島等皆な旅行家の行いて見ざるべからざるものたり。

二 編輯の體裁すべて前卷に同じけれど、本篇には殊に歴史と地理との關係に就いて意を用ゐたり。

明治四十四年四月

編 者

目次

東山道東北部

總論

磐城國

○官設東北線沿道	三	福島種馬所	三
白河町	三	甲子溫泉	三
白河城址	四	甲子山	三
宗祇戻の碑	六	石川町	五
南湖公園	七	石都々古別神社	五
白河關址	八	矢吹町	六
感忠銘	〇	入江農場	六
棚倉町	二	乙字瀧	六
都々古別神社	三	三春町	七
軍馬補充部白河支部	三	三春城址	六

瀧櫻	三六
小野新町	三六
霧島嶽	三六
常葉町	三六
○久慈川上流地方	三九
久慈川	三九
湯岐温泉	三九
矢祭山八景	三九
○官設常磐線沿道	三一
勿來驛	三一
勿來關址	三一
松川磯	三一
小名濱港	三一
住吉神社	三一
湯本村	三一
三函温泉	三一
温泉神社	三一
緩驛	三一

平町	三七
子鉄倉神社	三七
白水阿彌陀堂	三七
尊稱寺	三七
赤井嶽の龍燈	三七
薬王寺	三七
惠日寺	三七
八莖村の瀑	三七
四倉町	三七
木奴美ヶ浦	三七
久之濱町	三七
波立薬師堂	三七
檜葉八幡宮	三七
析木嶺泉	三七
岩澤観音	三七
宮岡町	三七
長塚村	三七
請戸港	三七

請戸明神	四〇
浪江町	四〇
大堀村	四〇
小高町	四〇
太田神社	四〇
原の町	四〇
野馬追祭	四〇
鹿島御子神社	四〇
八津浦八景	四〇
中村町	四〇
相馬焼	四〇
相馬城址	四〇
中村神社と相馬神社	四〇
原釜海水浴	四〇
松川浦	四〇

飯豊村の耕地整理	四一
互理町	四一
鳥の海水浴	四一
角田町	四一
斗藏山	四一
丸森町	四一
金山町	四一
○刈田伊具郡地方	四二
白石町	四二
白石城址	四二
小原温泉	四二
材木巖	四二
鎌先温泉	四二
遠刈田温泉	四二

岩代國
○官設東北線沿道……………三六

目次

須賀川町……………三六

三

旭ヶ岡公園……………七
 愛宕山……………七
 岩瀬の森……………七
 笠石地蔵……………六
 須宜牧場……………六
 牡丹園……………六
 長沼町……………六
 白河湯本温泉……………六
 郡山町……………六
 安積國造神社……………七
 農事試験場……………七
 開盛山公園……………七
 浄土松……………七
 安積沼址……………七
 安積山……………七
 本宮町……………七
 安達太郎神社……………七
 三雄山……………七

二本松町……………七
 二本松城址……………七
 雙松館……………七
 二本松神社……………七
 稱念寺……………七
 大隣寺……………七
 安達原黒塚……………七
 小濱町……………七
 隱津島神社……………七
 岳下温泉……………七
 川俣町……………七
 福島市……………七
 福島縣廳……………七
 紅葉山公園……………七
 辨天山公園……………七
 信夫橋……………七
 稻荷神社……………七
 信天山公園……………七

黒沼神社……………八
 招魂社……………八
 黒岩虚空藏……………八
 信夫文字摺石……………八
 鎌田桃林……………八
 瀬上町の菅蒲園……………八
 高湯温泉……………八
 土湯温泉……………八
 吾妻山……………八
 飯坂温泉……………八
 大鵬公園……………九
 醫王寺……………九
 湯野温泉……………九
 穴原温泉……………九
 伊達風穴……………九
 桑折町……………九
 御蔭の松……………九
 梁川町……………九

保原町……………九
 掛田町……………九
 靈山神社……………九
 ○岩越線沿道……………九
 縣有模範林……………九
 熱海温泉……………九
 石鐘種馬場……………九
 高玉嶺山……………九
 山潟驛……………九
 安積疏水口沼上瀑布……………九
 關都驛……………九
 猪苗代湖……………十
 猪苗代町……………十
 土津神社……………十
 三忠碑……………十
 磐梯山……………十
 十六橋……………十
 若松市……………十

若松城址	二二
歩兵第六十五聯隊	二七
蒲生氏郷墓	二七
融通寺	二七
鷲養國神社	二八
白虎隊の墓	二八
榮螺堂	二九
石部櫻	二九
東山温泉	二九
東山の諸勝	三〇
喜多方町	三〇
願成寺	三三
加納鑛山	三三
熱鹽温泉	三三
示現寺	三三
檜原湖	三三
飯豊山	三三
川南村	三三

本郷町	二四
高田町	二五
伊佐須美神社	二五
○越後街道と沼田街道	二六
會津中央藥師堂	二六
坂下町	二七
心清水八幡宮	二七
野澤町	二七
ホーバル鑛	二八
柳津虚空藏堂	二八
不動瀧	二九
沼澤沼	二九
本名村	二九
○下野街道沿道	三〇
大川橋	三〇
塔の辨	三〇
田島町	三〇

陸前國

○官設東北線沿道

大河原町	二四
大高山神社	二四
青根温泉	二四
藏王嶽	二四
峨々温泉	二四
有耶無耶の關址	二七
岩沼町	二八
武駒神社	二八
武隈の松	二九
千貫松山	三〇
東平王墓	三〇
増田驛	三一
實方中將墓	三一
秋保温泉	三一
秋保大瀧	三一

○仙臺市

菖蕪辻	二六
櫻岡公園	二六
青葉城	二六
第二師團司令部	二六
諸兵營	二六
龜岡八幡宮	二六
經ヶ峰靈廟	二六
愛宕山及大年寺山	二六
第二高等學校	二六
仙臺醫學專門學校	二六
宮城控訴院	二六
長町	二六
青葉神社	二六
支倉六右衛門墓	二六
林子平墓	二六

大崎八幡宮	一六五
宮城縣廳	一六六
宮城病院	一六六
東北學院	一六六
仙臺東照宮	一六六
榴ヶ岡公園	一六七
第三旅團司令部	一六七
宮城野	一六七
原町	一六八
國分寺址	一六八
仙臺地方裁判所	一六九
仙臺高等工業學校	一六九
宮城集治監	一七〇
埋木細工と仙臺平	一七〇
岩切驛	一七一
燕澤蒙古碑	一七一
多賀城址	一七二
多賀城碑	一七三

末松山	一七四
鹽竈町	一七五
鹽竈神社	一七五
貞山堀	一七六
葛蒲田海水浴	一七六
鯛の生州	一七六
松島	一七九
四大觀	一八一
富山	一八一
扇溪	一八二
多聞山	一八三
大鷹森	一八三
五大堂	一八三
觀瀾亭	一八四
雄島	一八四
瑞巖寺	一八四
山寺	一八八
吉岡町	一八九

品井沼	一六九
松山町	一七〇
小牛田町	一七〇
涌谷町	一七〇
黄金山神社	一七一
鮑嶽	一七一
古川町	一七二
安國寺	一七二
三本木町	一七三
中新田町	一七三
鹿島神社	一七三
伊達神社	一七四
藥來山	一七四
小野田及宮崎村	一七五
岩出山町	一七五
軍馬補充部鍛冶屋澤支部牧場	一七六
溫泉八湯	一七六
鬼首五湯	一七三

吹上間歇泉	一七〇
荒雄川	一七〇
瀬峰驛	一七〇
四壇原	一七〇
高清水町	一七〇
新田驛	一七〇
佐沼町	一七〇
石越驛	一七〇
若柳町	一七〇
築館町	一七〇
岩ヶ崎町	一七〇
營岡八幡宮	一七〇
細倉鐵山	一七〇
花山溫泉	一七〇
駒形根神社	一七〇
行者瀧	一七〇
○作並街道	一七〇
棒目木瀧	一七〇

作並温泉	三三
定義温泉	三三
船形山	三四
○北上川流域と牡鹿半島	三五
米谷町	三六
登米町	三六
登米神社	三七
柳津町	三七
和淵村附近	三七
一心院箱泉寺	三八
飯野川町	三八
禪昌寺	三九
野蒜運河	三九
石巻町	三〇
日和山	三三
多福院	三三
大塔宮舊趾	三四
渡波町	三五
渡波海水浴	三五
萩濱	三六
月の浦	三六
金華山	三七
○本吉氣仙兩郡地方(東濱街道)	三七
志津川町	三九
田束山	三九
淨勝寺	三九
氣仙沼町	四〇
羽黒神社	四〇
鳴々穴	四〇
高田町	四〇
盛町	四一
野尻鑛山	四一
五葉山	四一

陸中.....二四一

○官設東北線沿線	二四六
一ノ関町	二四七
御館山公園	二四八
願成寺	二四八
小松柵址	二四八
蘭梅山公園	二四八
嚴美溪	二四九
水山温泉	二五〇
酢川温泉	二五〇
酢川嶽	二五〇
平泉	二五〇
平泉館址	二五〇
高館址	二五〇
中尊寺	二五〇
衣川柵の舊址	二五〇
毛越寺	二五〇
達谷窟	二六一
前澤町	二六一
水澤町	二六一
臨時緯度観測所	二六一
日高神社	二六一
鎮守府八幡宮	二六一
鳥海柵址	二七〇
永徳寺	二七一
岩谷堂町	二七一
正法寺	二七一
經清館址	二七一
伊手村	二七三
栗本、小牧倉鑛山	二七三
六原野軍馬補充部牧場	二七四
黒澤尻町	二七四

丹内山神社	二七五
水澤銅山	二七五
仙人峽山	二七六
湯田温泉	二七六
赤石金山	二七七
花巻町	二七七
鳥谷ヶ崎城址	二七八
延壽寺觀世音	二七八
志月平温泉	二七八
大澤温泉	二七九
鉛温泉	二七九
豐澤村諸湯	二七九
三ッ澤銅山	二七九
寒温泉	二八〇
光林寺	二八〇
日詰町	二八二
志波城址	二八二
志賀理別神社	二八一

陣岡蜂社	二八三
盛岡市	二八四
盛岡城址	二八六
石割櫻	二八八
櫻山神社	二八八
盛岡公園	二八九
盛岡高等農林學校	二八九
安倍八幡宮	二八九
報恩寺	二九〇
本誓寺	二九〇
三ッ石	二九〇
南部鐵瓶	二九一
厨川柵址	二九一
岩手山	二九五
網張温泉	二九八
小岩井牧場	二九八
岩手種馬所	二九八
聖石村	三〇〇

葛根田岩窟	三〇〇
兜神嶽	三〇一
軍馬補充部牧場	三〇一
外山御料牧場	三〇一
金勢明神	三〇二
沼宮内町	三〇四
弓張の清水	三〇四
○氣仙沼街道	三〇五
薄衣村	三〇五
黄海村	三〇五
千厩町	三〇五
折壁村	三〇六
室根神社	三〇六
○遠野町附近	三〇六
遠野町	三〇六
早池峰山	三〇七
軍馬補充部牧場	三〇八
○濱街道	三〇八

釜石町	三〇〇
尾崎明神	三〇〇
釜石鉄山	三〇一
六黒見金山	三〇二
大槌町	三〇三
山田町	三〇三
霞露嶽神社	三〇三
宮古町	三〇四
横山八幡神社	三〇五
小本村	三〇六
久慈町	三〇七
○鹿角地方	三〇七
毛馬内町	三〇八
小真木鑛山	三〇八
大湯温泉	三〇九
不老倉銅山	三〇九
小阪鑛山	三〇九
花輪町	三一一

尼去澤鐵山……………三二
小豆澤神社……………三二

湯瀬温泉……………三三

陸奥國……………三三三

○官設東北線……………三二七
中山峠……………三二八
小島谷驛……………三二九
一月町……………三三〇
末松山……………三三〇
鳥越觀音……………三三一
福岡町……………三三一
水昌瀧……………三三一
湯田温泉……………三三一
三月町……………三三二
長慶天皇行宮址……………三三二
異國馬の碑……………三三三
名久井嶽……………三三四
柳引八幡宮……………三三五

尻内驛……………三三五
八月町……………三三五
三八城神社……………三三七
長者山……………三三八
湊港……………三三八
鮫港(海水浴)……………三三九
蕪島……………三三九
館鼻岬……………三三九
下田驛……………三四〇
三本木原……………三四〇
青原學校……………三四二
軍馬補充部三本木支部牧場……………三四二
七月町……………三四二
奥州種馬所……………三四二

八幡嶽……………三三三
小河原沼……………三三四
乙供驛……………三三五
壺の碑址……………三三五
野邊地町……………三三六
馬門温泉……………三三八
狩場澤驛……………三三八
小湊半島……………三三八
樺山……………三三九
淺邊温泉……………三三九
唐味棧道址……………三三九
青森市……………三三九
青森縣廳……………三三九
青森地方裁判所……………三三九
善知島神社……………三三九
青森公園……………三三九
歩兵第五聯隊……………三三七
青森港……………三三七

青森の佐武多……………三三八
妙見堂の櫻……………三三八
田茂木野……………三三八
八甲田山……………三三九

○官設奥羽西線……………三六一
津輕平野……………三六一
浪岡町……………三六一
黒石町……………三六一
黒石神社……………三六一
温湯温泉……………三六一
中野神社……………三六一
猿賀神社……………三六一
大光寺城址……………三六一
弘前市……………三六一
弘前城址……………三六一
大圓寺の五重塔……………三六一
長勝寺……………三六一
八幡宮……………三六一

熊野社……………三六九

東照宮……………三六九

第八師團司令部……………三六九

諸兵營……………三六九

革秀寺……………三六九

津輕塗……………三七〇

高照神社……………三七〇

岳の湯……………三七一

岩木山(岩木山神社)……………三七二

長慶天皇御陵參考地……………三七五

暗門瀧……………三七六

藏館大日堂……………三七六

藏館温泉……………三七七

大鱒温泉……………三七七

阿闍羅山……………三七八

古懸不動……………三七八

碓ヶ關村……………三八八

十和田湖……………三八九

○下北半島……………三八二

田名部町……………三八四

大湊港……………三八四

恐山……………三八四

圓通寺……………三八六

恐山温泉……………三八七

尻屋岬……………三八九

大間岬……………三九〇

大畑村……………三九二

風間浦村……………三九二

大間港……………三九二

佐井港……………三九二

矢越の神懸岩……………三九二

佛歌瀧……………三九二

○外ヶ濱……………三九三

油川村……………三九五

蟹田村……………三九五

今別村……………三九五

三麻町……………三九六

舍利濱……………三九七

龍飛岬……………三九九

○十三瀨地方……………三九九

五所河原町……………四〇〇

木造町……………四〇一

森田の竪穴……………四〇一

龜ヶ岡の遺跡……………四〇三

十三瀨……………四〇四

十三村……………四〇五

岩木川……………四〇五

小泊村……………四〇六

鱒ヶ澤町……………四〇六

大戸瀬の奇勝……………四〇七

深浦村……………四〇八

圓覺寺……………四〇八

深浦鑛山……………四〇九

爐作岬……………四〇九

森山の岩窟……………四〇九

岩崎鑛山……………四〇九

羽前國……………四一一

○奥羽西線沿線……………四一五

板谷峠……………四一六

五色温泉……………四一七

滑川温泉……………四一八

姥湯温泉……………四一八

米澤市……………四二八

米澤城址……………四二〇

上杉神社……………四二一

林泉寺……………四二二

米澤の佛刹……………四二二

佐氏泉公園……………四二三

牛森原……………四二三

笹野大悲閣	四三三
成島八幡神社	四三三
米澤織	四三三
小野川温泉	四三三
白布の高湯温泉	四三三
吾妻温泉	四三三
榛野目驛	四三三
龜岡文珠堂	四三三
高島町	四三三
八幡神社	四三三
蘆恒馬頭観音	四三三
赤湯町(赤湯温泉)	四三三
八幡神社	四三三
白龍湖	四三三
宮内町	四三三
珍蔵寺	四三三
上の山町(上ノ山温泉)	四三三
月岡城址	四三三
湯上観音	四三三
高湯温泉	四三三
醉川神社	四三三
蔵王山	四三三
山形市	四三三
山形縣廳	四三三
山形地方裁判所	四三三
歩兵第三十二聯隊(舊山形城)	四三三
六椏八幡神社	四三三
最上氏墳墓	四三三
専稱寺	四三三
鳥海月山兩所宮	四三三
千歳公園	四三三
唐松大悲閣	四三三
千歳山公園(阿古耶松址)	四三三
最上三華表	四三三
龍山	四三三
漆山驛	四三三

吉祥院	四三五
立石寺(山寺)	四三五
面白山	四三八
山寺三奇景	四四九
天然石橋	四四九
天童町	四四九
建勳神社	四五〇
愛宕神社	四五〇
若松觀世音	四五二
羽前三山登山路	四五二
東根町	四五二
若松八幡神社	四五二
楯岡町	四五四
大石田町	四五五
尾花澤町	四五六
舟形町	四五七
瀬見温泉	四五八
新庄町	四六〇
新庄城址	四六〇
端雲院	四六一
○庄内地方	四六一
本合海村	四六二
八向山	四六四
肱折温泉	四六四
永松礦山	四六五
今神温泉	四六五
仙人掌	四六七
白絲瀧	四六七
清川村	四六八
五所王子社	四六九
狩川村	四七二
羽前三山	四七三
羽黒山	四七七
月山	四七八
湯殿山	四八〇
鶴岡町	四八四

鶴岡城址(庄内神社).....	四八五
日枝神社.....	四八六
春日神社.....	四八六
鶴岡の佛刹.....	四八六
赤川.....	四八七
金峯山.....	四八八
田川温泉.....	四八八
大山町.....	四八九
楢尾神社.....	四九〇
善寶寺.....	四九〇
加茂町.....	四九一
湯濱温泉.....	四九一
荒倉神社.....	四九一
氣比神社.....	四九二
暮坪の立岩.....	四九三
温海温泉.....	四九三
鼠ヶ関.....	四九四
○最上川の流域.....	四九五
小松町.....	四九五
久保櫻.....	四九六
長井町.....	四九七
總宮神社.....	四九八
荒砥町.....	四九八
八乙女八幡神社.....	四九九
虚空藏山.....	四九九
朝日岳.....	五〇〇
浮島沼.....	五〇〇
明神禿.....	五〇七
左澤町.....	五〇七
寒河江町.....	五〇九
慈恩寺.....	五〇九
谷地町.....	五一〇
白岩町.....	五一一
葉山.....	五一一
○小國谷.....	五二四
子易神社.....	五二四

羽後國.....五二六

○奥羽西線沿線.....	五二二
院内町.....	五二三
院内銀山.....	五二三
横堀町.....	五二五
湯澤町.....	五二六
松岡銀山.....	五二六
岩井堂.....	五二八
三輪神社.....	五二九
西馬音内町.....	五二九
大澤村.....	五三〇
雄勝柵址.....	五三〇
金峰山.....	五三〇
七面山.....	五三〇
鷲坐山.....	五三一
岩崎町.....	五三一
十文字驛.....	五三二
増田町.....	五三三
淺舞町.....	五三三
淺舞八幡神社.....	五三三
沼館町.....	五三三
横手町.....	五三四
蛇崎橋.....	五三五
天平寺.....	五三五
鹽湯彦神社.....	五三六
大森町.....	五三六
波字斯別神社.....	五三七
金澤町.....	五三七
金澤柵址(八幡宮).....	五三八
六郷町.....	五四〇
角田川町.....	五四一
大曲町.....	五四一
農事試験場陸羽支場.....	五四二

角館町	五五二
鮫足瀧	五五三
田澤湖	五五三
田澤湖邊の諸勝	五五四
焼山	五五四
光明寺	五五五
日三市嶺山	五五五
神宮寺町	五五六
八幡神社	五五七
秋田種馬所	五五七
高寺山観音	五五七
白糸瀧	五五八
唐松神社	五五八
荒川銅山	五五八
龜山盛鐵山	五五八
牛島町	五五九
秋田市	五五九
千歳公園	五五九

秋田神社	五五二
八幡神社	五五三
秋田縣廳	五五四
第十旅團本部	五五四
秋田地方裁判所	五五四
第十七聯隊	五五四
誓願寺	五五四
光明寺	五五四
平田胤篤墓	五五五
天徳寺	五五五
泉村の油田	五五五
龜像山補陀寺	五五五
太平山	五五六
三森神社	五五六
日吉神社	五五七
宝塔寺	五五七
全良寺	五五七
面影橋	五五七

右四王社	五五七
秋田古城趾	五五八
土崎港	五五九
追分驛	五六〇
大久保驛	五六一
五城目驛	五六二
副川神社	五六二
三倉岬	五六三
八郎潟	五六三
八龍橋	五六七
船越村	五六七
脇本の城址	五六七
海藏山大龍寺	五六七
船川湊町	五六八
月照山極樂地藏堂	五六八
鶴の崎	五六九
壺島村	五六九
椿村	五六九

双六灣	五六九
小濱村	五七〇
門前村	五七〇
本山登攀路	五七〇
島廻り	五七一
加茂村	五七四
戸賀灣	五七四
湯本村	五七五
眞山	五七五
北浦町	五七五
寒風山	五七六
能代湊町	五七八
能代挽材會社	五七九
東雲製鍊所	五八〇
能代春慶	五八〇
般若山	五八一
日吉神社	五八二
八幡神社	五八二

長慶寺	五八三
三十三観音	五八三
能代川	五八三
水澤銀山	五八三
白布瀧	五八三
八森銀山	五八四
椿銀山	五八四
七倉山神社	五八五
麻生遺跡	五八六
鷹巣町	五八八
米内澤町	五八八
阿仁鑛山	五八八
大館町	五九一
浄應寺	五九二
管棚址	五九三
大葛鑛山	五九四
○日本の海の沿岸	五九四
國見山	五九六
道川と松ヶ崎	五九六
龜田町	五九九
本莊町	五九九
矢島町	六〇一
鳥海山麓の瀑布	六〇三
平澤町	六〇三
上小國村の石油井	六〇三
金浦町	六〇三
象潟町	六〇三
象潟址	六〇四
蛸滿寺	六〇八
八津島神社	六〇九
奈曾の白橋	六二〇
稻村嶽	六二〇
有耶無耶關址	六二三
湯田温泉	六二三
吹浦村	六二四
羅漢岩	六二四

大物忌神社	六二六
鳥海山	六二六
二の瀧	六三三
鳥海山神社	六三三
玉簾瀧	六三四
飛島	六三五
酒田町	六三六
日枝神社	六三〇
日和山公園	六三一
林昌寺	六三三
泉流寺	六三三
小物忌神社	六三三
松嶺町	六三三

目次終

新撰名勝地誌 卷五

田山花袋編

東山道東北部

總論

此處に言ふ東山道東北部は、即ち奥羽地方にして、本州島の北部に位し、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の七國を稱す。往昔は前五國を陸奥と稱し、後二國を出羽と稱したりき。現今に於ける行政区劃上の區別は、磐城の大半と岩代とは福島縣に屬し、陸前の大部と磐城の一部とは宮城縣に屬し、陸中の大部分と陸前の一郡

總論

と陸奥の一郡とは岩手縣に屬し、陸奥は青森縣これを管す。羽後と陸中の一郡は秋田縣の管する所にして、羽前は山形縣の管する所たり。面積四三八六方里、人口四百八十九萬餘を有す。

地勢南方は重疊せる山嶽を以て關東及び北陸に界し、北は津輕海峽を隔て、北海道に對し、東は全く太平洋に瀕し、西は日本海の烟波に對す。山岳は本邦北嶺の脊梁山脈蜿蜒として相連互して此地方の樞軸を成し、殊によく中部に於ては脈絡歴々として鮮かに陸羽の境をなせり。那須火山群、吾妻火山群、藏王火山群、駒ヶ岳火山群、岩手火山群、八甲田火山群等皆この大山脈上にあり。この山脈の東方には磐城地方に阿武隈山脈、陸前陸中に北上山脈ありて南北に横り、前者に添へる阿武隈川は北流し、後者に添へる北上川は南流す。脊梁山脈の西方には、越後山脈、出羽丘陵錯綜して相連り、直ちに鳥海火山脈に接觸す。此の脊梁山脈と東西兩側の山脈との間には、大河に添ふて平野發達し、交通線路またこれを貫きて南北に通じ、市街都邑連珠のごとく

相連る。東方には阿武隈平原、仙臺平原、北上川平原、小河原沼平原等あり。西方には米澤平原、山形平原、御物川平原、秋田平原等あり。而して東方に於けると均しく、最上川は出羽丘陵の縁に添ひて北流し、鳥海火山脈の凹所を破りて西方日本海に注ぎ、御物川に秋田平原を北流して秋田地方に至りて海に注ぎ、岩木川また北流して日本海に入る。此等河水の灌溉ある地方は、土地肥沃にして、此地方に於ける人文發達の素地をつくれど、南方關東、北陸に接する邊、中央山岳の重疊せる邊、及び太平洋海岸に近き北上山脈地方は、概して山深く里遠く、人烟稀少にして、岩手縣の一部の如きは、其の人口密度實に本邦第一の少數を示せり。交通路は陸羽の連絡一に脊梁山脈に遮斷せられたるを以て、到る處上下數里に互る峠を有し、昔時にありては、其交通甚だ不便なりしも、近年奥羽西線の鐵道完成し、東北線の本線と共に東西兩平野を縦貫するに至りて大に其趣を改め、舊時代の峠路は行人漸く稀少なるに至れり。されど其交通は猶關東奥羽の連絡に留り、北越兩羽の連絡は未だ完きに至らず。これを畿内關東

に比すれば、其便不^{べんふ}便^{べん}もとより霄壤^{しやうじやう}も管^{くだ}ならざるを見る。海上の交通に至りても、日本海岸、太平洋海岸、共に南日本^{みなみにほん}に見るがごとき良好なる港灣^{かうわん}に乏しく、開港場^{かいかうじやう}、軍港^{ぐんかう}等一もあることなく、ことに日本海は冬期風濤^{ふうとう}險惡^{けんあく}にして、船路^{せんろ}全く杜絶^{とせつ}するを以て、其繁華は到底これを畿内、東海道地方の海岸^{かいがん}に比すべくもあらず。唯、北端^{ほくたん}に一青森港あり、汽車^{きしや}と連絡して北海道に至るの航路^{かうろ}を開き、本邦中央交通路の一主港^{しゅかう}を成せるを見るのみ。之に加ふるに、人文開化の度、南日本^{みなみにほん}に比して著しく劣り、岩手縣、青森縣に至れば、住民稀少、人烟迷離、宛然古蝦夷^{こえぞ}の面影を存するが如くなるを見るに於てをや。唯、吾人の奇異^{きい}に感ずるは、其の開化の度太平洋海岸よりも日本^{にほん}海地方に於て其發達の著しきことなりとす。秋田地方、山形地方は岩手地方青森地方よりも、比較^{ひかくてき}的多く「上方」の氣風^{きふう}を存し、生活また甚だ窮乏^{きゆうぱふ}せざるを認む。これ蓋し往時北海^{ほくかい}の航路^{かうろ}、盛に開けたるに由れるなるべし。沿革に於ては、屢々皇師^{しやうし}の遠征^{えんせい}を煩はせし蝦夷民族の遺址は處々にこれを認むることを得べく、續いて豪族跋扈^{かうぞくはつこ}の遺

址は、平安朝建築の粹^{すみ}をあつめたる平泉中尊寺^{ひらいづなうせんじ}の建築物に於てこれを見るべし。戦國に至りては、地形に従ひて各豪族各地に割據^{くわつこ}し、阿武隈流域に田村氏、伊達氏あり。北上川流域に南部氏あり。津輕平野に津輕氏あり。最上川流域に最上氏あり。皆な其地に割據^{くわつこ}して覇者^{はしや}の觀を爲し、徳川氏に至りても、猶その故地^{こち}を保てる雄藩^{ゆうはん}少なからず。これを關東近畿に比すれば、其形勢^{けいせい}分布^{ぶんぷ}全く趣を異にせり。かくのごとくなるを以て、産業^{さんげふ}は多く振はず、唯福島縣の蠶業^{さんげふ}製糸業^{せいしつげふ}と、青森岩手の牧畜業^{ぼくちよくげふ}と、秋田青森の林業^{りんげふ}との最も盛なるを見るのみ。鑛山^{こうざん}は小阪、釜石、尾去澤、仙人等あり。銅、銀を産するを以て名あり。この他、風景^{ふうけい}は日本三景の一なる松島あり。松島に劣らじと言はる、松川浦^{まつかわうら}あり。高山また登攀^{とうはん}すべきもの少なからず。吾人は頁を改めて更にこれ等を記述^{きじつ}せんとす。

磐城國

六

磐城國は奥羽地方に於て南方に其位置を占め、東西二十三里、南北二十五里、面積四百二十方里を有す。南は常陸に接し、西は下野岩代及び羽前と堺し、東方一帯全く太平洋に瀕す。十郡あり。中、東白川、西白川、石川、田村、石城、双葉、相馬の六郡は岩代福島市にある福島縣廳これを管し、刈田、伊具、互理の三郡は陸前仙臺市にある宮城縣廳これを管す。地勢は阿武隈山脈南北に縱走して國の大部を占め、其の左右兩邊に僅少の平地を開き、峻嶺高峯殆どなく、唯北部羽前に接する邊に、藏王山番城山等を聳立せしむるのみ。海岸線は平滑にして出入に乏しく、良港灣を有せず。刈田地方にある藏王山は最高千九百六十六米を有する本邦脊梁山脈の一座にして、噴火口、御釜、爆裂火口等を存せる著名なる火山群なり。番城山は其西南に屹立し、標高千三百六十米を有す。南藏王火山の東、白石町の北方に大刈田嶽と稱する孤立せる一小火山あり。高

さ九百米を有するに過ぎず。阿武隈山脈は國の中央に連亘する山脈にして、北流する阿武隈川と南流する久慈川との二縱谷により脊梁山脈を分たれ、一般に高原性を成し、急峻なる峯巒なく、高さ平均四百米内外にして分水嶺は略ぼ南北に走れるを見る。而して此山脈は其東側は急斜なるも西面は甚だ緩なるを以て、東流する諸川は奔放直下して多くは峡谷を成すに引かへ、西走するものは流れ概ね緩にして、溪間所々に平坦の地を存せり。阿武隈山脈の南方には多賀山脈連亘し、六七百米乃至九百米に至る。八溝山は、磐城、常陸、下野の國堺に聳立し、海拔千十米を有し、此山脈中の主峯を爲す。阿武隈山脈には關迦井嶽(七二〇米)三株山(八三七米)蓬田山(九三二米)矢太神山(一一五五米)五十人山(八五四米)羽山(一八〇七米)等あり。國の西境には公大石山、放鹿山、靈山(八六八米)等あり。河川は地形に従ひて概して東西の方向を取り、流路甚だ長からず。唯、阿武隈川の南北に流れ、久慈川の上流の縱谷を成して南走するのみ。阿武隈川の下流に來り合するものに白石川あり。此他阿武隈山脈に發源して

日本海に朝宗するものは、これを南より數へて、鮫川、夏井川、木戸川、諸戸川、小濱川、新田川、眞野川、宇多川等あり。皆な東流又は南流す。國內平地少く、唯阿武隈川及海濱に沿うて少許の地を有するのみ。しかも阿武隈川上流の平原は、その大部岩代國に屬し、下流角田附近に於て、東西六秭、南北十八秭、面積百平方秭を有するにといまる。此他太平洋河岸に扇狀若しくは細長の海岸平野を作れるあれど、いづれも小にして記するに足らず。

沿革 茲に古へ所謂陸奥一州の沿革を綜ぬるに初め國府を宮城郡(今の陸前)に置き鎮守府を膽澤郡(今の陸中)に設く。永承年間國人阿倍賴時、膽澤、和賀、江刺、稗貫、紫波、巖手の六郡を劫略して衣川に據る。時に源賴義王命を以て之を追討し數年の後ち賊悉く平らぐ。清原武則軍功を以て鎮守府將軍に任じ六郡を領して子武貞に傳ふ。寛治年中武貞の子家衡其の叔父武衡と俱に亂を爲す。賴義の子義家父の任を襲ぎ伐つて之を平らげ家衡の異父兄藤原清衡をして國を守らしむ。清衡六郡を領し鎮守府將軍

に任じ陸奥出羽の押領使となり平泉(今の陸中西磐井郡)に居りしが、遂に二國を攘取し其の女婿成衡に岩城郡を與ふ。是を岩城氏の祖とす。清衡の孫秀衡國守に任じ子泰衡之を嗣ぐ。文治五年源賴朝泰衡を誅し葛西清重を留守として陸羽二國を綏撫し其將南部光行、中村朝宗、佐原義連、相馬師常、結城朝光を分封し岩城、田村の二氏は其故地を領す。建武中興北畠顯家國守に任じ鎮守府大將軍を兼ね義良親王を奉じて陸羽二國を兼治し親王尋で太守に任ず。足利尊氏の反するや族弟家兼を以て探題とし之を大崎城(加美郡)に置き家兼の從子斯波家長を國守となし高水城に封す。二人皆官軍に抗して敗死す。既にして顯家西上して戦死し州族多く尊氏に應ず。獨り伊達行朝、南部信長、田村輝顯、結城親朝の四氏官軍に屬す。興國元年顯家の弟顯信國の介に任じ白河に鎮す。同四年尊氏畠山高國を探題とし之を二本松に居らしめ靈山諸壘を陥れし後また吉良貞家を探題として鹽松(安達郡四本松)に鎮し高國と俱に國內を守らしむ。親朝等叛て之に降り顯信西歸し當國大半尊氏に屬す。既にして伊達氏漸く強大、行朝

の子宗遠刈田、伊具、柴田三郡を領し其子政宗、宇多、互理、宮城、名取、黒川及び出羽置賜の六郡を略取す。元中八年將軍義滿當國及び出羽を以て鎌倉管領足利氏滿に隸し應永中氏滿の子滿兼其弟滿貞を當國管領とし篠川に鎮す。十八年滿兼の子持氏南部守行を守護とす。時に顯家の齋津輕郡波岡に據りて波岡氏と稱す。永享の末滿貞持氏に黨して敗死し嗣後國內統一する所なし。天文中伊達政宗六世の孫晴宗出羽の米澤に移り兵勢益々熾んなり。將軍義晴以て探題となす、是時に方りて蘆名、相馬、南部、大崎田村、結城、大内、二本松、二階堂、岩城、石川の諸氏競ひ起り互に相呑噬す。天正の末南部信直斯波氏の地を併せ晴宗の孫政宗二本松、二階堂二氏を平らげ蘆名を滅し石川、大内を降して盡く其地を有し尋で會津郡黒川に徙る。十八年豊臣氏東征し政宗の會津仙道の地を收めて蒲生氏郷に賜ひ黒川に治して當國及び出羽の守護たらしめ結城、田村、大崎、葛西の地を没し岩城、相馬の領地舊に仍り南部、津輕の封を定め葛西、大崎の故地を木村秀俊に賜ひ關一政を白河に封す。又政宗の領せる米澤及び伊達、

信夫、刈田三郡を削りて氏郷に加封し秀俊の地を割きて政宗に賜ひ政宗終に治を仙臺に定む。後、蒲生を宇都宮に移し上杉景勝を其の故地に封す。明治初年陸奥を分ちて磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥の五ヶ國とし當時磐城國內に封を受ける者中村に相馬氏、棚倉に阿部氏、三春に秋田氏、泉に本多氏、湯長谷に内藤氏、磐城平に安藤氏、守山に松平氏あり。明治四年守山常陸の松川に徙り尋で按察使府を白石に設く。又之を改めて角田縣とし既にして皆廢して平縣を置き後ち改めて磐前縣とし明治九年福島縣を置き國內十四郡其の管轄に屬す。

●交通 官設東北線は下野黒田原より來り、白河驛に入り、西白河郡の中央を横斷して、矢吹驛を過ぎ、直ちに岩代國に入る。されど鐵路は全く阿武隈川に沿ひて北走せるを以て、石川、田村の二郡は皆なこの鐵路を主要なる交通路をなせり。福島縣より宮城縣に入れば、此線路再び國の刈田互理地方に現はれ、白石、大河原等を経て陸前に入る。海岸地方には官設常盤線あり。常陸の北部平瀧町より來り、二三驛を過ぎ

て石城郡の中心にして濱街道屈指の都會なる平町に達し、四倉、久の濱等を経て富岡町に達し、愈北して、浪江、小高、原の町等所謂相馬地方を経て、その一中心中村町に達し、互理郡に入り、遂に陸前岩沼に至りて、官設東北線に合す。この二線路は國の東西を南北に縦貫せる主要交通路にして、この兩地方を東西に連絡する道路は、福島より中村に至るものと、川俣より浪江に至るものと、三春より富岡に至るものと、三春より小野新町を経て平町に至るものと、石川より平町に至るものと、五路あり。又南方白河より棚倉を経て常陸に出るの路あり。

●産業 米は産額少なからざれども、其質は良好ならず、磐城米の名は寧ろ其の量を以て世に聞えたるが如し。養蠶は各地多少の産あり。牧馬は相馬地方を以て中心となし、三春地方これに次ぐ。煙草は田村石川兩郡に産し、田村郡三春町は其の市場たり。地に葉煙草專賣支局あり。又棚倉地方に菫蕪を産す。水産は、濱海道沿岸の地四十里にわたり、奥羽地方に於ては屈指の地たり。鯉魚を以て第一となし、鱒魚これに次

ぐ。鯉節の生産また甚だ多し。鹽は小名濱浦松川浦等を其産地となす。陶器は相馬郡中村町及び双葉郡大堀村に著名なる相馬焼あり。地質の堅緻なると馬の繪を描けるとはその特色なり。

○官線東北線沿道 白河、泉崎、矢吹を経て、岩代國に入り、須賀川、笹川、郡山、日和田、本宮、二本松、松川、金谷川、福島、長岡、桑折を経て、再び磐城の北部に入り、越河、白石を経て陸前に入る。線路の半は岩代國に屬したれど、阿武隈川東岸は磐城なるを以て、交通多く此線による。棚倉町は白河より至るべく、石川町は須賀川より至るべく、三春町は日和田より至るべし。牧馬の盛なる地方なり。

●白河町 宇都宮より五十哩を隔て、下野國豊原驛の次驛を置く。里程東京を距ること四十九里餘、福島を距ること二十一里にして、海面上凡て千二百尺の高所に位し、北には阿武隈川の蜿蜒として東流するあり、西には那須、甲子の連山起伏し、南は八溝山の餘脈これを蔽ふ。而して東方の一面開けて所謂五箇耕土と稱する平地をなす。人口

凡そ一萬五千六百餘、古來陸羽に入るの咽喉として、商業最も盛なり。官衙には西白河郡役所を始め警察署、監獄署以下の設置あり。町の繁華區は中町、本町にして、停車場は字舊郭内に置く。白清館は白河唯一の蒸氣器械製絲工場にして、その他坐繰製絲場甚だ多し。町に於て春秋の二季に馬市を開く。秋季ことに盛にして、出場馬匹の數凡そ一萬頭に餘るといふ。寺院の重なるものに關川寺、皇德寺、龍藏寺、永藏寺、小峰寺あり。關川寺は延元元年結城宗廣の草創と稱し、皇德寺は往時後白河法皇の勅願所なりといへり。道路は鐵道東北線及び舊陸羽本街道の他に、茨城街道の北は岩代の若松市に通じ、東南は棚倉を経て常陸國に通ずるあり。若松市へ十八里十五町、棚倉町へ五里十二町、岩代の須賀川町へ六里十八町を隔つ。

白河城址 白河町の北端にして阿武隈川に臨めり。興國正中の交結城親朝これを築きて小峯城と號す。後その子孫豐臣氏に領地を奪はれて一度蒲生氏の所有となり、寛永の交丹羽長重の時に至りて更にこれを増築し、その規模を大にしたるものなり。爾

後封をこの地に受くるもの數氏、慶應年間阿部氏棚倉に移され、戊辰の際會津兵此に據りて大に官軍に抗し、交戦數日城遂に陥りたり。されば戊辰の役戦死者の墓碑は白河に甚だ多く、官軍戦死碑あり、銷魂碑あり、曰く薩長大垣戦死碑、曰く阿部藩士戦死碑、官軍の忠勇を銘するの碑は東軍の幽魂を慰するの碑と相接せんとす。而して、城址は繞すに阿武隈川を以てし、國內の諸山皆な環拱擁立、蒼翠掬すべく、鐵道線路は直に外壁に沿ひて通ず。列車の窓より目當りその斷礎遺基を望めばうたゞ感慨に堪へざるものなくんばあらず。

一書に曰く、白河口は實に奥羽の咽喉に當る。北は勢至堂口より若松城に通じ東は三春、二本松、福島、南は棚倉、平に通ず。而して西南より進入するにはその本道白坂あり、右方は旗宿あり、左方に黒川口あり、その險隘かくの如し。東軍これに據りて遙に會津外砦となる。時これ慶應四年閏四月初旬、薩長の別軍及大垣の兵白河口に向ふ、時に仙臺、二本松兵官軍に應じ、白河城を守る。閏四月二十日東軍白河城を陥る。先是幕將大島圭介の總野の間に敗れて會津に投するや、其敗兵も亦追隨して稍集る。此に至り大島等、勢至堂口より進みて白河城を襲ふ。城兵支ふる能はず、東軍火を城下に放ち、三面齊しく逼る。勢急雨颯風の如

く、當るもの摧げざるなし。二本松の兵之に應じ、門を開きて之を入る。東軍倉皇後門より遁走す。偶會津の兵來り會し城を守る。仙臺以下列藩、亦皆會盟聯合して會津を援け、官軍に抗す。是より白河城東軍の據野と爲る。五月一日黎明官軍、四道より進撃す。一は白河の本道より、一は黒羽より城西、一は白河の田徑を経て城東に、一は本道より山林を経て同時に城に逼る。本道の軍河古原に近づくに及びて東軍と衝突し、互に奮闘し、旌旗地に蟠り、鎗砲天に震ふ。本道の官軍力戦屍を踏えて進み、東軍少しく退く、官軍機に乗じ愈奮ふ。巨砲の聲響撃雷轟に異ならず、煙硝天を蔽ひ、東軍の中央爲に動き、兩翼も亦漸く退く。官軍則總進撃に移り、本道の軍は先づ右方丘陵上の敵を逐ふ。東軍已に敗る。然れ共敗兵退きて城南の山を保つ。本道及左翼の軍、陣を右に轉じて之に逼り、右翼の軍又東軍の左側に逼る。是に於て仙臺、棚倉の兵殆んど挾撃を受けて、退かざるを得ざるに至る。東軍遂に支ふる克はず、白河城遂に官軍に歸す。此戦午前六時に始まり十一時に終る。東軍の地形最も宜を得たり。官軍の陣地亦不可なるにあらず。然れ共一步を退く時は卑地に下るを以て、不利なりしなり。官軍已に白河城を占領す。其道諸方に通ずるを以て、東軍の進撃する殆ど間斷なく、官軍大に苦む。蓋し官軍此地を占むるや、直に勢至堂口より會津に進入し得可きを以て、會津藩は南方諸藩に令して官軍を牽肘せしむ。官軍長驅して進む克はず、唯日夜斥候を出して警戒し、以て後援の至るを待つのみ。

宗祇戻の碑 白河町字櫻町にあり。文明中宗祇法師の故事を傳ふ。碑は文政年間

建置なり。

南湖公園 白河町より南方十八町餘を隔て、小鹿山腰にあり。湖、別名を關の湖と稱し、周圍二十町に餘る。湖心に玉女島あり。辨財天を祀る。山に沿ひ湖に臨み共樂亭あり。春は櫻雲山を封じ、秋は錦繡枝に滿ち、影を激澗たる波中に投じて、風景極めて賞すべし。もしそれ明月湖心に湧くの時、舟に棹して半夜の清遊を試むれば、金波碎け銀波走り、爽快言ふべからざるものあり。湖は久しく廢池たりしを寛政の交白河樂翁公が開鑿したるものにして、湖の南岸に南湖開鑿碑あり。一讀、その經營の一端を知るに足る。また園に十六景十七勝の目あり、即ち共樂亭、明鏡山、萬花岸、濯錦岡、鳴秋原、玉花泉、松濤里、問月嶺、逗月浦、兼葭洲、玉女島、使君堤、鹿鳴峰、曉月浦、五往村、一字松の十六景、關の湖、共樂亭、鏡山、真萩ヶ浦、錦岡、松虫の原、常磐清水、松風の里、月待山、月見浦、下根島、御影島、千歲堤、小鹿山、有明崎、八聲村、千代の松原の十七勝これなり。景にはことごとく詩を賦し、勝には各々和歌

を題し、石に刻してこれを湖畔に建つ。

白河關址 白河停車場の南二里半、古關村大字旗宿にあり。伊勢鈴鹿の關、美濃不破の關と共に日本三關の名甚だ高く、その創置は凡そ四百餘年前の昔にあるべしといふ。著名なる能因法師の歌「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」の和歌は、足跡、事實この地に及んで詠めりしにはあらずとするも、また以てその行路の容易ならざりしは窺知するに足らん。地は實に往時の陸羽街道に當り、陸奥に入るの咽喉とも謂ふべし。蓋し宇都宮より板戸、鹿子畑、黒羽、箕澤等の小驛を過ぎて、この關門に至れるものにして、後世の奥州街道に對してこの路を關街道と稱せりきといふ。思ふに交通不便の昔時にありては、陸奥は實に遼遠の地、僻陬の域にして、京人一度この關を超ゆれば、恰も漢人胡に入るの思ありたらん。今や東京より白河に至る僅々半日程に過ぎず、これを京阪の地よりするもまた二日を要せず。今にして「秋風ぞ吹く」と詠けん昔を追想すれば、時勢の變化文明の進歩、今更ながら驚かるゝ許り

なり。而して旗宿の地たる關山高く峨々として聳え、頂上に一古寺あり。地高く一路その間を通じて岐路の出づべきなく、寔に要害の地點なり。また白河と稱する一溪流あり、源を旗宿の南方里餘のところ發し、流れて古關址の下を過ぐ。白河の名は實にこれより起ると傳へらる。河の畔に九重楓あり、古歌に白河關の紅葉を詠めるはこれなり。近年この景を採り、服帛に正葉摺となして白河土産とせり。また路傍に村社白河神社あり。即ち關守の内館址とす。關址はもと久しく湮滅してその所在を知らざりしが、寛政年間白河樂翁公地理に考へ、誌書を参照して初めてその地が關址にあたるを確め、碑を建て以てこれが標とせり。今、白河神社の前にあるもの即ちこれなり。而して關門起廢の年代に就ては、二三の異説ありて未だこれを詳かにせざるも、要するに官設の關門にあらずして、この國の國司の私に設けたるものゝ如し。

『つてあらば都の人につげやらんけふし河の關は越えぬと』を始めとして白河關に關する古人の名什甚だ多し。此には故人の紀行一二を引かん。釋宗長が『都のつと』に曰『春より都をいで侍りしに、またこの秋の末

に、白河の關をこえ侍りしかば古曾部の沙彌能因が「都をば霞と共に立ちしかど」と詠じけるは、まことなりけりとおもひあはせられ侍り。かの能因が、この歌のために、猶その境にいたらでよめらんは無念なりとて、東へくたりたるよしに、しばしこもりぬて、この國にて讀みけると披露しけるとかや、一度はうるはしく下りけるにや。八十島の記などいふものかきおきて侍り。芭蕉の『奥の細道』に曰く『心もとなき日數かきなるまゝに、白河の關にかゝりて、旅心定めぬ。いかで都へとたより求めしも、野らなり。中にもこの關は、三關の一にして、風騒の人心を留む。秋風を耳にのこし、水葉を面影にして、青葉の梢、なほあはれなり。卵の花の白妙に、茨の花の咲き添ひて、雪にも越ゆるこゝちする。古人冠を正し、衣裝をあらためしことなど、清輔の筆にも留め置かれしとぞ。卵の花をかさしに關のはれ着かな、曾良』

感忠銘 白河町の東一里許りにして、棚倉町に至る途中、大沼村大字棚山にある巨碑なり。山は阿武隈川に沿ひ甚だ高からずと雖も、岩石巖々として聳え、老樹鬱々これを點綴す。地はもと結城宗廣と同親光の舊址にして元弘中宗廣は源顯家に従ひ、義良親王を奉じて西上し終に病を得て没す。義良親王、源顯家、同顯信も曾て暫らくこの地に據りしといふ。永祿年間小峯氏の陥るゝところとなりて終に廢城に歸せり。後、

山上の斷崖高さ一丈八尺、幅九尺の間を削りて感忠銘と刻す。題額は松平樂翁公の書にして、その文に曰く『儼然深秀、在我白河東者結城氏墟也、我望之而有所感焉、元弘建武間士氣衰、天下擾々視利避難、獨宗廣親光忠烈凜々、憤發唱義欲率天下而與之、不幸弗克以殞身、然猶東州士民、知戴南朝之天者實亦其力也、一時忠烈南公之外無能稱焉、而今我民鮮知其爲州人、奚以興千餘風、內山重濃家於墟下、捐財爲予勒銘、表而出之、公嘉此舉題賜三大字、以刻上方、嗚呼二氏之忠魂、數世後得此偉標焉、其心含笑於地下吾輩亦與有榮也、銘曰、峭乎此山、維石巖々、溪風肅然、劍佩夜還、踪跡不刊、輝映千年、民莫自棄、國能生賢、文化四年秋九月、廣瀨典識、賀孝啓謹書』

棚倉町 白河町の東方五里にあたり、東白河郡の西北山間にあり。始め立花宗茂の采地にして、後、白河の阿部氏轉封せられてこの地に移る。徳川氏の世にありては、この町は一種左遷の地として幕府の意を損せし諸侯の往々移封されしといふ。蓋し、地味瘠せてその收納比較的僅少なりしを以てなり。今、町の人口凡そ二千六百を算し、

東白河郡役所を置く。白河町より常陸に至る街道はこの地を通じ、白河より馬車の便あり。

都々古別神社 棚倉町大字伊野上及び近津村大字八槻の兩所に鎮す。共に國幣中社に班し、往時陸奥國の一の宮といふ。祭神は味耜高彥根命及び日本武尊にして、味耜高彥根命は即ち大國主大神の御子なり。神寶として棚倉の社には日本武尊の鏡、源頼義父子奉納の太刀二口を藏し、近津の社には義家進奉の太刀その他を藏せり。社の縁起に至りては陸奥風土紀に尤も詳し。

此所に白河町以西の名勝を記せん。

軍馬補充部白河支部 白河町の西方約一里半にあたり、陸羽本街道に沿ひたる西郷村大字小田倉にあり。

福島種馬所 同じく西郷村大字小田倉にあり。明治三十二年七月の設置とす。
甲子温泉 西郷村の山間にして、阿武隈川の水源に近く、白河町より西方五里二十五

町を隔つ。途中、白河を距る二里折口といふ所より阪路漸く峻に、足指仰ぐ。更に行くと二里にして高清水に至る。此所より一里二十五町にして温泉場に達するを得べく、これを甲子新道となす。地は大倉、庭鳥、朝日の連峯に圍まれ、阿武隈の水流は西南より來りて温泉場の前を貫流す。土地高燥にして深邃、閑靜を好む客には屈竟の避暑地なり。泉質は鹽類性に屬し、溫度華氏の百二十度を保つ。温泉の近傍に瀑布多く、これを八十八瀧といひ、中にも大熊雄瀧は高さ三十丈幅一間半を有し、或はこれを阿武隈川の水源なりといふ。大熊雄瀧はその下流一里にありて、高さ三丈、幅三間といふ。その他衣紋の瀧、索麵瀧など就れも壯觀なり。

甲子山 西白河郡及び岩代國岩瀬、南會津の二郡に跨る。標高凡そ四千八百二十五尺、甲子温泉より登路三里にしての山頂に達すべく、風景は秋季を以て尤も佳とす。白河樂翁公の「關の秋風」に曰「去年九月の初、甲子の山へ行きぬ。城をば曉頃に出でしに、四五里にして、夜はあけたり。し、だひらといふ所は、平なる野の、はて

は山に續きたり、眺いとおかし。江の澤の邊、木立などいふ所は、皆紅葉のみ生ひたちて、萬山一紅ともいふべし。猿の聲などもしたり。かきがね橋といふは、筏などの様に、木の枝あみならべて、山の岨へ懸け渡したり。蜀の棧などいふも、此の類にやあらむ。其の橋渡りて見やれば、清き瀧の、かしこの岩に、この石にあたりて、白玉くだくるやうになむ。實に、此の景色は、甲子山第一とも云ふべし。是よりさきは、坂の險しさいふべくもあらず。いと苦し。温泉景色もいとおかし。予、道すがら書きて、都の苞にせばやと思ひたれど、言のはも筆も、いかに文くはへ、花さかせ、筆を舞はし、五彩を施したればとて、萬分の一にもいかでおよばむ。白川に至りて甲子の山見ざらむは、孔子の門過ぎて、入らざるが如し。かしの山に至りて、楓葉の景色知らざらむは堂に至りて、室に入らざるが如し。もみちの紅、水の白妙よりして大なる石は、十歩、二十歩におよび、小なるは、目にもおよばず。みな其の形をなしつゝ、こと／＼の色を顯して、水により山に添ひ、谷に臨み、坂に横たはるさま、い

ひ盡しがたし。まいて風雨霜雪月花の折々、うつり行くけしきは、いかゞあらむ。道の峻しさを厭ひなば、又、かゝるながめもしらし。虎穴に入らざれば、虎兒を得ずといへるに、ひとしとやせむ。

白河町の東七里岩代須賀川町の東凡そ五里に石川町あり。

石川町 石川郡役所の所在地にして、人口三千四百餘を有す。もと石川氏の陣營ありしところにして、四面峰巒起伏し、交通至便といふべからざるも、たゞ東方阿武隈川の沿岸には土地開けて多く田園あり。北州川は驛西を過ぎて阿武隈川に合す。道路には三春別路及び御在所街道と稱するものあり。前者は棚倉町より起りてこの町を過ぎ以て三春地方に至るものにして、後者は須賀川町より起り、またこの町に由りて遙かに濱街道に通ずるものなり。その他釜子に出で、白河に達する街道あり。町に天臺宗青龍寺あり。また春季この町に於て催さるる馬市は甚だ盛なり。

石都々古別神社 石川町の西北部にあり。延喜式内白河七座の一と説くものあれど

も、信偽判ち難しといふ。

再び白河に返りて、鐵路に依れば、阿武隈川の鐵橋を渡りて矢吹驛に至る。その間に泉崎驛あり。

●矢吹町 白河町の北方三里にあり。人口二千餘、附近に穴居時代の遺蹟古墳等多く、また、三光稻荷、瀧八幡、觀世音、馬尾瀧、景政寺等の諸勝あり。景政寺は三城目村にありて、鎌倉權五郎景政の古蹟を説く。

●入江農場 矢吹停車場の南方二里半、滑津村にあり。その規模宏壯にして支場を矢吹町に置く。

矢吹の次驛は須賀川驛にして、既に岩代國に屬す。此所には便宜上猶鐵路に依りて國內の名勝を記せん。

●乙字瀧 岩代國須賀川町より一里半を隔て、石川町に至る途上、泉村大龍崎にあり。又の名を龍崎瀑布或は石川瀧といふ。阿武隈川の奔流此所に來りて斷崖を落下し、一大瀑布を爲すものにして、その高さ二十尺餘、幅二百間、屈曲して乙字形を爲す。

故にその名あり。而もその兩岸は懸崖壁立し、南岸瀑布に望みて不動堂あり。尤も流を見るに宜しと稱せらる。また、瀑布の東南少許の丘上に一碑あり。「瀑布湧出山中、欲見龍門亦鮮兮、宜與盧峯爭觀、飛流映日紫雲籠」の七絶を刻す。他にも芭蕉翁の句碑あり。澤氏の紀文に曰「龍崎村、山路崎嶇、泉聲與山相答、下山則遭隈之岸上也、所謂瀑布、非瀑、又非簾、遭逢水中石避也、水廣五十餘丈、其壁作乙字勢、徑二百餘丈皆飛泉也、有高有卑、卑者水勢怒張、高則作瀑作簾、或如繩索、或碎線、碎者如玉、而落飛絮如柳絮、而霏々焉、真一奇觀也」

須賀川驛を過ぎて郡山驛に至る。同じく岩代國にして安積郡に屬せり。三春駒を以てその名天下に揚れる三春町は郡山の東北方三里に當る。

●三春町 岩代郡山町より鐵道馬車あり。國內田村郡に屬し、郡役所以下の公衙を置く。人口、約九千四百、舊秋田氏五萬五千石の城邑にして、四境丘陵を負ひ、地勢高低あるも道路八達運輸に便にして、人烟稠密、商業殊に繁盛なり。所謂三春駒の名は

その名天下に高く、田村一郡にして、その産額年に二千餘頭に及ぶといふ。また、多く煙草を産し、町に専賣局葉煙草收納所あり。道路には、岩代よりこの町を通じ、更に東方常葉町を経て雙葉郡の大野町方面に通じ、以て常磐線の鐵路に連絡するものあり、また町より中郷七郷を経て小野新町に達し、更に石城郡の平町に通ずるものあり。岩代の本宮町へ四里二十二町、常郡常葉町へ四里、小野新町へ六里、石城郡平町へ十九里二十六町を有す。

三春城址 三春町の中央に屹立す。往時坂上田村麿の子淨野の所築と稱し、維新廢城に歸して、今は原野及び耕圃と化せり。山上よりは西南北の諸郡を望むべく、風景佳なり。また地に三春大神宮を鎮す。宮は縣社にして、元祿年間城主秋田氏の勸請するところ、境内に櫻樹を植ゑ、地域また幽邃なり。この他なほ三春町に福聚寺及び龍隱寺あり。

此所には三春町より石城郡平町に至る沿道の名勝を記せん。

瀧櫻 三春町の東南一里餘、中郷村大字瀧にあり。天文年中の栽植と稱し、高さ四丈二尺、周圍三丈二尺に餘れり。

小野新町 三春町の東南六里餘にあり。山間の一驛市にして、これより東南十一里にして平町に出づるを得べし。町に小野篁の故事を談す。

霧島嶽 一に大瀧根山または大嶽といふ。阿武隈山脈中の最高峯にして、標高三千七百六尺を有し、瀧根地に管す。山の西南半腹に鬼穴窟あり。

三春町より東方常葉町を経て、雙葉郡に通ずる街道を都路街道といふ。

常葉町 三春町の東四里餘にあり。大瀧根川水源の峡谷を占め、人口四千二百餘を算す。古來馬匹を産するを以て名高く、所謂三春駒なるものは多くこの附近より産出せしものといふ。春秋二期の馬市甚だ盛なり。

○久慈川上流地方 東白河郡の地にして、棚倉町以南是なり。白河驛より五里にして棚倉町に至るは前に記するが如し。これより近津、八槻を経て、常陸に向ふ。

●久慈川 常陸國久慈郡に出で、海にそぐ。故に久慈川の名あり。水源は東白河の中に發す。數流合湊するも、その本源は皮子原、旗宿の邊の山野に發すといふ。東流して棚倉町に至り、更に南に折れて常陸國に入る。中游、下游共に常陸國に屬せり。茨城街道は棚倉、豐里間に於てはその水流に沿へり。

●湯岐温泉 東白河郡笹原村大字湯岐に屬し、棚倉町へ六里を隔つ。地位東西に連れる山腹に位し、前は溪流を隔て、八岳に對し、後は丘陵起伏して數里に涉り、車を通せず。泉質は單純泉にして、温度は華氏の百度より百十度の間にあり。

●矢祭山八景 茨城街道に沿ひ、高城村大字内川に屬し、棚倉町の南六里餘にあり。山は久慈川の急流に臨みて奇巖怪石重疊し、山上老樹の深鬱たる間に一祠あり。矢祭神社といふ。往昔源義家與羽追討の歸途一箭を地上に挿みてこれを祭る故に是名ありと稱ふ。八景とは即ち笥子巖、夢窓瀑、渡月橋、匣岩、龍神窟、猿の開山、日月岩、矢祭祠等にして、皆な久慈川沿岸半里の間にあり。風色頗る秀麗にして夏季吟節を曳く

者多く、試みに扁舟に棹さして村内大字植田より流を下れば、山水は笑ふて客に對するが如く、奇巖怪松一去一來、人をして刮目違あらしむ。また陸行者は棚倉より自由に腕車を驅るを得べし。

○官設常磐線沿道 國の東方海岸の交通線路にして、勿來、植田、泉、湯本、平、四谷、久之濱、廣野、木戸、富岡、長塚、浪江、小高、原、鹿島、中村、新地、阪本吉田、互理、を経て陸前岩沼に至る。石城、雙葉、相馬、互理、四郡の地なり。平町は南部の主邑を成し、中村町は北部の主邑を成す。海岸灣入少く、良港に乏しと雖も、水産の業甚だ盛なり。この海岸地方より中部地方に出づる道路は平、石川町間、平、小野新町、三春間、富岡、常葉町、三春間、浪江、川俣、福島間、中村福島間等あり。中村福島間を除きては大抵車を通せず。

●勿來驛 汽車、常陸國より一隧道を越ゆれば地は既に磐城國石城郡にして、岩石の起伏、松原の連続、波濤の掀翻、そらろに旅客をして佇立願望去るに忍びざらしむる

ものあり。蓋し、常磐線中最も風光の明媚なる所なるべし。勿來驛は即ち磐城國內に

三二

於ける常磐線の第一次驛なり。

勿來關址 勿來停車場より十五町にして達す。所在地を窪田村大字九面と稱し、勿來驛の西南に當れり。先に陸羽街道に於て白河の關址を見、今また濱街道に於て勿來の關址を見る、往時は共に陸奥に入るの關門たり。而して前者は能因法師の歌に依てその名聞え、此は源義家の詠と稱するものに依て頗る人口に膾炙す。今、關址を傳ふる山上に一古碑を存し、これに義家の所謂「ふく風をなこそこの關と思へども道もせにちる山櫻かな」の國風を刻せり。松樹數株その邊りに蟠屈す。頂上の眺望また曠闊にして、西北の兩面は連山波濤の如く、東南の一方は碧波渺漫として、弓形の一



大灣、遙に小名濱港に連り、松川磯長汀十里の景また見棄がたきものあり。古關址の下を名古屋坂といふ。往時より幾多の櫻樹ありしが、近世全く枯槁し、今はたい若木の花のみ淋しく春を飾れるを見る。また、山下に碑の摺文を賣る家あり。古の櫻の化石せしといふものをも商ふ。これを聞く、關址は昔の奥州街道に當り、當時は波打際に接し居たりと。また地質學者の説に據るに、常磐の東海岸は漸次隆起して陸地となるものなりと。右の二説に合考するも此所を以て關址と定むるは尤も信憑すべき説たるに似たり。この關を咏せる古歌頗る多し。此所にその一二を採録すれば、小八條御息所の詠に曰『立寄らば陰ふむばかり近けれと誰か勿來の關をすゑけん』源師賢の歌に曰『東路は名こそこの關もあるものをいかでか春の越えて來つらん』

普通單に勿來關址のみを探らんとする旅客は、勿來停車場に下事して濱街道を十町ばかり後もどりをなし、鐵道線路なる遠方合圍柱のある附近より狭き山道にさしかるを以て順路とすれど、もと此地常陸の平潟灣に近くその距離わづかに一里餘に過ぎざるを以て、關址を訪ふものは必ず平潟に遊び、平潟町に到るものは

また必ず關址をさぐり、以てこの兩山水を併べ賞するを以て得策となす。此所に今平潟より道順を記せんにまづ平潟より黒浦の洞門を過れば、再側に民家軒を連れたるに市街あり。即ち黒浦村なり。民家のつくるところ更に一洞門を迎へ、これを潜りて行くこと七八町にして即ち窪田村大字九面の海濱に出づ。此所は左右に岬角突出し、その間に洲濱ありて、近く奇巖の突兀として峙つを望み、平潟とはその趣を異にして風景や賞すべし。字關田切通しにかゝる街道の傍に古關道と記せし標石のある所より左折して鐵道線路を横切り、山にのぼること八町にして關址に達す。即ち碑石のあるところなり。而して碑の左に隣りてまた小碑あり。芭蕉翁の句を刻す。又近傍に石碑二つを置く。關東の宮、奥州の宮と稱するもの即ちこれなり。

●松川磯 勿來停車場の東方一帯の海岸をいふ。白沙青松、その風光の明媚なる東海線路に於ても多く得べからざるの景致なり。今、海水浴場を設く。

勿來より植田、泉の二驛を経て湯本に達す。兩驛とも海に離れて、風景の見るべきなし。

●小名濱港 泉、湯本兩驛より輕便鐵道の便あり。神白岬その東に突出し、西方の劍崎と相對して海灣をなす。港内狹少、且つ淺水にして、巨船の碇泊に便ならざれども、ま

た人口五千七百餘を有し、市街繁盛なり。地に水産試験場、鈴木製鹽所あり。鯉節を以て名産となす。平町へ三里二十町、湯本へ約三里を隔つ。また地の東北二里豊間に燈臺あり。

●住吉神社 玉川村大字住吉にあり。延善式内磐城七社の一にして、寛永年間内藤氏の改造に係るといふ。また同村林城に禪長寺あり。大同年間の開創にして正親町院の勅願寺に充てられきといふ。

●湯本村 泉の次驛にして、平町に三里を隔て、その間に綴驛あり。村は多く石炭を産出し、就中小野田炭の輸出最も多し。人口約三千百、市街繁華にして、品川白綴瓦會社工場その他炭鑛會社の事務所等少なからず。西方石川町を経て岩代の須賀川町に達する街道あり、それを御齋所街道と呼ぶ。

●三函温泉 俗に湯本温泉と稱し、湯本村にあり。泉量多く湧出所五十餘ヶ所に及ぶ。されど地風光の見るべきものなく、浴舎また街道の塵埃中にありて、山水の病を癒す

るに足るものなし。且つ附近に石炭山あるを以て工夫等來集し、噴騒甚し。されど旅店には大なるもの多く、交通至便にして、海濱の鮮魚を直ちに膳に上すことを得るを以て四時の浴客少なからず。温泉の熱度は華氏の百二十七度を保ち、疥癬、痔疾、疝痛婦人諸病、癩麻質斯、痛風等に効ありといふ。

●●●●●●●●
温泉神社 三箇温泉場の南隅にあり。式内にして、大己貴命彦名命を祀る。

●●●●●●●●
綴驛 平町の南一里にあり。常磐線中石炭産出の最も多き地にして、入山炭、白水炭、岡田炭、山口炭等皆なこの地より産出す。

磐城炭田は常磐二國に跨る。即ち南は常陸國友部村附近に起り、磐城國石城郡湯岳及び國伽井岳の東麓にて厚層となり、なほ北延して同郡野上村に及び、薄葉状を呈して遂に消滅するものにして、その間延長及約二十一里に達し本州中最大の炭田なり。これを夾挿せる地質は概ね第三紀の中新期に屬する凝灰質及び砂岩の累層より成り、始原紀層に屬する阿武隈山脈の主軸と相井走し、概ね南北の走向を保ちてその東麓を被覆し、東方に向けて緩斜せり。炭質は褐炭に屬し、九州及び北海道産出のものに比すれば劣等なるを以て、船艦用には適せずと雖も、諸般の工業及び燐燻用としてその需用最も廣く、ことに東京を距ること遠からず、且

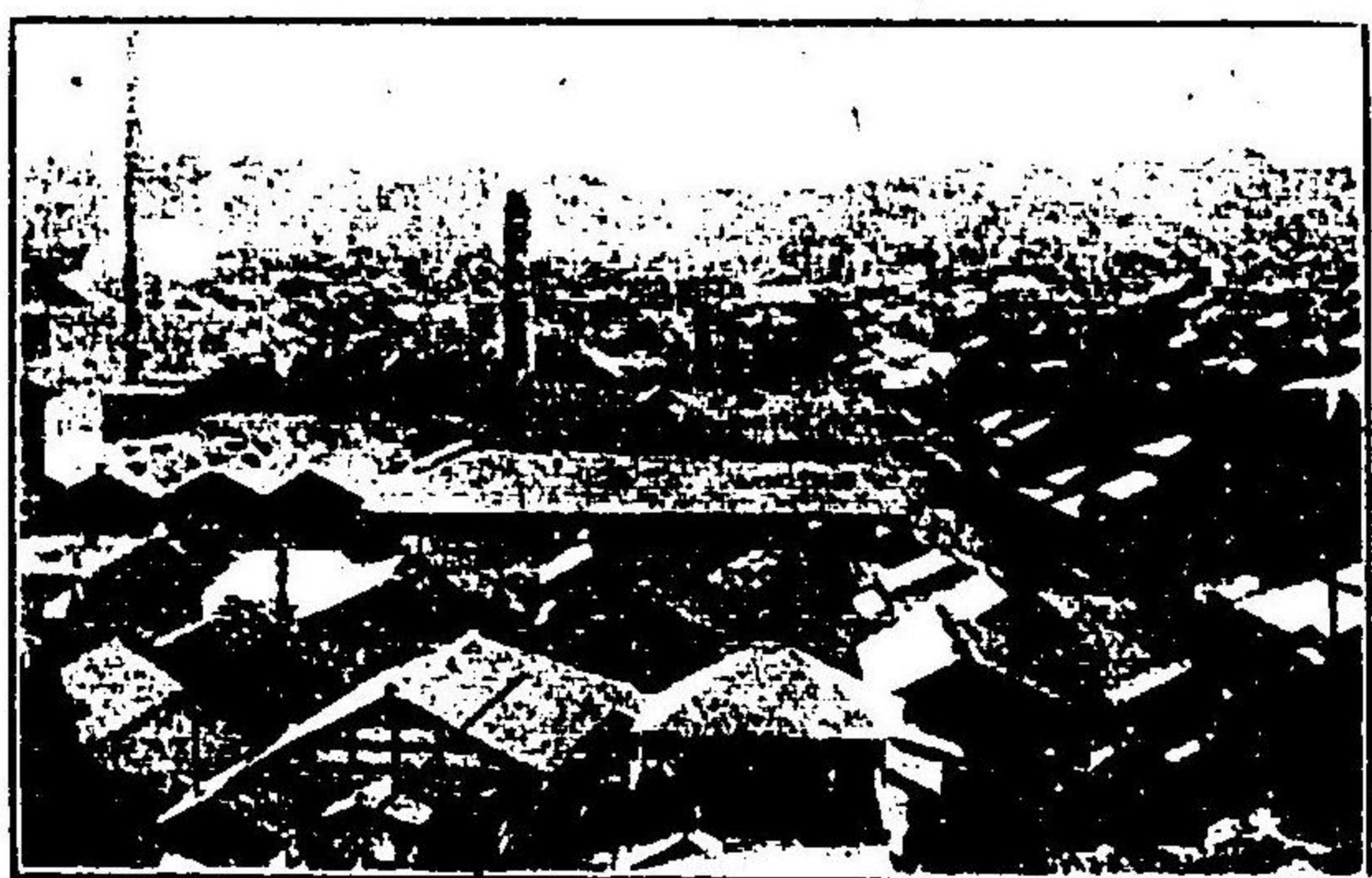
つ常磐鐵道の便あるが故に、その産出の大部分は東京地方に運輸販賣せられ、逐年採掘高を増加するもの、如

し。而して現今操業中の主要なるものは皆な石城郡中に存在す。その重要なるものを舉ぐれば、磐城炭礦會社入山採炭株式會社、好間炭礦株式會社、三星炭礦株式會社、玉城炭礦株式會社、城戸鑽炭礦株式會社、越賀炭礦株式會社、隈田川炭針株式會社、津川炭山、山口炭礦、岡田炭礦、勿來炭礦株式會社等あり。

●●●●●●●●
平町 濱街道中、水戸以北第一の都邑にして、往昔磐

城平と稱し、安藤氏の采地なり。城址、今猶ほ停車場の上に存す。人口約一萬二千九百餘、夏井川の南に位す。

且つ、地は濱街道と磐城街道との交錯點に衝り、鐵道は町の東西を貫通するを以て、交通至便市街繁盛なり。今、石城郡役所、縣立中學校等の建物を置く。磐城炭礦に近接するを以て器械工業の業甚だ盛に、磐城耐火煉瓦會社、日本耐火煉瓦株式會社などあり。また、町の西南夏井川に長さ九十餘間の長橋を架し



平町

尼子橋と名く。これ七百年の昔尼子御前人民の不便を憂ひて初めてこれを架すと言はる。その他袋中寺、長源寺あり。所謂磐城街道はこの地より西北小野新町を経て三春町、郡山町に達するものにして、三春町へ十九里二十六町、郡山町へ二十三里二町を隔つ。

子・鍛倉神社 平町の西北揚土臺にあり。大同年間の創建式内の社祠にして縣社に列す。その地高燥、平町の人煙を脚下に望み、舊城址に對し、閼迦井嶽に面して、眺望最もすぐれたり。八幡神社（康平創建）、八坂神社（和銅創建）と共に平町の三社に擧げらる。

白水阿彌陀堂 平町より約一里半を隔て、内郷村大字白水にあり。陸奥千鳥曰「湯本宿より半里北へ行きて白水といへるところあり。海道より十六町左へ入る。阿彌陀堂は則ち平泉光堂の寫しなり。秀衡の妹德尼御前建立、奥院弘法大師、尤も女人禁制なり」と。しかれば堂は今を距る凡そ七百餘年前の建立なり。明治三十五年、特別保

護法に與る。また、本尊以下法佛像は佛工雲慶の所作と傳へ、大佛像は大野村藥王寺の佛畫、大浦村長隆寺の佛像と共に近世國寶に算入せられたり。

專稱寺 平町の東方一里、夏井村大字山崎にあり。淨土宗、應永二年の創立にして、延徳中、後土御門天皇の勅願所となり、奥州總本山の名を賜ふ。境地、東は遠く海濱に連り、西には平町の人煙を近く目睫の間に望み、眺望や、快轄なり。本堂に傳慈覺大師作阿彌陀如來を安んず。また、寺の東に如來寺あり。嘉元年間の草創、淨土宗名越派四本山の一にして、社地、東に海洋を望み、夏井川の清流を脚下にして、風光頗る秀麗なり。この他夏井村大字菅波には式内大國魂神社あり。

赤井嶽の龍燈 赤井嶽一に樹加井嶽に作る。平町の西方約三里に當り、標高二千三百七十六尺を有す。山頂藥師堂を安じ、水精山常福寺これを管す。夏秋の候この山上より望めば、無數の光遙かに海中より夏井川を溯りて山上に向ひ來集す。この地方にてはこれを龍燈と稱し、頗る有名なり。ことに、七月の祭禮にはこれを拜せんと

久之濱町

四倉の次驛を置き、人口三千五百を算す。住民は多く漁民にして、鯉の

漁獲多し。また、町の北に船揚場あり。安井氏の紀文に

曰「至長須賀、山海相距、不過二十歩、巖皆爲風濤所剝、

壁立削成、左則波頭洶湧、忽然突起、勢窮而一翻、噴玉

撒雪、直走沙上、如白馬連鑣、亦佳境也、行二十餘町、

山海益迫、人不並袖、時遇嶮隘、倚身巖側、候波頭將退、

疾走而過、如此者又七八町、海前山合、然後右折登坂、

降飲于久之濱驛、美如京醞、與中所罕遇也」。

波立薬師堂 久之濱町大字田之網にあり。醫王山と號

し、臨濟を奉ず。大同元年の創建、文明年間の修營にし

て、境内眺囀の快濶を以て名あり。即ち東には渺茫たる

外洋を望み、岸には奇石怪岩の蟠屈するあり。怒濤これに當つて碎くるさま、真に



壯觀と謂つべし。また名僧所作の佛像多し。

久之濱より五哩にして廣野驛あり。この地より石炭を産出す。

檜葉八幡宮 廣野停車場より十八町を隔て、同村大字上北迫にあり。春季は、國道

より寺城まで櫻花の隧道を作り、海道中有名の觀花地に推さる。また後山檜葉嶽の山

腹に源義家の舊城址あり。

折木鑛泉 廣野停車場の南一里にあり。泉は南澤と稱する山麓の岩隙より湧出し、

浴舎は多く農を業とす。冷泉にて、沸されば浴するに堪へず。また地の東凡そ三十

町に知機山成徳寺あり。

廣野より木戸驛に至る。その間小隧道無數。また、木戸より次驛富岡の間に金山隧道あり。五千四百三十尺

にして、全線中最長の隧道と言はる。木戸停車場より八町にして箱の山あり。十町にして八幡神社あり。三

十五町に天神山あり。二里二十八町に大瀧神社あり。

岩澤觀音 木戸停車場より十町許、岩澤川の斷崖中央二丈餘の處に刻せり。弘法大

磐城國

師一夜の作と傳ふ。

富岡町 濱街道の一驛次にして、人口約三千餘、雙葉郡役所の所在地なり。

長塚村 富岡に同じ、運輸の便多し、雙葉町と稱せり。

請戸港 往時は相馬の名港にして、米穀材木の輸入盛なりしも、今は少しく衰へたり。

この附近、風光甚だ明媚に、小島の磯、金華山公園、三牧岩など、松川浦に次ぐ

と稱するも過言にあらず。近年、海水浴場、開設せらる。

請戸明神 請戸港にあり。蘆野神社と稱す。祭神は新羅より流着せし女神の出現と

稱し、建立以來實に千有餘年を閱したる古社、式内に列せり。海船守護の神として土

人の尊崇頗る厚く、また行成卿筆の扁額あり。風景佳し。

長塚の次驛は浪江驛なり。

浪江町 人口三千七百を有する一名邑なり。この地より伊達郡の川俣を経て福島市

に達する街道あり。里程二十里に近からんといふ。停車場より一里餘に室原瀧あり。

三里を隔て、神鳴山あり、躑躅の名所とす。

大堀村 浪江町の西方一里半にして、高瀬川の峡口にあり。中村町と共に相馬焼を

産するを以てその名聞ゆ。

小高町 これより所謂奥州相馬の地方なり。町に浪江の次驛を置く。人口五千五百

余、や、繁華なる市街なり。且つ、羽二重の集散地として、東北機業會社、輸出羽二

重検査所、精練會社などあり。大悲山薬師如來は停車場より南十五町を隔て泉澤村に

あり。一大丘の中腹に人工を以て開鑿せる一大石室中、七大佛像の蓮華の上に坐せる

を見る。古色蒼然、眞に一千年の物たり。妙見神社は停車場より五町にあり。相馬家の

祖先の始めて築城せるの地、爾來累世これに居りしが、慶長十六年に至りて廢せり。

益田峯神社は字大井にありて、式内行方八社の一に居る、荒馬を醫するを以て名あ

り。また海老澤浦は停車場を距る一里にして風光甚だ佳し。

太田神社 小高の次驛磐城太田停車場より十五町、太田村大字中太田にあり。昔、

元享三年相馬重胤が、妙見、鹽竈、鷲宮三神をこの地方に遷座せしもの中にして、當社は即ちその妙見を奉祀せるものなり。祭日は舊正月一日、二日を元朝參と稱し、また陰曆七月一日より三日間に於て相馬地方特有の祭禮なる野馬追祭を執行す。

原の町 濱街道中著名の市邑にして、一名弓形の宿と稱し、人口五千餘を有せり。

大原街道は蜿蜒としてこれより岐れ、遙かに岩代國伊達郡川俣町に達せり。町の南端に廣漠たる原野ありて、地勢雄濶、地味膏腴、相馬郡中要衝第一に居るを以て、交通頻繁にして、貨物輻輳し、毎月一六の日に羽二重市、五の日に菫蕪市を開く。また馬市あり。町内に夜森公園、本陣山、雲雀野、館山城址などあり。就れも停車場に近し。また新田川に鮭多し。

野馬追祭 相馬地方唯一の特色にして、明治の今日猶かゝる祭事を行ふものありやと驚かる、許りなり。抑、この野馬追祭は相馬三郡の廣きに跨り、中村町、原の町、小高町を通じて南北七里餘、西は遙かの山手より、東は小濱の海濱に抵るまで、皆こ

の大祭典に關與せざるなし。其由来を原れば、藩主相馬家の祖平將門が、八州の兵を下總小金原に集めて、盛に訓練を爲したるに濫觴し、相馬家が覇を此地方に唱るに及んで、益々その祭事を盛にし、寛文中忠胤の時に至り、軍師大江又左衛門を聘し、武田流の軍法を以てこの祭を行ひ、愈其の祭義を大成せり。維新後、祭事一度中絶したりしが、明治廿七八年日清戦役後、再び復興し、祭日を七月初の三日に定め、一日は原の町にて宵乗を試み、二日は雲雀野(原の町)にて野馬を追ひ、三日は小高野にて野馬掛を行ふとせり。この野馬追の隊列を見れば、皆純然たる古代の武装、黒糸絨の大鎧に五枚兜の緒を締めて三春駒の八寸ばかりなるに跨りたる大男もあれば、紺糸絨の鎧を着て鍬形に半月の兜を戴き、白なる幌を負ひて月毛の馬にゆられ出でたる老武者もありて、孰れも皆な思ひくの出立、馬もまた月毛、川原毛、鹿毛、黒毛等粹を抜き雄を選びて、その數千騎の一隊々々に列をつくりて進み行くさま、眞に都人士の眼を刮せしむるの價值充分にあり。毎年その期に至れば臨時列車の運轉あり。好事者

は必ず一訪すべし。

鹿島御子神社 原の町の次驛鹿島停車場より六町にあり。式内の古祠にして、舊記に據れば神代の創建なりといふ。境内老杉多く、些の俗塵のその地に至るを許さず。

この他、要石、山王社、男山八幡等鹿島停車場より行くべし。

八津浦八景 八津浦の中にあり。浦は海水長く灣入し、岩石怒濤、頗る風景に富めり。八景とは鷲宮崎、長岩、龜岩、奥法師、大明神、鹽屋煙、神樂力石、水神の高谷地これにして、神南山にのぼれば、浦頭の風景一々眸中に集り、爽快言ふべからず。

中村町 相馬氏歴代の城市にして、濱街道中屈指の驛市たり。人口七千五百、その繁華平町と伯仲せり。町に相馬郡役所、福島監獄中村分監、縣立相馬中學校以下あり。松川浦、中村、相馬の兩縣社を始めとして探るべきの名勝また少なからず。所謂相馬燒はこの地の産にして、その名聲天下に高し。

相馬燒 中村町及び雙葉郡大堀村を主産地となす。その特色は地質の堅緻にして、

如何なる猛火に燬かるゝも曾て破碎せざると、毎個繪くところの馬の繪の一種の筆勢と雅致とを有せるにあり。而してその起原はこの地に於て土地の工人の製せる砂器を以て最初となし、その繪の始めは狩野尙信がこの地に遊びたる時、藩主相馬義胤の囑に應じて畫きしものなりと傳ふ。されどなほ當時は膚質甚だ粗にして、未だ士人の玩賞に値ひするものあらざりしが、元和九年、義胤京都御室燒の雅致あるを好み、その臣を遣してこれを學ばしめしより、實に相馬燒の今日あるを致せり。製作品は日常の茶器を始めとして、花瓶、置物等能せざるものなく、近年はことに小品にして極めて精巧なるものを製出す。

相馬城址 中村町の西部にありて、停車場より十五町を隔つ。大永年間、樵夫の言によりて中村氏の築城せるを、慶長十六年、相馬利胤更に修築して、小高より移つてこれに居れるもの、一名を馬陵城と稱し、奥州の一名城の名甚だ高し。

中村神社と相馬神社 相馬城址にあり。近世、共に縣社に列す。前者は妙見山に鎮

し、天御中主神を祀る。往昔平將門下總國守谷城に勸請し、次で元享三年この地に遷座せしもの、慶長十六年これを修築せり。老杉鬱として境内頗る幽邃なり。馬場先は舊城壕に臨み、植うるに櫻梅を以てし、花時頗る美觀なり。相馬神社はこれと一溪を隔て、立つ。相馬家の高祖將門十一世の孫相馬次郎師常の神靈を祀り、社地高燥にして境内閑雅なり。壕を隔て、中村神社馬場先の春光を望むによし。而してこの社はまた野馬追祭の最後の社として、祭時には頗る雜沓を極む。

原釜海水浴 中村停車場より一里許り、松川浦に至るの左方にあり。海水浴場は數町に亘れども、毫も危険の恐れなし。金華山の翠螺を遠く海中に望み、風景雄大にして且つ明媚なり。

松川浦 こゝには宇多川の河口開けて、宛然一瀉湖を爲せるがこときものにして、其風光松島に次ぐと稱せられ、十二勝の目あり。されど海としてより寧ろ湖水としての美にて、到底松島の大觀に比すべくもあらず。只鶴の尾岬の一端、夕顔觀音の境内

は眼下にその大觀を集めて、人をして快哉を叫ばしむるごとき奇なきにしもあらず。人はこれを稱して松島、雄鹿と共に奥羽地方の一大勝とすれど、享けがたし。その地中村停車場を距る一里半なれど、寧ろ海路を選びて、中村より二十町を隔てたる松が浦に小舟を僦ひ、夕顔觀音の堂下に至るをよしとす。さすれば所謂松川十二勝は一々舟の左右にあらはれ來りてその快言ふべからず。所謂十二勝とは、松川浦、水莖山、飛島の港、松沼の濱、離崎、川添森、文字島、紅葉岡、沖ヶ島、梅川、鶴巢野、長洲の磯是なり。而してこれを併せ見るには、松島の富山に於けるが如く、鶴の尾岬の夕顔觀音を以て第一と爲す。堂廊に踞して一望すれば、恰も一大パノラマの前に横れるが如く、右には遠く連山の青黛、左には近く太平洋の蒼波、況んや眼前無數の小島嶼は踏みても渡らるべき松のうねり、誰か恍惚としてその勝に撲れざらん。乙羽子曾て記して曰く、「水莖山に登り夕顔觀音に詣で、四方の風景を眺望すれば、大洋前に面して怒濤山の腰に叫び、麓には穩波葦舟を泛べて遠島の影眠るが如し。華表の傍らより小

舟を雇ひて十二本松に至れば離島右にあり、沖ヶ島左に隠れて景色頗る面白く、進みて文字ヶ島に至るに、湖光一綸の裡に落ちて、阿もなし難し、蘆荻十尺湖頭を見ざる所に扁舟横はり、洲崎の家に人黒からんとす。夕陽は彼方の杜に沈み、歸鳥は雲に入り、暮色を海の面より呼ぶなど、何たる心地よき好風景ぞや。

飯豊村の耕地整理 中村町の東南に飯豊村あり。耕地整理頗る好成績を収め、成績國內第一と稱せらる。

中村驛を發すれば新地、坂元、吉田の各驛を経て互理郡の互理町に達す。この間新地に貝塚あり。坂元驛より半里に磯濱あり、好景の地とす。坂元は既に宮城縣下互理郡に屬せり。

互理町 濱街道の一要驛にして、互理郡役所を置き、人口三千九百を有す。陸上、仙臺に通ずる門戸に當るを以て、古來要害の地に數へられ、伊達氏の支族成實以降代々の居城地たり。東一里に荒濱あり、阿武隈川の河口にして漁獵の利に富む。また、町の北方逢隈村大字鹿島に式内鹿島神社あり。

鳥の海水浴 互理停車場より三十町、荒濱の南、鳥海灣の北岸にあり。波浪靜かにして、鷗鳥これに遊び、海光水態、一に畫中の景なり。

互理より北行二里にして岩沼町に達す。即ち常磐線と東北線との會合驛にして、町は陸前國名取郡に屬せり。

此所に伊具郡の名勝を記せん。

角田町 互理、槻木（陸前柴田郡に屬し東北線停車場）兩驛より各三里半を隔つ。阿武隈川の西岸に沿ひて生絲の賣買盛に行はる。人口六千四百餘、伊具郡役所以下の公衙あり。槻木驛より鐵道馬車を通ず。

斗藏山 角田町の西南二里許り館矢間村大字小田にあり。山上に斗藏山大悲閣と稱する古刹あり。寺號を斗藏寺と號す。又稻荷神社、白山神社、山王神社ありて、其境内を東西に分てり。斗藏寺は地方著名の寺刹にして、大同二年田村將軍の建立する所と傳へ、開山は慈覺大師にして宗旨は眞言宗なり。山上四方の眺望に富み、近く阿武隈の流を望み、遠く相馬の群山を見るべく、其他郡境の諸山は勿論陸前地方の山光水

色も亦一眸に集まる。

●丸森町 角田町の南方約二里にして、阿武隈川の南岸にあり。人口約五千五百、殆ど伊具郡の中央に位す。生糸、蠶種の産出を以て名高く、また式内鳥屋明神あり。西方阿武隈川沿岸の道路を辿れば約五里にして岩代國梁川町に達す。

●金山町 丸森町の東一里にあり。丸森町と共に生糸蠶種の産地としてその名顯はれ、盛大なる製糸場の設置あり。

○刈田伊具郡地方 國の宮城縣に屬する地は刈田、伊具互理三郡これなり。互理郡は常磐線の條にこれを記せり。刈田郡には白石町あり。官設東北線この間を南北に掠め、白石川の流域を出で、陸前に入る。伊具郡は刈田、互理兩郡の中央に狹まれ、阿武隈川これを貫流す。河の西岸に角田町あり。郡の主邑をなす。刈田郡には温泉多し。

●白石町 東北線越河驛の次驛を置く。白石川の南岸を占め、陸羽街道の要衝に當る。山形に通ずる道路はこの地より分岐せり。舊と伊達の老臣片倉小十郎の城市にして、

人口八千六百を有し、市街頗る整頓せり。町に刈田郡役所、中學校以下を置く。停車場は町の東方壽町にあり。地の特産物としては饅頭及び紙布あり。その他、製絲機織等の事業も行はれ、工業また見るに足るべく、郡内に産する生糸、紙、葛粉等は皆な一々此に集中するを以て、商業また繁盛なり。寔に推して宮城縣下南方の一中心地となすべし。福島市へ三十七里餘、仙臺市へ十二里十五町を隔つ。

●白石城址 白石町の西隅にあり。停車場よりは約十町餘を隔て、今、中學校の所在地これなり。初め戰國の世上杉氏の屬城にして、甘粕備後これに居り、降りて慶長年間伊達政宗これを陥る。更に功を以てこれを片倉景綱に賜ひ、爾後歴世片倉氏の居城として維新革政に至る。戊辰の歲、奥羽二十餘藩の大盟約を成したるも、實にこの城中にして、今、廢址を訪ひて當年を回想すれば、感慨うたゝ禁せざるものあるべし。

白石町より四方白石川に沿ひて、小原、七ヶ宿を通じ、國境金山峠を越ゆれば羽前國に出づべく、その間小原温泉、材木殿の勝あり。而して白石、金山時問を古來山中七ヶ宿と稱し、宛然小木曾山の景趣あり。白石

川は源を七ヶ宿村字千浦に發し、刈田郡を貫きて陸前に入り、阿武隈川に合す。流域凡そ十八里、その川源甚だ遠からざるを以て、石大に水急に墜々耳を聳す。奔湍射るが如く、深淵は藍に比すべく、巖に激して白玉を飛ばし岸を落ちて瀑を成す。而して兩崖千仞、深樹枝を垂れて、好景愛すべし。河に鱒、鮎多し。

●小原温泉 白石町を距る二里にあり。桂澤山の麓にして、山蒼く、水清く、風景掬すべし。温泉は無色透明の鹽類泉にして、熱攝氏の四十八度を保つ。新湯、古湯の別あれども、古湯尤も盛なり。白石町より人車を通すべく、避暑に適せるを以て浴客多し。これより猶ほ白石川を遡ること一里半にして材木巖に達す。

●材木巖 白石川の沿岸、七ヶ宿と渡瀬との間にありて、白石町より自由に腕車を驅るべし。巖は巖々聳立、斷崖千仞、上は霄漢を摩し、奇景言ふべからず。而して皆な柱状の流紋岩より成り、その狀數百の材木を臚列したるが如し。白石川の奔湍はその裾を東にめぐり、虎石の怪巖その對岸に峙つ。相待つて奇觀なり。錦繡の候景色ことに佳く、青松白水相掩映し、美觀容易に狀すべからず。曳杖の客多し。

觀聞志曰「不動巖、在渡瀬以東、斷崖千尺、古樹萬株、岩下、細路石徑、殆非人境焉、斷崖巖々然、若綺數、

若巖巖、攷理密巖、尤可愛、岩上石面印些赤色、岩下設置木佛、山頭巖樹蒼鬱、青格亦相連、綠葉交翠、朱實結子、向東嶺而相待、其狀不可勝言、鄉人呼其斷岩、曰、縮岩、屋料巖(サイモク)、向不動巖西北立、兩地俱在小原村、相傳、太古有飛騨工匠者、術壓魯般、欲營不動堂於霽雨之間、而談其奇巧妙術焉、於是斧斤鑿斲不停手、時會夏漏甚短、未幾而夜既白、憤其功之不立、疾甚志之不成、而迺舉其所斧鑿之材木、而舍之壑、以彼精神之至誠也、皆化為石材、鄉人謂之材石巖、如今所存之狀、有如柱梁板者數萬片、相似屋料之並蘆、支方第一曰莖、第二曰貫材、第三曰角柱、第四曰上鴨居、第五曰敷板、其餘箇々片々認之、則畫彷彿其象、而不知其幾萬片幾千重焉、一片剝落去、則復有一片、巖底未評其幾重疊也、廣狹長短、巨細大小、咸隨其入用、猥聞枯槁渾如其所欲、而其巖面東南已三町餘、實希世之壯觀也、溪水奔流透其下、石巖歷年崩墜者、一歲凡不知幾千萬、累有洪水、則必激流去、然謂一片不流出于隣境焉。林鶴梁曰「已未十月、余自羽州還、過奥州下戸澤、觀所謂材木巖、巖巖々聳立、高數千仞、上摩霄漢、幅數百間、下有一溪、清冽如鏡、石根入水、深又不知其數千仞、蓋其全形一石、壁立削成、而有直圻者、如攢棟梁、有橫裂者、如列栴檀、所以有材木之稱也、余得其石片崩墜在地上者、細觀之、其實堅緻、類豆州御影石、而石或四角、或六角、皆如琢磨成之者、澤澤可以鑑焉、甚乎天巧之奇至此也、巖間骨立無膚、然石之崩墜者、其迹爛然成碑、而松生長其間、蒼髯黛色、浸影溪流、又有小島數百、翱翔和鳴於巖樹中、粧點以添其景致、實天下之奇觀也、屬吏杉立某在側、謂余曰、某嘗游松島、松島之勝冠天下、境彼此異觀、而今較論其勝、不易優劣也、余因慨然起歎

曰、彼名大顯、而此則寥寥、無情頑石尙然、況於人耶、安政六年冬十月三日、屬稿福島客館。

刈田郡附近の地温泉最も多し。而して、鎌先、遠刈田、青根、峨々等最も顯る。孰れも白石驛より遠からざれば同驛に下車して遊ぶを最も好しとす。(諸温泉中青根温泉のみは陸前國柴田郡川崎村に屬せり)

鎌先温泉 白石停車場より一里十町と稱すれど、道路困難にしてわづかに人車を通ず。その地、兒捨川の上流に居り、峰巒四周して、風景幽邃なり。泉は鎌先山腹より湧出し、三條の樋を以てこれを浴室の中に導く。創傷に效ありと説きて來り浴するもの多し。泉の色は淡黄にして少しく鹽味と硫氣とを帶べり。鎌倉より三住を經、三里にして遠刈田に出づべし。

遠刈田温泉 白石停車場より五里餘、宮村岩崎山の麓遠刈田にあり。新道を開鑿して馬車を通ず。頗る往來は便なり。且、西洋風の上等浴室を構造して縉紳貴客の用に供す。その温泉涌口は六ヶ處あり。泉質、上の湯は透明無色にして、中性の反應あり。

其味は聊か淡鹽にして、泉温五十度以上、精神病皮膚病等に大効驗あり。東の湯は温度上の湯に下る五度、鐵分及び炭酸アルカリ類を含みて、腸胃病或は疝氣脚氣又は婦人の赤白帶下に效驗ありと稱す。地はまた不忘山、青麻山の峰巒の間に介在して、松川の溪流を擁し、頗る閑雅を極む。式内刈田宮あり。また西六町に岩崎山ありて、山腹に金を掘りたる廢坑あり。金賣吉次兄弟の金を採掘せしといふは誤にて、伊達政宗が試掘せしものといふ。山の西北に鬼石原の平原あり。遠刈田より刈田嶽に登る通路に衝る。

遠刈田より更に山中に入ること一里十三町にして青根温泉あり。陸前國柴田郡川崎村に屬し、白石町より七里、大河原驛(陸前國柴田郡に管し、白石の次驛)より七里二十町を隔つ。遠刈田より自由に車馬を通ずれど、單獨にこの温泉のみを訪はんと欲せば寧ろ大河原驛に下車して行くを便とすべし。刈田地方の諸温泉、中郡人士の行いて浴するに足るものは獨り青根温泉のみなりと言はる。この温泉より刈田岳(藏王山)に登山すべく、また刈田岳を越えて山形縣の高湯温泉に出づるを得べし。而してなほ青根温泉を距る一里半に峨々温泉あり。此等は別に陸前國の部に於て説がん。登山路の便宜上、藏王岳をも同國の部に讓る。

岩代國

岩代國は磐城國と共に本地方の南部に位し、東西三十一里、南北二十二里、面積四九四方里を有し、南は下野及び上野に接し、西は越後、北は陸前に境し、西は磐城に隣り、全く海に瀕せず。二市十郡にして、二市は福島市若松市にして、十郡は信夫、安達、伊達、安積、耶麻、岩瀬、河沼、北會津、南會津、大沼即ち是なり。福島縣これを管す。地勢は西南より東北に長く、本邦中樞を成せる脊梁山脈國の中部を連互せるを以て、山嶽重疊し、一般に高峻にし平地少し。殊に南方、西方、北方に於て殊に高峻を極め、東方稍低夷して阿武隈川の流域に臨む。國の南方にある帝釋山脈は下野の境に蜿蜒し、馬阪山、田代山、荒海山等あり。主峯帝釋山は實に高距二千〇七十米を保ち、山勢頗る峻峻なり。國の西南隅には猿倉岳、朝日岳、大島岳等連互し、其東方に駒ヶ岳(二二三〇米)三岩嶽(二〇三二米)等相連り越後と相接して、深山窮谷、人跡

未だ到らざるの地多し。西より北に至れば、飯豊山脈及び大嶺山脈相連り、東方吾妻火山群に及ぶ。國の西半は一帶の高臺地にして、會津丘陵地と稱せられ、平均七八百米の高距を有す。博士山、神籠山、御前嶽、小野嶽等はこの高臺地に崛起せる高山にして、千三百米乃至千五百米を保つ。この丘陵地の東北に會津盆地あり。南北に長く面積凡そ三百二十平方軒を有し、中央に若松市あり。此地海拔約二百十八米にして、それに隣れる猪苗代湖より低きこと三百米に及ぶ。田園よく開け、土地豊饒なり。これより東に一丘陵を隔て、猪苗代盆地あり。猪苗代湖は耶麻、安積、北會津三郡の境を浸し、周圍凡そ十八里、面積八十九平方軒を占む。近江の琵琶湖に次ける本邦著名の大湖にして、水面を抜くこと五百米に達す。其東方には狭長なる阿武隈平原南北に横り、官設東北線の鐵路其間を走り、須賀川、郡山、二本松等の名邑此處に發達し、信達二郡の平地と相連りて國中最も繁華なる區域をなせり。其附近に那須火山脈あり。特に著しき高峯に、天狗相撲取山(一四五二米)安達太郎山(一四二〇米)吾妻山(二一〇

四〇米)あり。此山脈は即ち脊梁山脈を成せるものにして、吾妻火山群は二千米内外の高距を保ち、羽前の國境に蟠屈し、北方延いて藏王火山群に連る。磐梯山は安達太郎山の西に位し、巍然として會津高原中に屹立す。最高の處は千八百四十米を有す。山頭に、爆裂作用より成たる檜原湖あり。阿武隈平原の北に福島平原あり。阿武隈川及び其支流の灌漑する處にして、西南より東北に長く面積百八十五軒を占め、福島市との中央に位す。河川は阿武隈平野及び福島平野を貫流する阿武隈川を最も大河とし、長瀬川、日橋川、大川、只見川の合流して成れる阿賀野川これに次く。前者は北流して陸前に入り、後者は西流して越後に入る。國中の河水にしてこの二川の合するところとならざるものなきは、特に地理學上注意すべきこととなす。

沿革 古來の沿革に就ては既に磐城國に盡したるを以て茲には唯近代の事を叙せん。明治元年陸奥を分ちて、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥の五國とし、當時岩代國內に封を受る者、二本松に丹羽氏、會津に松平氏、福島に板倉氏あり。其他幕府領、塵

下采地、棚倉藩領及び土浦藩、足守藩、新發田藩、館藩、刈谷藩、石黒藩、石岡藩等の分領あり。明治二年白河、福島、若松の二縣に依て分轄せられ、四年七月藩を改めて縣となし、十一月更に二本松、若松の二縣を置きて之を統轄し、尋で二本松縣を改めて福島縣と稱す。九年又若松縣を廢して福島縣に併せ磐城國十一郡を兼轄す。

交通 官設東海線は磐城より來り、須賀川を経て、郡山に來り、此處に岩越鐵道線を西に岐ち、奥羽本街道と阿武隈川とに添ひて北し、日和田、本宮、二本松を経て、松川より福島平野に入り、福島市に於て奥羽北線鐵路を西に岐ち、長岡、桑折を経て宮城縣に入る。此線路は國の東北地方に交通を司る主要路にして、沿線の市邑皆繁榮の趣を成せり。岩越線は國の西部地方の交通を司れる線路にして、郡山驛より岐れ、堀の内、熱海、中山等の諸驛を経て、猪苗代湖畔に達し、其北岸をぬひ、關戸、猪苗代、翁島、大寺を経て若松平野に達し、若松市よりは更に北西して喜多方町に達し、現今此地に終端驛を置けり。此鐵路延長して越後に達するの曉には、西北部の交通は更に一

層の便を加ふるなるべし。福島市より岐れたる奥羽西線は直ちに西して、庭阪に至り、これより板谷の嶮を経て、羽前に入る。米澤山形地方の交通は此線に由るべし。此他、道路は若松市より檜原峠を越えて山形縣に入るもの、若松市より赤津、長沼を経て白河に出つるもの等あり。鶴沼川に添へる道路は南會津郡の主要路を成し、山王峠を越えて下野に入り、伊南川に添へる道路は、大沼、南會津西部の要路を成し、屈曲二十餘里、遂に上州尾瀬峠に至る。阿賀野川は交通水路を成し、鹽川以西、舟を命じて以て越後に至るべし。

産業 會津米の名の市場に高し、ことに糯米の如きは良品と稱せらる。安積、河沼諸郡は到る處稻田穰々たり。されど本縣は養蠶地なるを以て、その最も旺盛を極むる伊達郡等にありては、稻作は桑作に壓倒せらるゝ傾きあり。特用農作物には、會津地方の松川烟草あり。漆樹また多し。蠶業は本邦屈指の地にして、伊達、信夫、安達、安積、田村諸郡阿武隈川流域の地は最も隆盛を極め、農家の過半は專業或は副業として

これを營み、桑園反別に於ては實に全國第一に位せり。牧馬は本國に於ては、磐城に比すべくもあらざれど、阿武隈上流地方に於ては多少の産をなし、須賀川町には其市場の設けあり。林業は山岳地方に多大の分布を見る。漁業は猪苗代湖に淡水魚を産す。製糸業、製織業は川俣町及びその附近最も盛にして、福島市には其市場を設け、荷造共同所は検査の上商標を附してこれを外國に送る。生糸の年産額十二萬貫に及ぶ。以て其の盛なるを知るべし。川俣織物は輸出羽二重を主とし、その品質の良好なる、其産額の多大なる、本邦屈指の産地と稱せらる。其他若松及び阪下に木綿織あり。福島市附近に信夫文字摺なるものあり。共に一地方の名産を成す。陶器には會津に本郷焼あり。若松市の南方大沼郡本郷村を主産地となし、産額少なからず。漆器には、會津塗あり。堅牢を以て世にきこえたり。

○官設東北線沿道 盤城の條にも記せし如く、線路は盤城岩代の國境近くを南北に走り、須賀川、笹川、郡山、(岩越線これより西に岐る)日和田、本宮、二本松、

松川、今石、福島(奥羽西線これより岐る)長岡、桑折、蒔田を経て、宮城縣宮城國に入る。岩瀬郡は須賀川町より至るべく、若松地方には郡山より至るべく、伊達郡川俣町には二本松町より至るべし。

須賀川町 今、人口一萬三千九百餘、陸羽街道の驛次に當り、矢吹(磐城國屬)の次驛を置く。阿武隈川の西邊に位し、釋迦堂川は驛北に於て阿武隈川に合湊す。市街繁盛民屋稠密、蓋し、この街道中福島、二本松、郡山に亞げる都邑なるべし。市街南北に長く、南町最も繁華區にして、これに次げるを一丁目、二丁目等とし、國道を挟んで重なる商家櫛比せり。商況また敏活、ことに刻煙草の製出を以て顯はれ、專賣局須賀川煙草製造所の設置あり。所謂須賀川煙草の名目あるもの、田村、石川諸郡に産する葉煙草を以て刻煙草の製造に従事せり。また、牧馬會社を設置し、その糶賣するところ毎歲數百萬頭に超ゆと聞く。生絲市また盛にして町に座繰製絲場東北社あり。町は、元來藩地にあらざりしも、市人商機を見るに敏なりしを以て、頗る名揚り、維新後、他

都邑の隆盛につれて比較的世人の注意を惹かざるも、また國內の一商業地たるを失はず。公衙には岩瀬郡役所以下あり。佛刹には長祿寺を推すべし。道路は四達し、石川町を通じて磐城の東海岸に出づるもの、西北方若松市に出づる山道等あり。鐵道、白河驛へ十六哩、郡山驛へ六哩、而して若松市へは約十七里を隔つ。奥の細道に曰『須賀川の驛にて等窮といふものを尋ね、四五日留めらる。まづ、白河の關はいかに越えつるやと問ふ。長途のくるしみに、身心つかれ、且は、風景に心を奪はれ、懷舊の腸を斷ちて、はかくしく思ひめぐらす。』風流のはしめや奥の田うゑ歌』
旭ヶ岡公園 須賀川町の西南八町にあり。園内幽邃にして、松樹蒼々の間一祠を安んず。祠前に池あり。池畔多く櫻樹を植ゑ、また架するに橋を以てせり。
愛宕山 旭ヶ岡公園と相對す。山頂に愛宕の祠あり。須賀川の全麓を下瞰し、遠く逢隈川を隔て、石川郡の諸村を一眸の下に集む。

岩瀬の森 須賀川の北約十町にして、字中宿に屬す。老松多く、丘頂に鎌足神社を

鎮せり。古歌に所謂「みちのくの安積の事を人とはいいか、岩瀬の森はこたへむ」といへるもの即ち此なりと傳ふ。

笠石地藏 須賀川町の南十町、鏡石村大字笠石にあり。白河風土記曰「笠地藏と稱せらる、笠石は、村の北路傍に建つ。高四尺、方柱一尺三寸、由来知れず」。

順宜牧場 鏡石村にあり。國內第一の牧牛場に推さる。

牡丹園 須賀川町の東南約半里にして、石川町に至る沿道にあり。花樹の數幾千株、花時頗る美觀なり。乙字瀧(磐城國石川郡)はこの園より東南一里を隔つ。

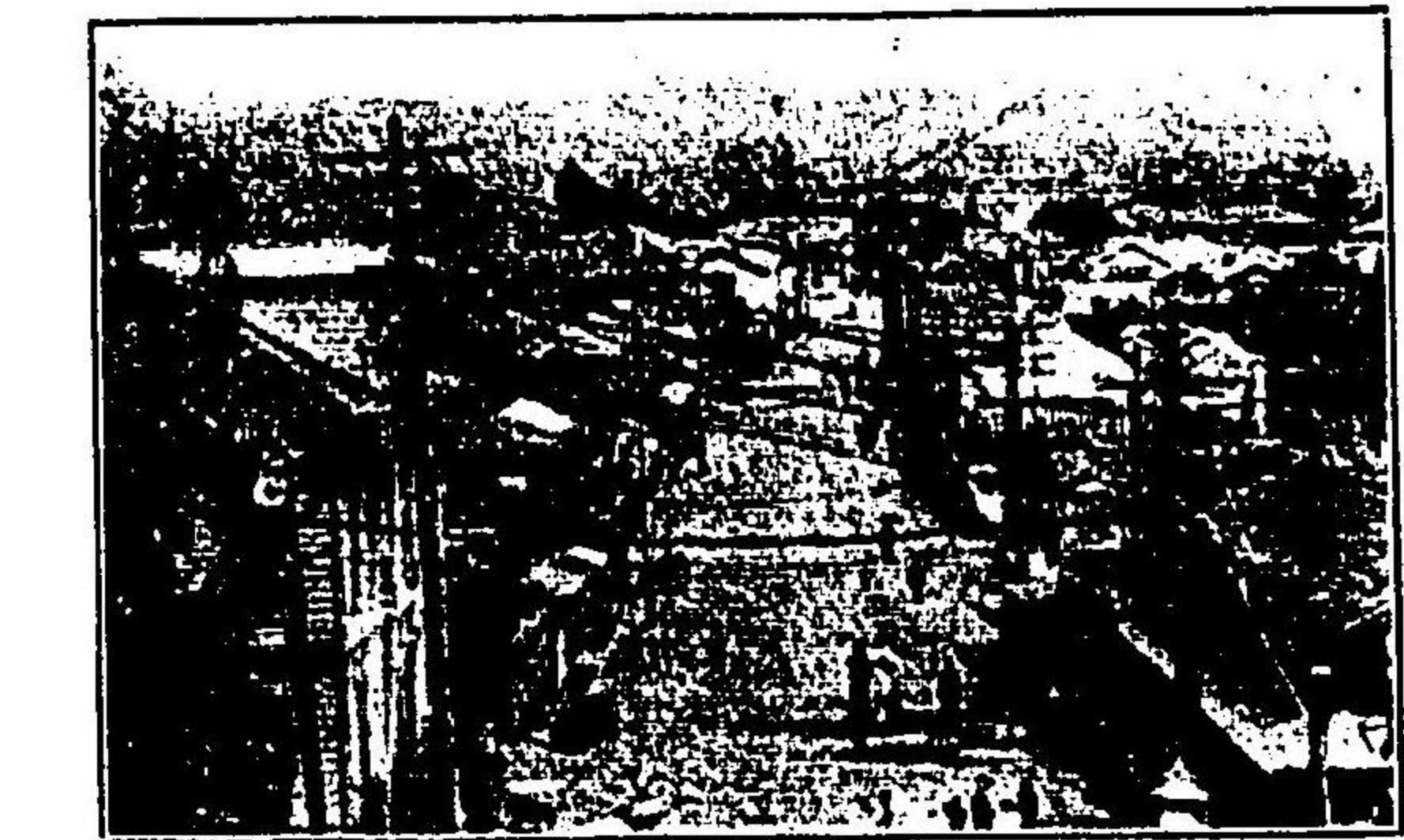
以上の他、猶ほ須賀川町附近の名勝として、二本の松、時雨塚、鏡沼古跡等あり。一訪すべし。

長沼町 須賀川町の西方四里にあり。山中の一小邑にして、白河、若松間の街道これを通ず。白河へ六里、若松へ十二里半と稱す。陶器の産あり。

白河湯本温泉 長沼町の西方七里にあり。山巒重疊の間に位し、道路險峻にして白河地方より來るもの纒かに腕車を通ず。四面山を繞らして地勢最も高く、東より北に

互りて一溪流あり、鶴沼川といふ。發見は遠く嵯峨天皇御宇と稱し、往時白河領なりしを以て、樂翁公も曾て來浴せしことありといふ。佛刹あり。また温泉への途上に室坂峠の絶勝あり。

汽車、須賀川驛を發すれば、僅に三十分程にして國內屈指の名邑郡山町に達す。



郡山町

郡山町 岩越鐵道はこの驛より岐れて若松市方面へ向ふ。人口約一萬六千六百餘、安積郡役所、中學校以下の設置あり。町はもと二本松の一藩領に過ぎざりしが、維新後大に進運に向ひ、かの有名なる疏水事業並に開拓竣工せらるゝや、産業年々増進し、商業益々活潑となれり。而して今やその疏水を利用して、電燈を設け、電力を諸

機業に使用する等、市街日を追ふて繁盛に赴けり。ことに、中町、大町、本町等は、

大賈巨商軒をならべ、商業尤も殷賑と稱せらる。且つ町の附近に多くの蠶業地を控ゆるを以て、その種の會社多く、郡山絹糸紡績會社、合名會社正製組、眞製合資會社、良製合資會社等あり。孰れも盛に製糸及び取引に従事す。また近年蠶絲同業組合を設け、蠶業講習所を開始す。他に、專賣局郡山煙草製造所、日本カーバイト會社郡山工場などあり。道路は四通し、東北線、岩越線の他に東北三春町へは馬車鐵道の布設あり。旅客の來往貨物の集散頗る繁く、且つ、その地殆ど福島縣下の中央に位するを以て、市民は更に福島を陵いで東北の商權を振はんと期しつゝあるものゝ如し。鐵路、福島へ二十九哩、白河へ二十三哩、若松へ三十九哩を隔つ。

所謂安積疏水事業とは郡中の平原を潤す爲めに、猪苗代湖の水を引きたるものにして、疏水口は耶麻郡山濁にあり。明治十三年工を起し、十五年これを終る。爾來水路の延長十有五里、灌漑の面積五十餘町に及べりといふ。開拓事業は明治六年の交より、同十五年に至る間になしたるものにして、町の西北茫々たる原野は、一朝にして積々たる田園と化し、年々四萬石餘の收穫を見るに至れりといふ。而して工商共にこれ政府の事業にして、郡山町の今日ある、實にこれが賜物と謂つて可なり。

●●●●●●●●●●
安積國造神社

郡山町字稻荷

にあり。縣社に列し、國造の遠祖比止禰命を祀る。儒者安積良齋はこの社の神官安藤氏の息なり。

●●●●●●●●●●
農事試験場

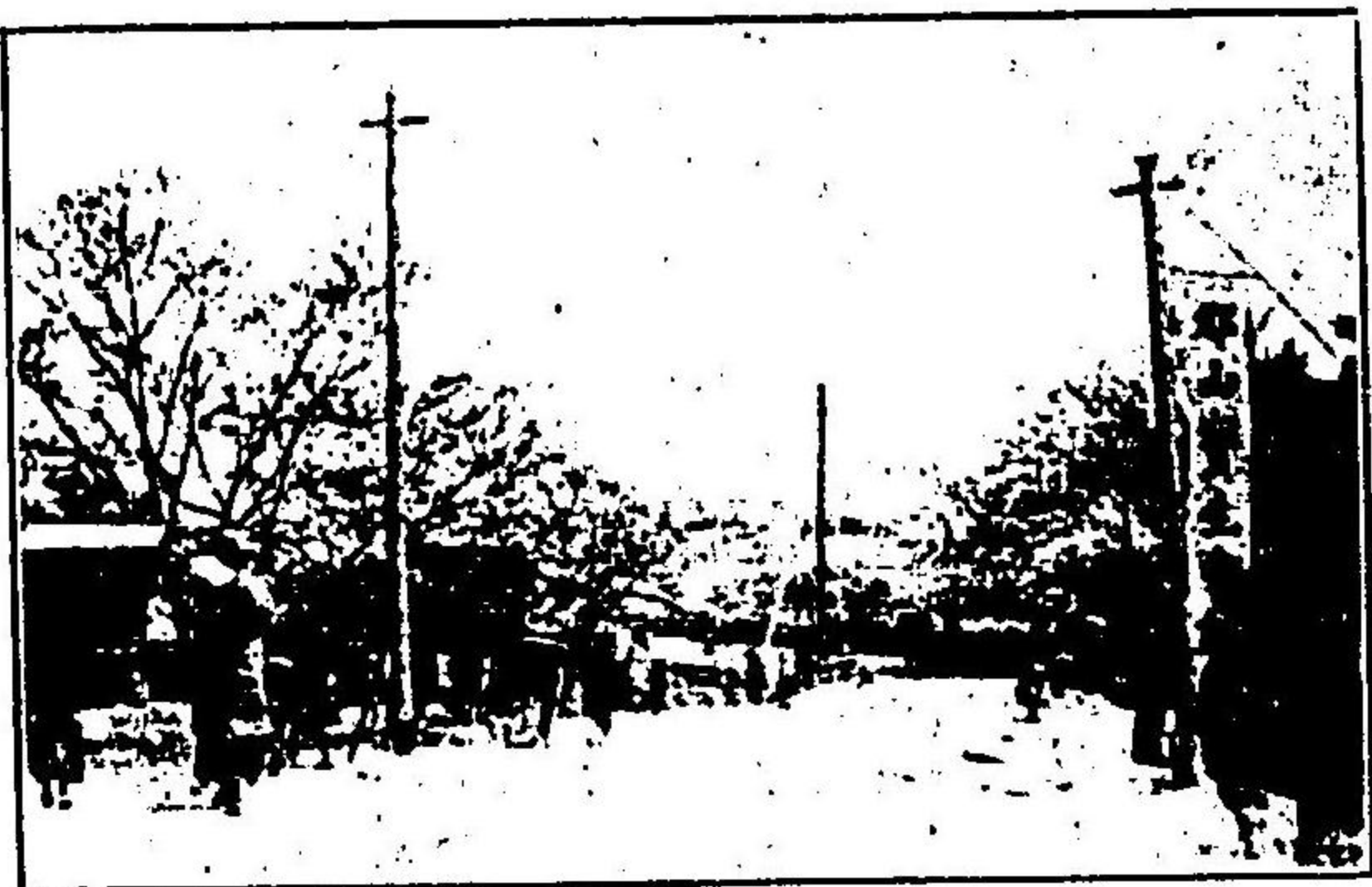
郡山町の南二十町餘小田原村にあり。明治二十九年の創立にして、農事改良に資するところ多

といふ。

●●●●●●●●●●
開成山公園

郡山町の西隣にして、二十九町を隔て桑野にあり。春季櫻花多く、また園の西丘に太神宮あり。

明治六年の創建にして、社殿瀟洒なり。境内西北には安達太郎山あり。東南には一望移、大瀧根、蓬田等の諸山あり。而して南には開墾の田圃を一眸の下に集む。また賽路の傍に三箇の池あり、田圃灌漑の用に供す。春秋の



開成山公園

二期には第一の池の周圍に於て競馬會を催す。觀者堵の如く頗る壯觀なり。縣立安積

中學校はこの桑野村に置けり。十符菅薦曰「新懸の里字を桑野といふ。こゝの開成社といへるに御叢をとよめさせ給へり。郡山にて宿らせ給ふべきを、まだかたなりなる新地をして行在とし給へるは、さる荒野をひらきて田畑としたりし功勞のほどを、詳しく見そなはさんとなりけり。この新墾企てはじめしは明治六年のことにて、福島縣令安場保和氏どもに諭しおもむけ、里の長阿部茂兵衛といふもの、家富みて身に奢をなさず、心さかしくて業につとむる、その外二十五人力を合せ、凡て五萬圓ばかりの金もて力を盡して開きたり」。

淨土松 郡山町の西方三里多々野村字白石にあり。郡山より自由に車馬を通すべし。怪巖翠松、俗にこれと呼んで小耶馬溪となせり。

郡山の次驛を日和田驛とす。額取山、安積沼等の古蹟あり。蛇骨地蔵、于安慮空藏また賽すべし。

安積沼址 山野井村大字日和田の西なる東勝寺の後にあり。其地塘廣さ二町ばかり、有名なる古蹟なりしも、今は水涸れて水田となり、人家遠近に散點して、四圍丘

陵を負ひ尙ほ沼跡たるを認むるに足るべし。往昔實方朝臣の陸奥守に貶せらるゝや、偶々五月節句に會し菖蒲を葺かんとして得ず、因て此沼の花かつみと稱する草を以て之に代ふと。古歌あり。一二を掲ぐれば、諸人不知「みちのくの安積の沼の花かつみかつみる人に戀やわたらむ」信實「花かつみかつ亂れゆくなみ風につゆや安積の名に通ふらむ」。

安積山 一名額取山と稱す。郡山を西に距る凡そ三里許、河内村の西北に聳ゆ。山容一圓丘の如く、標高九百八十餘米を有せり。山頭に登れば近郷悉く吟眸に入る。是れ著名の古蹟にして、采女の歌に「あさか山かげさへみゆる山の井のあさき心をわれ思はなくに」とあるは能く人の知る所なり。萬葉集此歌の傳に云「葛城王遣于陸奥國之時注略司祇承緩意異甚於時王意不悅怒色顯面雖設飲饌不肯宴樂於是有前采女風流娘子左手捧觸右手持水擊王膝而詠其歌爾乃王意解脫樂飲終」と参照すべし。

日和田の次驛は本宮なり。この附近阿武隈川沿岸の平原漸く狭く、西方には安達太郎山の連山の雲帯を摩せるを見るべし。

●本宮町 會津街道の起點に當り、人口七千百を有す。安達郡中二本松に次げる市邑なり。町の南に本宮観音堂あり。猶苗代湖畔山瀉まで里數五里半とす。また町の西三里に熱海濱名あり。

●安達太郎神社 本宮町字菅山にあり。式内にして、久安二年の創建に係る。社域小丘に居りて松杉鬱蒼し、前は阿武隈川を臨み、後は花山の勝景を擁し、北方遙かに安達太郎山、吾妻嶽等の諸山を見、四時の風趣佳絶なり。

●三雄山 本宮停車場より一里二十町、杉田村にあり。満山奇巖怪石兀立し、その間古松奇楓の翳鬱として繁生するあり。溪谷これを環り、清水鑿々として落つ。山水幽邃にして風致頗る閑雅なり。紅葉の時期に好し。

●二本松町 本宮の次驛を置く。町はもと丹羽氏の舊城市にして、人口九千四百を有

し、安達郡の首邑なり。福島を距ること五里十九町、郡山を距ること六里九町とす。

●二本松城址 二本松町の中央に一小丘ありて街道を遮る。これを觀音山と稱し、舊城址はその山嘴にあり。一に霞ヶ城と稱す。往時、畠山氏奥州探題に補せられ此所に館を設けしが、右京大夫義繼に至りて伊達政宗に滅さる。更に蒲生氏郷の會津に封せらるゝや、この地また蒲生氏に屬す。徳川氏に至りては、丹羽氏の封邑となり、以て王政維新に及ぶ。現今はその城址に製糸場雙松館あり。

●雙松館 即ち二本松城址にあり。その創始は遠く明治六年と稱し、民間に於ける器械製糸會社の嚆矢と言はる。一年の製糸高二千七百貫に達し、工女數百名を使役して規模頗る盛大なり。

●二本松神社 二本松町字本町にあり。創始は延曆四年と稱し、伊邪那美命以下三神を祀る。境内樹木多く、眺望また佳なり。

●稱念寺 二本松町字本町にあり。後鳥羽院の勅願所とつたへ、時宗を奉ず。町内第

一の古刹なり。

●大隣寺 二本松停車場より十餘町にあり。元祿年間丹羽光重の開基に係り、曹洞を奉ず。維新前は寺田百石を附與され、今に境域二萬八千餘坪に及ぶといふ。地、阿武隈川の西岸に位し、四望開闊なり。

●安達原黒塚 二本松町の東二十町許、阿武隈川の對岸大平村にあり。原は古へ良弓駿馬を出して朝貢にあてたりといふ。まづ、二本松の市街を離れて阿武隈川を渡り、行くこと數町にして民家十餘軒まばらに散在せる小村に到る。是れ大平村の一部にして其後方に巨巖を積重ね、岩下に土窟の狀を爲すものあり。是れ古へ鬼の棲し處なりと稱す。享保の頃此巖に觀音の像三十三軀を刻み、又六字の妙號等をゑり付けしものあり。傍らの樹陰に高さ三尺餘の石を建て、之に平兼盛の「陸奥のあだちか原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか」と云へる和歌を勒せり。また其後に荒果たる古刹ありて、内に鬼の用ひたる飯焚鍋、人斬庖刀等を藏すれども素より信すべくもあらず。

十府菅薦曰「兼盛の歌に「みちのくのあだちが原の黒塚に云々」とあるは陸奥の名取郡の黒塚といふ處に重之が妹あまた侍ると聞て、いひつかはしものなり。重之の妹をたはぶれに鬼といへり。さるは古くよりみちのくの黒塚はおそろしき所にて、鬼すめりなどいふ傳へありて、兼盛もこれをよすがに詠みしならんが、まことはみな跡もなき事なり」と。

●小濱町 二本松町の東南二里にあり。人口六千を有し、蠶糸業を以て川俣町と並び稱せらる。川俣町の南五里に當れり。

●隠津島神社 二本松町の東方約二里、木幡村の内木幡にあり。別號を治陸寺と呼び、もと辨財天と稱せり。永承年間、源頼義父子の戦勝を祈りし所と轉へ、木幡山の名は後冷泉天皇の命名なり。社殿宏麗、風景また美なり。

●岳下温泉 二本松町の西方二里餘、安達太郎山の山麓にあり。一に深澤の温泉と稱す。二本松よりの途上に建石峠の險あり。また遠藤ヶ瀧の勝あり。

二本松の次驛を松川といふ。福島縣中、羽二重の製織を以てその名天下に噴々たる川俣町はこの東方三里餘の山中にあり。

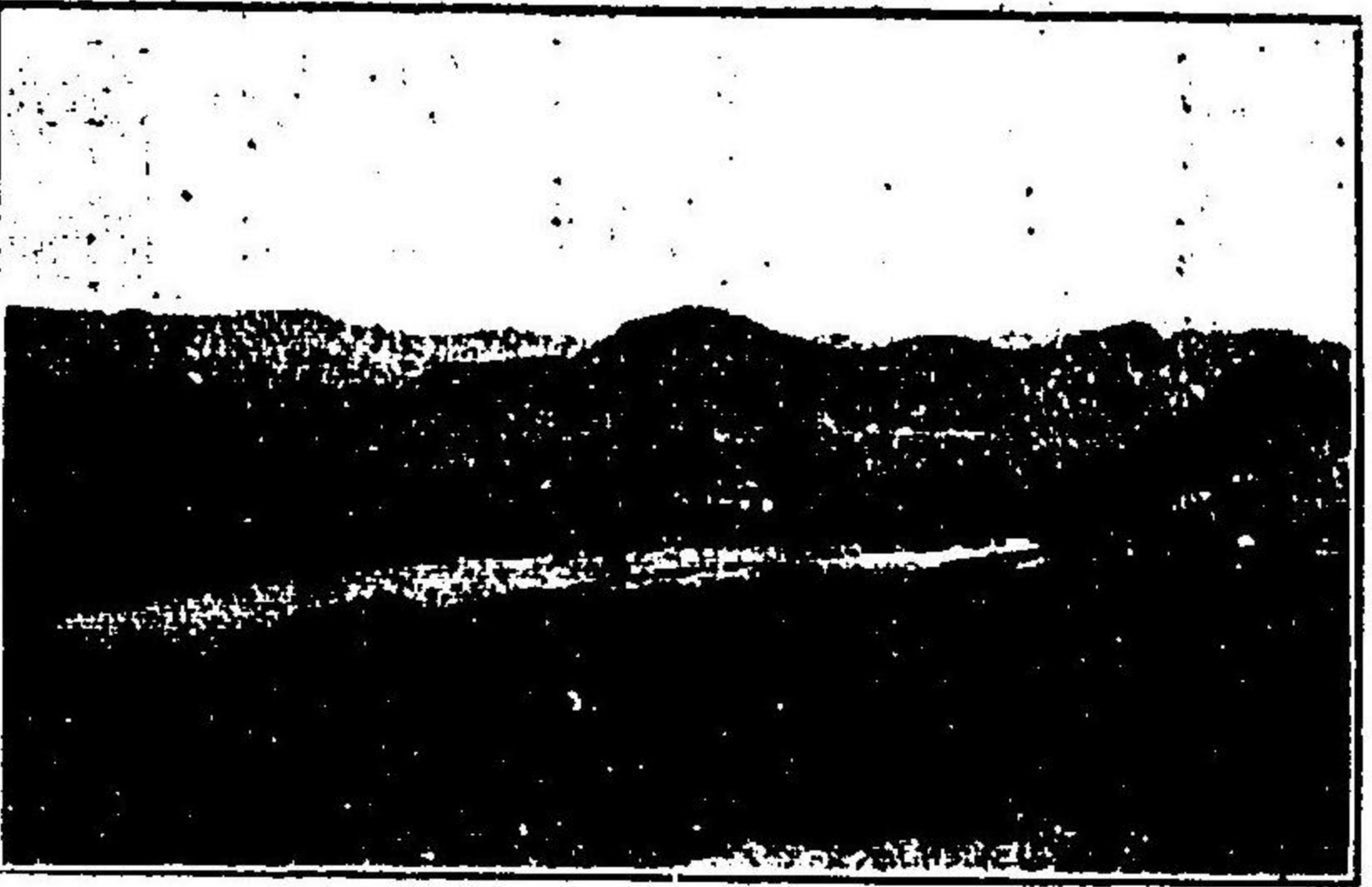
川俣町 町は伊達郡の南端に位し、人口五千を有する一小邑たるに止まれど機業主産地にしては實に本邦有數なり。毎月定期の市場を開き、附近各地の織物の集ること宛然關東に於ける桐生足利の如し。然も維新前は川俣織と稱する一種の平絹を産するのみなりしが、明治十二年の交、人を群馬縣桐生町に送りて、羽二重の製法を習はしめたるものにして、爾來銳意機業の發達を計りし結果、今は羽二重に於ては却つて桐生を陵がんとす。主として輕目羽二重を製織せり。町に川俣絹布精練會社及び日本絹布精練會社あり。鄰村飯野村の地また多く絹羽二重を産出す。

松川より平石の隧道を越ゆれば、丘陵次第に開け、前に福島市の萬張と、信夫山の翠微と阿武隈須川兩川の帶を曳きたるかことなるを見ん。これ阿武隈川流域に作られたる平野中最も廣潤なる福島平野にして、吾妻の連山は西南に高く、西北には羽前陸前磐城三國を劃れる板谷峠栗子山仙翁峠等連互し、東には靈山の山脈蜿蜒として秀て、唯東北の一隅僅かに開けて、其處にその阿武隈の河流は滾々として流れ行く。一桁の織

橋を北に渡れば即ち福島市は阿武隈川の南岸にあり。

福島市 信夫郡の東部に位す。東方阿武隈川を繞らし、南西北の三面は土地平坦にして田圃相連り、遠く吾妻小富士の累巒を雲烟の間に望む。市の人口三萬千五百餘、縣廳を置き、聯隊區司令部を設けて、實に東京以北屈指の都會たり。兩羽鐵道はもとこの驛に於て北、西に相岐る。市中の繁華區は本町、大町、榮町、置賜町等にして、大買巨商軒を並べ、往來頗る頻繁なり。これに次で中町、荒町、上町、萬世町、北町等また首なる商家櫛比せり。又、杉妻町には縣廳を初めとし、官衙、學校及び官吏の住宅多きを占む。而して町は舊と板倉内膳正の城邑に屬し、往時は大佛城とも、松目ヶ城とも號せしに、天正年間に至りて初めて福島城と改めたり。街南十町餘に椿館及び春日館の墟あり。椿は岩城判官の居にして、春日は伊達氏の臣互理安房守の居館なりしと傳ふ。然れども市が現今の繁盛を致したるは全く維新以後にして、その地勢の高燥なると、交通の要地に衝れるとはこれ亦重なる原因をなせり。ことに、官線奥羽線は

この地より起りて板谷の險を越え、米澤、山形、秋田の地に延長したれば、東北兩羽の商權は全くこの地に集中せんとせり。又、地の附近は養蠶地として甚だ名高く、福島縣の種紙はたゞに國內にといまらず、遠く滿州に聲價を博せり。今、重なる官術、學校、諸建築物等を列記すれば、縣廳及び縣會議事堂は字杉妻町にあり。三郡共立病院はその北に隣る。師範學校及び赤十字社福島支部は字舟場町にあり。縣立蠶業學校、同工業試驗場は渡利村にあり。公會堂は字宮町にあり。地方裁判所は字新町にあり。縣立高等女學校、福島監獄、福島羽二重株式會社は信夫山木會根田にあり。縣立中學校は字森合にあり。その他停車場は字榮町に、日本銀行出張所、共同生糸荷造所、蠶絲米穀取引所は字大町に、改良玉絲製絲株式會社は字清



明町に、福島育兒院は同町常光寺の内にあり。なほ、聯隊區司令部、郡役所、諸銀行會社に乏しからず。新聞社の重なるものには福島新聞、福島民友新聞、福島民報などあり。市役所は字杉妻町に置く。今この地より各地に至る里程表をかゝれば左の如し。

東京府	七十一里〇八町	桑折町	三里	坂下町	二十六里〇二町
新潟縣	六十六里十七町	二本松町	五里十九町	高田町	二十五里二十七町
栃木縣	四十六里十一町	郡山町	十一里三十町	飯坂町	二里十町
宮城縣	二十一里三十五町	須賀川町	十五里〇七町	川俣町	五里二十八町
山形縣	二十三里二十七町	田島村	三十四里二十六町	梁川町	五里
磐城平町	三十二里二十一町	若松市	二十二里三十一町	本宮町	八里六町
中村町	十四里三十四町	喜多方町	二十七里十六町	猪苗代町	十七里二十七町

大日本地志記して曰く「奥羽六縣中、商業都會として掲ぐるに足るべきものはたゞ一の福島市あるのみ。仙臺市の如きは多數の人口を有する東北の大街街なれども、商業の點に於て殆ど語るに足らず。而して福島市の如く商業都會として繁榮を極むる所以の者は、縣下に養蠶を業とするもの多くして、各地に於て製造せらるゝ生糸は、悉く皆一たびこの地に集合して、更に他に輸出せらるゝが爲めなり。抑も福島縣下に於て製出

せらるゝ生糸は器械織のもの絶えてなくして、何れも各個養蠶家の農事の餘暇を以て月毎に自ら手を下し製する座繰糸のみなるを以て、之れを海外輸出品として貿易港へ出す爲めには、特に形體を整へ階級を附して荷造を爲すの必要あり。是れ福島町に共同荷造所協立荷造所及び熨斗糸荷造所等なる特殊の機關の設備ある所以なり。此は福島市の外には二本松に一個あるのみにして、之を除くは日本國中何れの地にも見るべからざる一種の共同事業なり。三所共にその事業は頗る盛にして、共同荷造所に於て取扱ふ生糸の数は毎年一萬梱に近く、協立荷造所を経るものまた五千梱を下らずといふ。而して是等荷造所の信用は近來愈々高まりその商標の有無に因て賣買に至大の影響あるに至れるより、近年に於ては獨り福島縣下のみならず、遠く茨城栃木地方よりも特にこの地を経由するものあるに及びたりといふ。斯くして毎年この地に入出する生糸の高は一萬五千梱乃至一萬七千梱の多數に達し、尙ほ年々増加の傾向を以て進むといふ。されば之が爲めに資金を要することも非常にして、殊に生糸のみに由て要せらるゝ者なれば地方の小銀行は之に應ずる能はず、勢ひ爲替となりて不平均を來すの恐ありしが、去る三十四年七月特に之れが爲めにこの地に日本銀行出張所を設けてこの缺點を補ひしより、今は金融の敏活を缺く憂なく、益々好望の地に進むに至れり。福島市は此のごとく生糸の集散地として一に名高きものなれども、その附近の地方殊に伊達、信夫の諸郡の如き過半桑園を以て充たされて稻田少く、米穀の供給を他地方に仰ぐ所多ければ、從て福島市は他の一面に於てはその需要地として亦其取引甚だ活潑に行はる。要するに此の地は東北地方にありて商業最活潑なる地と云ふべし。』

福島縣廳 市内杉妻町にあり。舊城址に當る。縣下三市、十七郡を管せり。人口凡そ百二十萬といふ。

紅葉山公園 (板倉神社) 福島縣廳の東南にして阿武隈河畔にあり。園中に池を穿ち、南方河に臨んで板倉神社あり、今縣社に列す。

辨天山公園 福島市と阿武隈川を隔て、その東邊渡利村にあり。山上、川を隔て、福島市の瓦葺を望み、遠く吾妻富士等の諸山に面し、且つ信夫公園と相對す。山に櫻樹多し。

信夫橋 福島市の西端にして、須川に架す、陸羽街道路に當れり。橋の長九十九間、夏夕、納涼に佳なり。

稻荷神社 福島市字宮町にあり。今の社殿は文祿の建立と稱し、縣社に列せり。社域清酒、地に藤花あり。

信夫山公園 福島停車場より十六町にあり。山は平野田畝の間に隆起せる一丘陵に

して、古來その名高し。順徳院の御製として「都には花もちりあへずみちのくの信夫の山は春風のころ」を初め、歌詠に入りし例もまた少なからず。山上に羽黒神社あり。展望佳絶、湯殿山を西に望んで景致頗るすぐれたり。山の南腰を開いて公園に充つ。松杉鬱蒼として翠したるが如く、梅櫻その間に點綴し、多く花卉を植ゑたり。景趣、南方には田野を隔て、福島市の瓦甍を一眸の中に集め、仰いで吾妻山の噴烟を望むべく、伏して阿武隈の洪流と須川の急湍を眺むべし。所謂福島市の八景とは、信夫山秋月、洲川落雁、小富士暮雪、福島晴嵐、信夫橋夕照、黒岩夜雨、文字摺晚鐘、阿武隈川歸帆これにして、皆なこの地より攬勝すべし。順徳院「なげやなげ信夫の山よぶこ鳥つひにとまらぬ春ならずとも」業平朝臣「しのぶ山忍びてかよふ道もかな人のこゝろのおくも見ろべく」。

黒沼神社 信夫公園の北隅にあり。式内の古社にして、今縣社に列せり。
招魂社 黒沼神社と相並べり。社邊松あり、櫻ありて、自ら瀟洒の趣に富む。また

社の西南に武徳殿あり。明治三十六年の設立とす。

此所に福島市を中心としてその附近の名勝を説くべし。

黒岩虚空藏 福島市の南一里にして、杉妻村に屬す。阿武隈川に臨みて、怪岩、急流の景致愛すべく、また松杉多し。堂は弘仁年間の創立、寛永中の再修と稱ふ。背後の巖上に石佛あり。

信夫文字摺石 福島市より東方一里ばかりを隔てたる岡山村字山口の觀音寺内にあり。有名なる古蹟にして、其石の長さ一丈一尺六寸、幅六尺九寸七分、地上にあらはれたるは南方一尺七寸、北方六尺二寸なり。今めぐらすに石糊を以てす。中古、此石に四季の花を載せ、其上にて布を摺り朝貢せしことあり。其花模様のもぢれて印するより其名を「もちすり石」と稱するに至れりといふ。後人、布上に葱章を印し、しのぶ摺と稱し販賣せり。古來、春の青葉を以てその石面を摺れば相思の愛人の面影を見得べしと俗説す。奥の細道曰「二本松より右に切れて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。あく

れば、しのぶのもぢずりの石を尋ねて、信夫の里にゆく。遙か山かげの小里に、石なれば土に埋みてあり。里の童べの來りて教へけるは、昔はこの山の上に侍りしかば、往來の人、麥草を荒らして、この石を試みけるを惜みて、この谷へ突き落し侍れば、石のおもて下さまに伏したりといふ。さも有るべきことにや。早苗とる手もとや昔しのぶすり」。源融「陸奥の信夫文字摺たれゆるに亂れそめにし我ならなくに」源三位頼政の歌に「おもへどもいはでしのぶのすり衣こゝろの内にもたれぬかな」寂然法師「みちのくのしのぶもぢずりしのびつゝ色には出したれもそする」

鎌田桃林 福島市の北約一里にして鎌田村にあり。阿武隈川に近く、桃樹數千株を栽植せり。花時、頗る美觀を呈す。

瀬上町の菖蒲園 瀬上町は福島市の北一里半にあり。菖蒲園は一私人の所有にして、須賀川の牡丹園と並稱せらる。

奥羽西線は福島驛に分歧して、西を指し、庭坂驛を置きて國境板谷峠の險にかゝる。庭坂野田の附近梨花多し。

高湯温泉 庭坂停車場より二里、福島市より四里にあり。土地高く、西に吾妻山を負ひ、三面開豁にして、福島市の市街を眼下に下瞰す。散策地として不動瀧、熊瀧、五色沼あり。慢性皮膚病、佝僂質斯、痛風等に効ありといふ。

土湯温泉 福島市より西南四里餘を隔て、土湯村にあり。温泉の發見は遠く古代にありと稱し、その物語を傳へたり。衰弱病、貧血病、皮膚病等に効ありと稱す。またこの地より三里餘にして吾妻山噴火口に達すべく、途中に男沼、女沼、思の瀧、燕瀧、仙水沼等の諸勝あり。

吾妻山 日本風景論、「福島市の西五里温湯温泉より西一里半にして、吾妻富士（小富士海拔一七三四米突）突起す。吾妻富士の東に東吾妻山（海拔一八八八米突）あり。吾妻富士と東吾妻との間に、北に硫黄山（海拔一六四六米突）あり。硫黄山の西北に吾妻山（海拔一八六〇米突）あり。吾妻山の北に一切經山（海拔一九一九米突）あり。此等諸山皆な吾妻富士（一切經山の東南十七町）の環壁をなす。一切經山の北五色沼を距て、家

形山(海拔一七二四米突)あり。此等諸山の間より近年來時々爆烈す。吾妻富士の火口は直徑五百米突あり。吾妻富士の西に桶沼あり。舊火口にして直徑百五十米突あり。五色沼も舊火口にして直徑五百米。山嶽志曰、「土湯温泉を六時出發、八時吾妻小富士の山腰なる納豆坂に至る。左側に有名なる一杯清水あり。寒冽一杯以上飲むに堪へざるより命名せしなりとぞ。實に清冽にして水量亦多し。稍登れば、數町歩の平地の芝生を見ること數々、仙水沼其他池沼多し。榎、樅、白檜の森林之を圍むあり。枯木の多きは近時噴火の祟りならん。小富士の左側を廻れば、直ちに一切經山の半腹に於ける噴烟を見、轟々の聲、鼓膜を衝く。十時現噴火口即ち硫黄谷に達す。途中徑一間乃至二三間の回穴、恰も古井の如きもの無數あり。是れ近時噴騰せし巨石の落下して陥成せるもの、慘狀想ふべし。本山は間歇的噴氣にして、其盛なるときは磐梯を凌駕す。且つ硫氣甚しく、噴口硫黄附着して、花火筒の如き狀を呈し、奇觀極まれり。試みに杖を差出せば、數分時にして周圍硫黄の鍍附厚二三分に及ぶ。樹枝を以てせば恰も黄色なる珊瑚

樹の觀あり。大噴孔三箇小なるもの十數なり。十一時、一切經山の頂上に達す。南には小富士の頂上、摺鉢狀の舊噴口の美觀、其儘に存し、北には五色沼の大水瀦ありて水色異彩を呈し、其他噴口、碧水を湛ふるあり、赤水を湛ふるあり、無色水あり、涸れたるあり。火山の歴史的標本を觀んもの、必ず此山に登るべし。本山又瀧に乏しからず、燕の瀧の如きは、高三十丈、幅數間、瀧壺は、方二十間餘、壯觀なり。五時土湯に歸宿す。(明治三十七年大平氏)。その他、參考書に地學雜誌、大日本地誌あり。

福島の大驛に長岡あり。飯坂温泉に遊ばんとする人は福島よりも寧ろこの驛に下車するを便とすべし。

●●●●●
飯坂温泉 長岡停車場より三十一町、福島より二里半を隔つるに過ぎず。西北は耕地を隔て、峯巒起伏し、その最も高きものを大作山といふ。東南は甚だ開豁にして直に田圃に連り、福島に通ずる道路砥のことく通ず。摺上川は北より來りて村の西部を掠め、其處に有名なる十綱橋を架せり。橋は柱脚を用ひず、銅鋼以てこれを繋げり。其長さ三十八間、人呼んで釣橋と稱し、最も奇巧を極む。橋下の溪流はその駛きこと

矢のごとく、玉と亂れ雪と碎けて、思はず人をして快哉を叫ばしむ。此地に入りて先奇異の思を爲せるは、一般の家屋の構造にして、河に臨めるものは孰も絶壁に沿ひて建築したる爲め、道路より見れば只一軒の平屋なれど、川の方面よりこれを望めば孰れも三階若くは四階ならざるはなし。されば普通の家屋とは全く趣を異にし、入口即ち四階にして三階二階と次第に下層に降るなり。戸數大凡千餘、旅舎數十戸ありて、孰れも構造の美を盡す。食品また多く、交通娛樂の機關もほゞ完備せり。

大鵬公園 即ち大作山なり。一に丸山と稱へ、飯坂町の西北にあり。治承年間佐藤庄司の據るところにして、今、開いて浴客消暇の遊園となす。芭蕉の奥の細道に曰、「信夫の里より月の輪の渡しを越えて、瀬上といふ宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は、左の山際一里ばかり、飯坂の里、鮎野と聞きて、尋ねく行くに、丸山といふに尋ねあたる。是庄司が舊館なり。ふもとに大手の址など、人の教ふるにまかせて、涙をおとし、又、かたはらの古寺に、一家の碑をのこす。中にも、二人が嫁のしるし、先づあ

はれなり。女ながらも、甲斐々々しき名の聞えつるかなと袂をぬらしぬ。墮涙の碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば、義經の太刀、辨慶の笈を留めて、什物とす。笈も太刀も五月にかざれ紙幟。五月朔日のことなり。その夜、飯坂に泊る。温泉あれば湯に入り、宿を借るに、土座に筵をしき、怪しき貧家なり。ともし火もなければ、圍爐裏の火影に、寝ところを設けて臥す。夜に入りて、雷鳴り、雨しきりに降りて、臥せるうへに漏り、蚤蚊にせめられて、眠られず。持病さへ起りて、消えいるばかり心すゝます。」

醫王寺 飯坂町の西南七八町にして、平野村大字井佐野に屬す。寺内に佐藤庄司一族の墓あり。また、什物として義經、辨慶、庄司等の遺物を收藏す。樂翁退閑雜記に曰「予、飯坂に浴しけるに、人々の來り捧るもの、石かはらなんどの類ぞ多き。醫王寺にあるのは、義經のかぶと、負櫃、繼信兄弟の鍔などあり。いづれも古きものにては侍れども、目を驚かすものにはあらず。佐藤庄司の城あと見せにやりける者かへ

りて、ふるき瓦ひろひ来りけり。ある日、醫王寺に尋ねしに、門へ入れば、右左木立もしげりたり。雨さへ降りければ露うち拂ひつゝしばらく行くに、いと老木の立ならびたる中に、多くの石碑あり。みな佐藤の一族なりとぞ。ひとつく見たるに、皆漫漶せり。梵字ののこれるもあり。または、弘長、文保などの年號かすかに見ゆるもあり」猶ほ前出奥の細道に参考すべし。

湯野温泉 飯坂温泉と摺上川を隔て、相向へり。長岡停車場を距る三十町、福島市を北に距る二里十町とす。景趣多く飯坂に譲らず。泉質またほ似たり。北方に愛宕山公園あり。小丘にして源顯家卿築城の址なりといふ。丘上、祠を安んじ、眺望に佳なり。園に松櫻を植ゑ、且、娯楽場の設備あり。

穴原温泉 湯野温泉より半里を隔て、摺上川の上游にあり。地境閑雅にして、奔流、岩石の景を見るに宜し。またその地に湯野堰開鑿の碑あり。米澤の藩臣古河善兵衛の功を頌するものとす。

伊達風穴 茂庭村御在所にありて、長岡停車場より二里半を隔つ。明治四十年の建設にして規模甚だ大なり。

汽車、長岡驛を北に去れば僅に數分時にして桑折町に至る。長岡に生絲の市天王市あり。また停車場を距る約十町、東湯野村は自治村としてその名高し。

桑折町 伊達郡役所の所在地にして、人口三千九百を有す。附近に梁川、保田、藤田、掛田等の養蠶地を控ゆるを以て、市街繁盛、商況殷富なり。奥の細道曰「飯坂より馬借りて桑折の驛に出づ。遙かなる行末をかへて、かゝる病おぼつかなしといへども、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死すも、是、天の命なりと、氣力いさゝか取りなをし、路縦横に踏みて、伊達の大木を越す。」

御蔭の松 桑折町中無能寺にあり。寺は淨土宗、享保年間の創建にして、専心作阿彌陀坐像を本尊とす。松は即ちその庭前にあり。横偃翠蓋の如く、枝を延すこと方十間、當寺二世良照不能上人の植ゑたるものにして、明治十四年聖駕東巡の途次此寺中

に憩はせられ、御賞覽を辱うし、侍臣に令して名を撰ばしめ御蔭の松の名を賜はる。

●梁川町 桑折町の東二里餘にあり。東に靈山を負ひ、廣瀬川を挾んで、民家櫛比す。人口約五千三百、蠶業の隆盛を以て名甚だ顯れ、驛南に蠶業講習所あり。福島より保原を通じて來る街道はこの地に於て相岐れ、各國界を越えて磐城の伊具郡に入り、阿武隈川畔に於て再び相合し、以て同郡の角田町に達す。里程福島へ四里二十六町餘、保原町へ一里二十三町とす。

●保原町 阿武隈川流域の一邑なれど、河の東一里に位す。人口凡そ五千三百、商業般盛なり。町に大日本輸出羽二重機業合資會社あり。資本金五十萬圓の大會社とす。●掛田町 保原町の東南一里半にあり。福島へ四里、桑折へ三里を有す。人口三千五百、山中の一邑にして、蠶業盛なり。福島市より磐城の東境中村町に達する街道はこの地を通ず。町より西南一里小國村に小國信用組合あり。

●靈山神社 靈山は桑折停車場より東方五里十町にあり。南朝の忠臣北畠顯家が、義

良親王を奉じて義を四近に徇へたる古址にして、四方斷崖絶壁高きこと數十仞、城礎今猶は殘存せり。絶嶺の眺望甚だ廣濶にして、東は相馬一帯の海色より北は陸前金華山の青螺を望み、西南には信夫、伊達兩郡の山野を下瞰し、人をして佇立願望去るに忍びざらしむ。而して、靈山神社は山より四里を隔てたるところにあり。北畠親房父子四名を奉祀せるものにして、明治十五年の創建に係り、同十八年特に別格官幣社に斑せしめらる。本社、拜殿、幣殿の三を有し、社地は山地にあり。即ち靈山支城の趾とす。南方紀傳曰「延元二丁丑年、北朝建武四年に當る。春正月、尊氏、式部大輔兼頼を奥州の管領となす。兼頼少年たるにより、氏家入道道誠代官たり。同月八日、陸奥に於て、凶徒蜂起、依之義良親王並に顯家卿、伊達郡藤江靈山に入らせ給ふ。更に太平記曰「奥州の國司北畠源中納言顯家卿、去ぬる元弘三年正月に園城寺合戦の時、上浴せられて、義貞に力を加へ、尊氏卿を西海に漂はし、大功なりとて、鎮守府の將軍になされて、又奥州へぞ下されける。その翌年、官軍戰破れて、君は山門より還幸な

りて、花山宮の故宮に幽閉せられさせ給ひ、金崎の城は、攻め落されて、義顯朝臣自害したりと聞こえし後は、顯家卿に付き隨ふ郎徒、皆落ち失せて、勢微々なりしが、纔に伊達郡靈山の城一を守りて、あるも無きが如くにぞおはしける。かゝる處に、主上は吉野へ潜幸なり、義貞は北國へ打ち出でたりと披露ありければ、いつしか又人の心替りて、催促に隨ふ人多かりけり。顯家卿時を得たりと悦びて、廻文を以て便宜の輩を催さるゝに、結城入道道忠を始とし、伊達、信夫、南部、下山、六千餘騎にて馳せ加はる。國司即ち其勢を拜せて、三萬餘騎、白川の關へ打ち越え給ふに、奥州五十四郡の勢ども、多分はせつきて、程なく十萬餘騎になりけり。更に顯家の西上して戦没せし後は、その弟顯信此所に別將を置いて守らしめしが、次で興國四年、遂に尊氏の將島山高國等の爲めに攻略せらるゝところとなれり。

關元龍「節彼靈山一忽分、若々雲樹夕陽城、藩鎮會震英雄略、史籍猶芳社稷臣、汗馬西征驅萬里、凡旆東顧卒三軍、中興已矣天哉噫、遺恨空藏安野塵」青山延壽「靈山何峨々、峭立入雲危、維昔北島公、此地建牙旗、

我來訪遺跡、遙々入翠微、登陟至半腹、頓驚靈山奇、骨立無寸膚、萬仞仰壁障、那知絕頂地、高原還逶迤、此處或陣趾、定屯萬虎貔、縵斷餘古井、樹圍遺叢祠、樵人遙指點、館趾倚山隈、更憶中興日、公出鎮北陲、皇綱昔解組、四郊豺虎馳、茲公投袂起、一戰走老虺、歸鎮安反仄、綏撫又幾時、凶謀復再煽、萬艘蔽海來、天步艱未歇、萬乘出玉埤、河北連元隄、公守此屢頽、入援奉帝勅、糾合六千師、渡河搗賊巢、轉圍抵郊畿、孤軍苦長征、疲散冒重圍、將星晦光芒、郊野乍陰霾、崎嶇窮巨方、難回時運乖、幸有少公英、後來續遺基、爵峰奉皇子、守戰延十井、憑吊瞰奧野、疊疊幾嶽巖、爵峰知何處、暮煙空翠巖、低徊不能去、俯仰傷我懷、室町曾繁華、涼草今離々、二公拒守地、草木愈榮滋、威靈千歲存、與山爭崔嵬。」

桑折の次驛を藤田驛とす。磐城材木巖の勝はこの驛より二里半にあり。その他義經腰掛松、伊達大木戸、笠摺等の諸勝いづれもこの驛より行くべし。藤田の次驛越河は既に宮城縣磐城國刈田郡に屬す。

○岩越線沿道 郡山驛より東北に分岐する岩越線は猪苗代湖北より會津地方に入り將來は越後の新潟に出んとするものにして、現時は耶麻郡の喜多方町を以て一時の終端驛とせり。熱海驛には温泉あり。山瀉驛よりは猪苗代湖を見るべし。猪苗代町は同

名の停車場あり一里餘を隔つ。磐梯山は此處より見るべし。若松市以北は四面山岳こ
れを圍み、風景自づから他に異れり。越後に至るには、喜多方町より阿賀野川の流を
下るを使とす。

郡山より堀ノ内、安子ヶ島の二驛を置きて、熱海驛に至る。郡山より九哩にして、峠巒次第に車窓を壓し來る。

縣有模範林 安子ヶ島附近二千町歩に亙る。旅客は熱海停車場の西に於て車窓の左

側にこれを望見し得べし。明治三十八年の計畫といふ。

熱海温泉 熱海停車場の附近にして、高川村大字高玉に屬す。田中の低地より湧出

し、溫度低下なるを以て別に人工温湯を設け再浴の便に供す。道路は若松街道に沿ひ

車馬の往來自在なるを以て浴客多し。而して、その地勢、西南北の三面は悉く山嶺に

圍繞せられ、たゞ東方の一部に曠野の連れるを見る。泉質は炭酸泉なり。

石筵種馬場 熱海停車場の北一里半、高川村大字石筵にあり。縣有、明治三十五年

の創置にして、種馬の育成及びその他の事業に従事せり。

高玉鑛山 高川村に屬して、熱海停車場より一里餘を隔つ。金銀鑛にして、創業は

遠く慶長、寛永の頃といふ。明治に至りて坑法を改良し、現時、採掘區域三萬五千坪

に及べり。

熱海より中山宿驛を経て山潟に入る。中山峠は中山宿と山潟との間に横りて、其所に沼上隧道を穿つ。隧道
の右に沼上水力發電所あり。

山潟驛 上下列車の交換所として、當線中樞要の地なり。而して地は已に猪苗代の大

湖に臨み、會津地方中最も好風景の地なり。

安積疏水口沼上瀑布 安積疏水は月輪村山潟より湧出す。石堤を築き、溝渠を穿ち

石造水門橋を設け、沼上嶺の山腹を穿つて、溝水直下す。高さ凡そ十四丈五尺、これ

を沼上瀑布といへり。

關都驛 山潟の次驛にして、北には突兀青空を摩する磐梯山を見る。猪湖の水はこ

の地に至りていよく開け、宛然一大鏡の如し。これより猪苗代湖畔をめぐれば、勝

地陸績として相接し、殆ど指を偲ふるに暇あらず。まづ停車場に出で、四町に姥堂あり。それより麓山神社（會津二十四社の一）を拜し、小平瀨天満に詣で、その境内の眺望のすぐれたるを賞し、益、湖畔に添ひ行けば、好景百出一々状すべからざるものあり。



雪山巔を蔽ひ、碧波瀲灩油の如きの時を以て最も宜しとなす。蓋し、國內第一の勝地

猪

苗

代

湖

猪苗代湖 安積、耶麻及び北會津の三郡に互り、湖の中心を以てその境界となす。東西三里餘、南北二里餘、湖而してその周圍實に十三里十九町に及ぶ。煙波渺茫、對岸の風物さながら淡墨の繪の如し。もしそれ天晴れ風靜かなるの日は、磐梯以下の諸山、例まに影を湖心に投じ水光山色互に相映對して、壯觀言ふべからず。ことに殘

なり。湖中一島あり。翁島と稱す。その西北より湖水溢れて日橋川となり、下流沿岸の地を潤す。その若松街道を貫くところ、戸ノ口驛に於て所謂十六橋を架せり。而して、湖の南岸は丘陵直ちに湖畔より峙立し、以て幾段の風致を添ふ。北岸は概ね低濕の地にして、多くの村落此地に散在し、その主なるものを猪苗代町となす。湖畔最好景の地としては、戸ノ口、長濱、小平瀨、山瀨、舟津附近の地を推すべく、ことに前出小平瀨天満の境内よりは、一望湖水の半面を盡し、景勝頗るすぐれたり。近時、この湖畔に暑を避くるもの多し。

地學雜誌曰、猪苗代湖は舊噴火孔址にあらず。今、形勢を考ふるに、東方の山脈は本宮より猪苗代、若松に通ずる中山峠邊にありて、本邦最古の片麻岩より成り、尙ほその西に進めば、火山灰岩その上を掩へり。またその西南側に於ても火山灰層の堆積ありて、往々火山岩層と互層す。要するに、この火山層は、往昔布引磐梯等の諸山より、熔岩及び火山灰を迸出せし際堆積せしものたるべし。惠日寺の縁起によれば、もと猪苗代湖は一大沃土なりしが、大同年間の噴火によりて湖水となれりと。この説、全く根據なきものと見做す能はず。願るに、大同年間の噴火たる、その勢頗る劇烈にして、近年の破烈の如く、山峰の一部を崩壞せしな

るべし。而してこれが爲めに流出せし泥土は堤を成し、諸溪の水を堰きて湖水を造れるものなるべし。大日本地誌曰、猪苗代湖は琵琶湖、霞ヶ浦に次ぎて實に本邦第三の大湖なり。東、西、南の三方の始原代の岩石及び第三紀層の山脈によりて遮られ、その水面は海面を抜くこと五百餘米にして、會津平原より高きこと約三百米なり。その湖頭は東北にありて長瀬川と稱せられ、茲に三角洲を湖中に斗申す。附近淺瀬多く葎叢生し、漁栅その間に陰見し、湖岸を距る數百米の沖に於ても、その深度一米内外に過ぎず。三角洲の南に於て、湖岸は深く彎入して一小灣を作り、その以南は第三紀層の山脈急に水に没し、急斜を以て深底に入るが如し。南、西の内岸は主に第三紀層の丘陵に圍まれるれど、その間に低平の地を成し、北、東の兩岸には往時湖底たりし廣大の平地を有し、又西北岸には翁島あり。その排水には西北にありて戸ノ口と稱し、これより日橋川となりて西走す。湖底はやゝ摺鉢状をなし、最深點は湖の中央部もしくは中央以南にあるべしといふ。湖水透徹帶黄藍色をなして、滄波森々遠く相連り、北方近く磐梯、安達太郎の噴咽と相對す。大同元年に成生せりとの口碑と、湖底の泥土腐蝕分解の量少なきこと對映して考ふるに、その成生は蓋し有史以後にありしものならむ。而して湖畔の地貌を見るに湖域は近時次第に縮少するの傾向を示せり。

猪苗代町 猪苗代湖北一里半にあり。西北磐梯山を負ひ、東方長瀬川に臨む。人口約三千餘、昔時は要害の地を以て稱せられ、龜ヶ城の遺址は今猶ほその殘壕を有せり。

土津神社 猪苗代町の北方、磐保村見禰山にあり。會津藩祖保科正之家光の弟の靈を祀り、祠北にその墓表あり。境地、南方猪湖の深碧を望み、山秀水明、坐ろに人の心を惹くものあり。蓋し、猪湖の全景を望むに最も適好のところ、社は現時縣社に列せり。

三忠碑 猪苗代町の西方一里餘、磨上原あり。原は磐梯山麓の原野にして、天正年間蘆名伊達の古戰場とす。碑文に記して曰「三忠就謂、謂金上盛備、佐瀬種常、常雄所云疾風知勁草、板蕩議誠臣、若三士是也、猪苗代盛國、以邑叛、納伊達政宗也、蘆名義廣、自將討之、天正十七年六月五日、戰于磨上原、師敗績、出走常陸、初龜王大毛嗣、國相富田、平田等、議與政和、請其弟爲後、盛備與沼澤出等不可、曰、近年彼之與我交際如何、而今欲主其弟、不如迎佐竹義重弟二子義廣、既而國相爭權、亂將作盛備慰諭而止、政宗乘此釁、所以有是役也、種常、常雄死之、盛備慷慨曰、我國之大臣、不與社稷有亡、何面目立干天下哉、遂赴敵而死、是日徵此三士、義廣殆不免、

我公讀史、至此歎息、高三士節、今茲（喜永三）七月、過其墳、賦國雅弔之、三墳靈

所、今建石於此、併表之云々。」

磐梯山 大磐梯、小磐梯、櫛ヶ峯、赤埴の四峯に別れ明

治二十一年七月十五日の噴火は猶世人の眼に明かなり。

磐 海面より高さこと六千四百八十一尺、周圍十五里、絶頂

梯 の石の祠に古昔の磐梯神社を祭る。毎年陰曆六月十五日

を以て祭禮と爲し、登山するもの多し。山の半腹より路

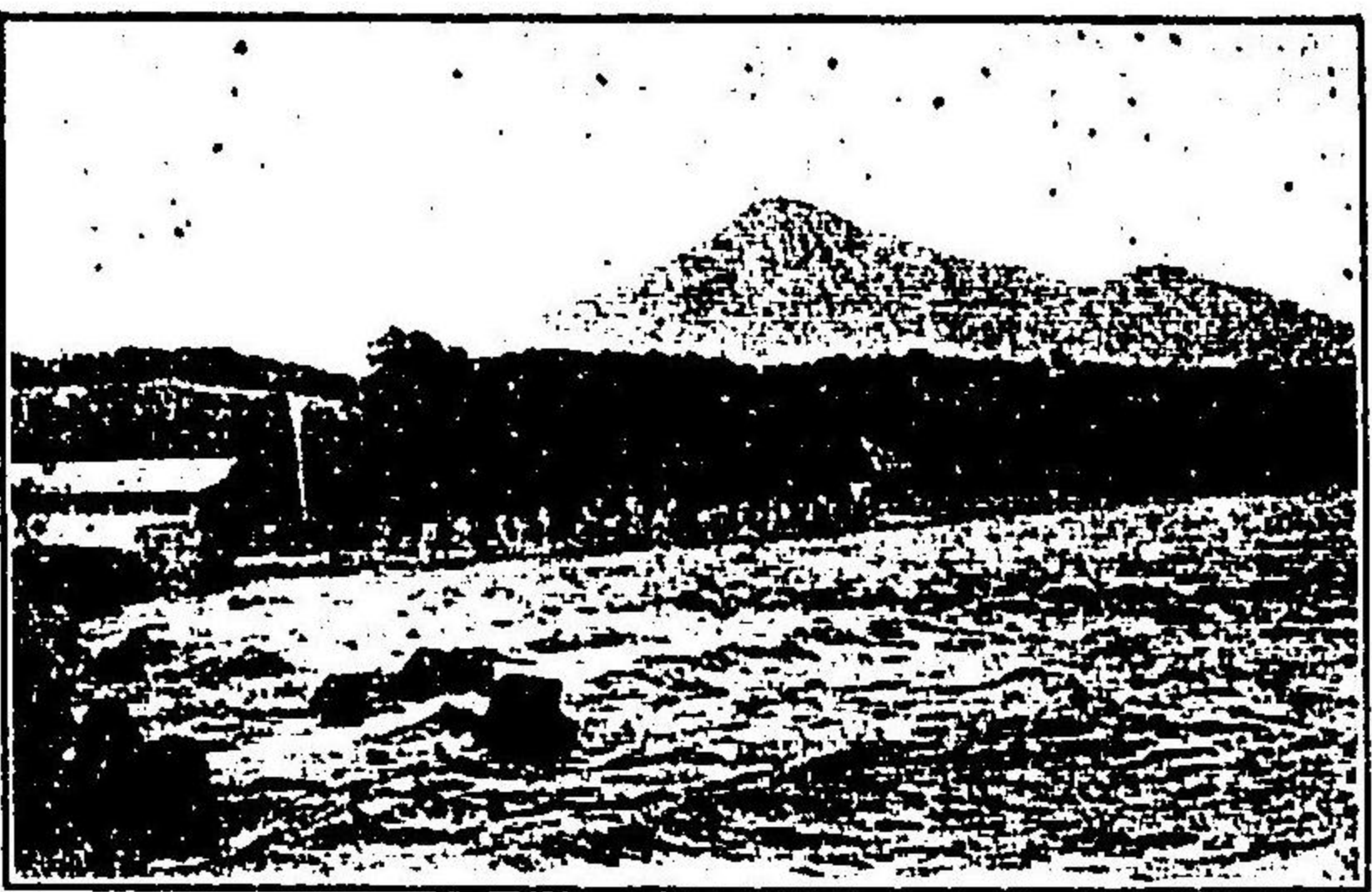
山 は非常に險しく、木を攀ち岩に縋らずんば登攀する能は

ず。絶巔に至れば爽氣肌を襲ひ、白雲脚下に飛び登臨の

快殆と狀すべからず。猪苗代町より登路二里許とす。モ

ウレー記して曰く「この山の大なる破壊せる所を見んと

欲せば、舊本街道に別れ、人車にて行くこと一里、これより徒歩右折し、大磐梯の裾



野を繞る。裾野は長くして多く草を生ぜり。高樹の鬱茂せるところに至り、登路急峻となり、三時間半程にして西の山足なる一山嘴に來る。前爆裂の慘憺たる狀の現出は人目を迷はしむ。此所に山中温泉の小屋あり。爆發當時其東室にありし者は死し、西室（茶の間）にありし者は死傷なかりしと云ふ。小屋を左に去り山嘴に沿ひ一窪池に至る。今猶ほ蒸氣を噴出せり。此山嘴に登るには極めて困難なり。匍匐して纔に火孔壁上に達す。其風景は大爆發の際岩石泥土を噴出し、更に水の浸蝕せる結果にて大變動を成せるにも關はらず、魔術の如く人を感動せしむ。山中の小屋より磐梯全山を廻行するには全一日を要す。徑路は噴出したる岩石及び泥の海を越えて、長瀬川の谿谷を遮斷する急流を横ぎり、荒廢せる川上村を過ぎ、谿谷を下ること三哩にして長阪村に至る。此住民は大爆發の時、前面の小屋に逃れんとし、泥流の爲めに埋沒せられたり。猪苗代より四分の三哩に峰村あり。長瀬川の屈曲せる部分此所にて噴出物に遮られ流下する能はず、遂に檜原湖を形成せり。長さ八哩廣さ一哩乃至二哩あり。以上の

困難なる歩行を欲せざれば、山中の小屋より二里なる押立温泉に下り、二十町にして
 ごしやらんばに出で人力車に乗り、又二十町にして岩越鐵道翁島停車場に至るを可と
 す。此山頂に登らんとすれば、三十五度の角にして急峻困難なり。他の一面は極めて
 急激に直下せり。眺望壯豁、飛驒、越中の連山を望む。

大日本地誌曰、赤坂、大磐梯の二峰は、東西に並び、南方に坐し、櫛峰、小磐梯（破裂の爲め、現今その形
 を存せず）は、北方に對峙して、所謂火口壁に該當するものなるべく、北方群巒の間に、懸崖を以て圍繞せ
 られたる沼平は、別ち舊火口ならん。然れども、四時不絶の浸蝕作用は大にその外形を變じ、又破裂屢起り
 て、その周壁を破壊し、以て現時の形容を呈したるなり。大磐梯は、海拔千八百四十米、頂上稍扇形を
 存し、南面の麓は七度乃至二十五度の傾斜なれども、頂上に至るに従ひ、次第に急にして、三十度以上に及
 ぶ。登山の最好路は、その南麓押立村より發し、約五軒にして直ちにこの山頂に達す。櫛ヶ峯は大磐梯山の
 東北に聳ゆるものにして、高さ千六百二十二米。山脊東南に延互し、裾野は東方長瀬川畔に及べり。其の西
 側は懸崖深く爆裂火口に臨む。湯桁山は大磐梯山の北に在りて、高さ千六百十五米。岩石巖々たる峻峰にし
 て、其餘脈西に延び、丸森（千三百六十六米）を起し、遂に猫窟火山に連なる。湯桁山の北には上ノ湯、中ノ
 湯の二温泉あり。尙ほ破裂以前には下ノ湯温泉中ノ湯の下に存せしと雖も、今は噴出物に掩はれて其の跡を
 留めず。之れ等の温泉は何れも硫質噴氣孔より湧出するものなり。小磐梯山は大磐梯山の東北に聳えたる高

峯なりしも、明治二十一年破裂の爲め、山體の全部破壊飛散して、其跡を留めず。而して破裂以前にありて
 は四近の驛邑より遠きこと、前記の諸峯に山體の大部を遮られたるを以つて、著るしく人の知る所
 ならざりしも、精細なる考察によれば、其の高さ殆んど大磐梯と伯仲の間にありて、群中の雄峯たりしもの
 なり。沼ノ平は前記諸峯の間にある凹所にして、斷崖を以て圍繞せられ、東方枇杷澤に向つて開口す。此れ
 蓋し一の噴火口にして、往時は數多の池ありて常に硫氣を噴出し、又其の中央には尙小丘ありて硫黄を産し
 たりといふ。然れども現今は全く破裂當時の噴出物を以て没せらる。沼ノ平の盡くる所一の絶壁あり、名づ
 けて二ツ岩といふ。火口内の水流はこゝに來り、奔下して一大飛瀑をなせり。其の下一小窪地日陰と稱する
 ありて、或は後期の噴火口址ならむかといふ。そもく、磐梯山は一の層狀火山にして、熔岩、岩層の累層は
 最も好く爆裂火口の峭壁に於て認むるを得べく、其の岩層の傾斜を察するに、何れも沼ノ平を中心として四
 方に放散したる形跡を示し、明かに沼ノ平は主要なる舊火口たるを證す。明治廿三年七月十五日前七時遠
 雷の如き鳴動を生じ、遂に七時四十五分頃猛烈なる激動と共に小磐梯破裂し、黒煙柱狀をなして昇騰し、山
 頂より約六百四十米の高さに達し、熱灰砂石を降らし、天地爲めに晦暝、頗る慘狀を極めたり。其の後爆裂
 は打續きて十數回の多きに及びたれども、暫時にして止みたりき。此の破裂の爲め小磐梯山の山體は、其の
 大部破壊飛散して、その跡に北方に開ける馬蹄形の爆裂火口を作りたり。其の大きいさ東西凡そ千二百米、南
 北凡そ千五百米にして、櫛ヶ峯湯桁山の山側に約五百米の絶壁を作り。而して火口内には北二十度西に走
 れる裂罅を生じ、噴氣孔之れに沿うて存し、爆裂當時は盛んに噴煙したりきと雖も、爾後次第に衰へて、現

今は僅に多少の蒸氣の噴出するを見るのみ。破裂の際に破壊噴出せられたる岩石の容積を概算するに一、二一三立方杆にして、其の細微なる部分は空中に飛散したれども、大なる部分は一時間約七十七杆の速度を以て山側を滑落流下し、約七十餘平方杆の地を埋没し、四百六十有餘の生靈之れが爲めに其の命を失ひ、田圃財貨其の害を被りたること少なからず。其の岩塊泥土は主として北側に馳走し、一部は秋元、細野雄子澤等の諸村を埋没して長瀬川の谷を溯り、一部は該谷を下りて川上の部落を埋め、尙ほ南方樋ノ口附近に達せり。又南側に奔下したるものは枇杷澤の溪谷を下り、其の末端三分して其の一は遠く見福の部落に達し、其の大半を没したり。爆裂により飛散したる火山灰は輝石富士岩の粉末にして、稀に玻璃を含有し、灰青色を帯び、風に従つて主に東々南に擴がり、遠く太平洋沿岸にも及びたり。山麓の地之れが爲めに萬物灰色に變じ、樹林も全くその縁を失ひ、又其の灰は濕氣を帯びたるを以て、松杉の如きは恰も積雪に封ぜられし如き状態を呈せり。其の被害の區域略々四十平方杆に及び、澁谷村附近にありては殊に甚だしく、一點の縁をも留めざるに至れり。其の他破裂に伴うて暴風地震等を生じ、又落下する岩片の爲めに、樹木は其の枝葉を摧折せられ、枯林蕭條の觀を呈せし所あり。而して、この破裂は、その勢の猛烈なりしに拘らず、近時日本の諸所に起れる火山破裂と同じく、全く熔岩を迸流せず。但し。地下に鬱積したる蒸氣の張力によりて、山體を破壊飛散したる爆發作用に他ならず。従ひて、その岩片灰砂は山體を構成したるものが、破碎せしものに過ぎざるなり。されど山谷の相貌は大變化を蒙り、その北側は曾て莽蒼たる原野にして、草叢生し、曾て山骨を露出せざりしと雖も、一朝にして、怪岩巨石累々滿目荒涼たる大漠と變じ、又、槍原川、長瀬川等の谷を壅塞して、所々に流水を溜溜し、槍原湖、小野川湖、秋元湖、等を現出せり。

猪苗代驛の次驛に翁島あり。

●●●十六橋 有名なる十六橋は翁島より南方山間の小徑を辿り、西久保、蟹等を経て達すべし。この附近、風光明媚にして、宛然一幅の繪畫を展べたるが如し。

翁島より大寺、廣田等の諸驛を經、直ちに會津盆地に入り、その中央に若松市の市街を認む。廣田は舊六丁目と稱し、停車場より北十町に入葉寺あり。

●●●若松市 北會津郡の西北部に位す。東に瀧澤峠を負ひ、西南湯川の流を繞らし、磐梯山巍々として遠く東北に聳え、西北は廣潤の平野に連り、地味極て豊沃、幾多の村邑は市の附近に散在せり。地形盆地をなして四周山岳を繞らすを以て自ら別乾坤をなして、古來要害の區と稱せられき。蘆名氏初めて館を此處に築き、黒川城と呼ばたりしが、後蒲生氏の領となり、改めて若松城と稱せしもの、爾來上杉、加藤の數氏交々此地に據て雄を東北の野に振ひ、寛永年間保科氏封を此の地に受け、會津廿餘萬石を領

して、久しく諸候の間に重きを爲したりしが、明治戊辰の際、幕軍に興し、王師の攻むる所となり、市街兵燹にかゝりたるを以て、今に猶ほ舊觀に復し難しと稱せらる。現時、戸數五千二百餘、人口三萬二千四百餘、北會津郡役所以下の官衙あり。停車場は市の北端町北村に置き、南方直ちに大町に通せり。市中、最も繁華なるは大町にして、大賈巨商櫛比し、また若松市役所をこの町に置けり。大町を中心としてその右方を一船に上町と稱し、左方を下町と稱す。而して幾多の街衢の大町と相交する所は十字街を爲し、車馬の往來頗る頻繁なり。大町の南を榮町と言ひ、郡役所、裁判所以下の諸官衙、諸會社等多く此處にあり。大町を左に折れ坂下街道あり。七日町は此に沿うを以てまた市中屈指の所たり。また西南に融通寺通あり。此より續ひて川原町、材木町等あり。市の中心を離ると雖も、高田、本郷に至る街道に沿うを以て亦繁華の地たることを失はず。元來、會津地方は四周山岳を以て圍まれ、交通不便なるを憾とせしが、近世岩越鐵道の開通せるによりてこの缺點を償ひ、ことに去る三十四年會津電

力株式會社の創設せられてより、電燈燦然として市中を照らし、爲めに幾段の盛況を添ふるものあり。而して當地方は地味肥沃ならざるにあらざるも、盆地の間にありて地域限りあれば、市民は主として製造業を以て立たんことを期し、今や陸羽に於ける主要なる工業地となれり。物産には所謂會津漆器をはじめとして、人參、清酒、線織物、木工品、金屬品、蠟燭、油類等また世に名あり。人參は多く清國に輸出し、清酒の製石高は一ヶ所一萬千餘石に上るといふ。その他、市の重なる建物として、縣立中學校は舊城前の一の丁にあり。縣立工業學校は字榮町にありて、明治三十七年の設立とす。また、馬場口に市立圖書館あり。鐵道、郡山へ七十九哩とす。

所謂會津塗は若松市を主産地とし、猶ほその附近に多少本業者の散在せるを見る。而して、その起原は天正の頃南部塗に摸倣したるに濫觴し、元禄時代以後、頗るその面目を革めたるが如し。而して地の漆工は維新前より既に分業の法を行ひ、丸物工、板物工、蒔繪工、總輪工、塗下地工、中通工の六に分つ。安政五年、逸早くも横濱に輸出を試み、産額次第に増加せしも、維新の大打撃後殆ど荒廢に歸し、一時は如何とすべからざるの窮境に陥りしを、明治二年所有者相謀りて資金貸下を民政局に請願し、以て漸く頹勢を挽回したり

十年に至りて、産額一年五十萬圓を超えしも、十二年後に至りその粗製濫造の爲めに全く海外の信用を墜し、輸出額頗に減退せり。その後その挽回策として、若松漆器組合なるもの起り、東京より日本漆工會員を聘して、實地に就きての教示を請ひ、又近年徒弟學校を設置して子弟を教育する等、専ら改善進歩の道を採れり。現今、一箇年の産額四十五萬圓以上上るといふ。

●若松城址 一に鶴ヶ城と稱す。市の南端にありて湯川に臨めり。今に猶ほ殘壘を存し、旅客をしてうたゝ往時の壯觀を偲ばしむるものあり。城はもと至徳元年、芦名直盛の所築にして、別名を黒川城といふ。蘆名氏亡びて伊達氏に屬し、次で蒲生氏郷封を此地に受け、大に増築をなして始めて若松城と稱す。後、上杉景勝入り、また加藤嘉明入る。徳川氏に至て、正保元年保科正之山形より移る。その位置東北、北陸の中央にありて、頗る要衝の地なり。明治元年、松平容保城中にありて官軍に抗す。官軍兵を分て諸道より進み城に薄る。容保遂に城を輸して、罪に伏す。是に於て民政取締所を置き、明年若松藩を置き、酒井忠寶を封す。四年藩を廢して若松縣を置き、更に之を福島縣に併せり。奥平謙輔「深樹梟鳴夜欲闌、荒城無所不凋殘、繁霜皎月天如水、

原野寥々白骨寒」

一書に曰徳川慶喜大政を奉還し、王政爰に復古し、萬機聖斷を仰ぐに至りしも、薩長二藩京に入り、専ら政權を執れるを以て、舊藩の諸藩之を喜ばず、遂に伏見鳥羽の役となり、征東の令出るに至る、然れども猶徳川の舊臣各地に出没し、上野に彰義隊の亂あり、東北亦頗る平かならず。時に會津の松平容保、もとより薩長と宜からず、慶喜と俱に大阪を脱するに及び、直に其封邑に歸りて、附近を掠取し、勢威大に擧れり。仙臺米澤南部二本松等の諸藩、亦之に雷同して、薩長を征せんとす。朝廷乃ち東海東山北陸の征東軍に命じて、奥羽を征討せしむ、官軍激戦數次、遂に白川棚倉岩城二本松三春等の城を陥れ、遂に會津若松城に迫る。官軍來り會する者多く、勢威大に振ふ。既にして明治元年八月廿二日、白河口の官軍は已に若松城に達し、廿三日悉く城下を集る。是より先き、東軍速敗の報若松城下に達するや、其動搖鼎の沸くが如く、松平容保は其弟桑名侯松平定敬と共に、瀧澤嶺より來る官軍を防がんとして、却て破れ、城中に遁れ歸り、會津の運命もはや定りりぬとて、定敬は米澤に援兵を求めんとして赴き、容保遂に籠城の計をなす、かくて官軍の一隊は、追手及び其右側より城を薄りしか、東軍能く戦ひ善く防ぐ。土將笠原謙吉、軍監牧野群島之に死す。諸軍各口を固め曉を徹して戦ふ、砲撃日夜間斷あることなし。官軍漸くにして外郭を奪ひ勢振ふと雖、兵員未足らざれば、猪苗代にありし薩士の兵をして來り會せしむ。廿四日官軍火を放て、城外の市街を焼き、更に越後道米澤道、融通寺口、桂林寺口等に堡壘を築く。廿五日東軍曉霧に乗じて、長州及大垣の兵の守れる越後道、城門、融通寺口三處の壘を襲ふ、官軍力戦遂に之を撃退す。此日勢至堂口の官軍至る。肥前の兵亦至りて、桂

林寺口より大久保山に至るまでを守る。廿六日官軍天寧寺山を奪ひ、壘を築きて巨砲を備ふ。廿九日會將佐川官兵衛、銃手及槍手千餘人を率ゐて、長洲大垣備前諸兵の營を襲ふ。長洲大垣の兵支ふ能はず、土軍馳せ來て、漸く之を卻く。九月に入り、越後口、日光口、白河口の官軍相聯絡をなしたるも、猶一致の運動をなす能はず。殊に越後口の軍は尙鹽川及高田の東軍と戦はざるを得ざるを以て、若松城攻撃は、重に白河口、日光口の軍に任せたり。敵又官軍の精銳越後口にあるを知り、更に恐るゝ所なく、唯西面を防ぎて攻撃の期を長うし、嚴冬積雪官軍の自ら苦むに至り、旁ら西境に於て黨餘の或は再び起て、官軍の背を衝ん事を豫期せる也。時に官軍は越後口の進路漸く開け、始めて白河口の官軍と相通するを得、又日光口の官軍も五日に進みて飯寺村に來り、遂に白河口の官軍と其聯絡を通ずるに至たり。時に若松城の形勢如何を顧みるに、官軍の之を圍む者二萬人、大砲百餘門、城兵は僅に三千人にして大砲五十門に過ぎず。初め松平容保其兵隊を組織するや、軍神四將に象り、總兵を分て四と爲し、朱雀玄武青龍白虎の四隊となす。朱雀最も強悍青龍之に次ぐ。老者を玄武とし、幼者を白虎とす。而して官軍の城下に達したる時は、城内の精銳なる者は、多く出で、四境にあり。其城内に在る者は、老幼若しくは吏胥に過ぎず。然れども各奮て軍に當らんとす。其兵の衆寡、其器の利鈍、既に明なるにもかゝらず、男女老幼擧て之に當らんとす、其勇悍驚くに堪えたり。依て起る戦の如何に激烈慘憺たりしや、以て既に窺ふを得べきなり。時に當て、東南白河口の軍の攻撃場已に定まりたるも、未だ攻撃を開かず。城兵は常に糧食を日光口より輸ぶ。然るに九月四日官軍已に城下に迫りしより、糧運の途全く塞るに至れり。是に於てか五日佐川官兵衛、精兵を率ゐて西門より出で、日光口の官

軍を襲ふ。此日日光口の官軍は關山を發して、城下飯寺村に至る。忽ち敵の出擊に遇ひ、共に大に苦戦す。六日官軍糧運の路開きしを以て、更に進て柳原、河原町、深川村の東軍を攻む。東軍支ふ能はずして退く。八日味爽、城兵飯寺村の官軍を襲ふ。其勢急雨颶風の如く得て禦ぐべきなし。官軍前軍大に敗れ後軍漸く之を支ふ。此時後越口官軍に對する東軍は、五日の敗に由て、其中央を遮斷せらるるも、大鳥圭介は猶鹽川に在り。佐川官兵衛亦高田に屯して、其勢甚盛なり。九日薄夜火大垣の營に起る、西南の烈風忽ち至り、焔々として諸營を焼き、猛火倉庫に及び彈藥一時に破裂し、百雷の一時に至る如く、山河爲に動く。此日津川口の官軍寺内山の攻撃部署を定む。十日味爽、官軍諸路の兵齊しく進み、寺内山に至りしに敵を見ず。更に慶徳村に至りて賊に遇ふ。乃ち之を退け更に進て暮取嶺に至りて大に戦ひ、東軍攻走す。官軍追撃して小荒井村に至る。十一日木曾口の官軍、慶徳村より分進し山崎、小荒井、松代、鹽川、熊倉等の地に向ふ。熊倉に向ひたる官軍松代の兵は小田付村に至りて、大に敵の爲に惱さる。鹽川口に向ひたる官軍之を聞て走り會し激闘苦戦遂に東軍を退く。鹽川の東軍亦從て衰へ、大鳥圭介脱して米澤に至り、仙臺より函館に走る。木曾口方面はかくて戦止みたるも、高田の官軍益猖獗なり、乃ち鹽川口の官軍十二日より陸續高田に向ふ。時に官軍漸く所々の兵來會たりければ、遂に四面攻圍の策を講ず。愈々十四日を以て始めんとし、南面天寧寺山よりは烈しく砲撃を行ひ、其間に乘じて城中に突入する勉め、東南面は白河口官軍の攻撃場にして、西北面は日光口官軍の攻撃場なり、其他各藩の兵諸口を守る。十四日午前八時、諸口の官軍齊しく砲攻を始む。天寧寺山及荒神社の砲臺より十餘門の砲を以て、城の本郭を激撃す。敵は諏訪社側に壘を築き、長州兵の壘に

對抗す。長州彦根備前の兵は桂林寺口及び融通寺口の壘より巨砲を連發し、又日光口の官軍は河原口より突入す。其他人吉、藝州太田原宇都宮等の兵益進入し、戰爭益激烈となる。官軍連環砲撃を加ふも、未だ容易に抜くを得ず。長州大垣の兵終に突進して、東軍を敗り、外郭大半官軍の右となる。官軍依て更に諏訪社の側に砲臺を築きて巨砲を備ふ。十五日四面攻撃前日の如し。既に郭内に逼るを以て、戦益劇甚、然れども東軍城壘に嬰て死戦し、官軍進む事能はず。城兵の苦戦最も見るべきものなり。既にして佐川官兵衛、高田より大舉して飯寺村に進入し、官軍の背後を襲ふ。同時に松平容保城中より突出す、中津黒羽の兵腹背に敵を受け、大に潰亂す。是に於て東軍の糧道初めて開く。高田村は越後口及日光口に通する要路に當り、周圍に砲臺を築て、防備頗る嚴なり。十七日高田攻撃の部署を定め、十八日官軌逆瀬村に集合し、雀林赤留村等より進む、東軍遂に敵する能はず、守を捨て、去り、高田遂に陥り、東軍の勢大に衰へ、城中も從て外通の路を遮らる。此間十六日以降も引續きて、若松城の攻撃は猶前日の如し。苦闘激戦刀折れ砲破れ、内には糧食遂に盡き、外には應援をなす者なし。攻圍殆ど三十日砲撃晝夜絶えず、城内死屍枕籍し、血流れて杵を漂はす。容保遂に勢の支ふべからざるを知り、主將を會して降を議す。諸將嗚咽して之に従ふ。十九日容保使を米澤に遣はし其幣に頼りて、降を乞はしむ。米將齋藤主計士軍の本營に至り、板垣退助に面會して降服の意を陳す。板垣乃ち降旗の出づるを俟て決せんと、廿二日一片の降旗追手門前に立つ。官軍乃ち諸口の兵に命じて砲撃を停めしむ。諸藩の兵共に錦旗を擁して、整々肅々たり。容保父子出で、從客降を乞ふ。乃ち之を瀧澤村妙國寺に送る。一門男女凡そ三十人亦出で、同寺に移る。創者は青木村、婦人老幼は鹽川に、兵士

は米軍之を護して猪苗代に移る。是に於て城池兵仗等悉く官軍に入る。時に明治元年九月廿四日也。後佐川官兵衛猶城外に在て、官軍に抗せしも、容保の書に接して遂に降り、

後、東北遂に平定に歸す。此戦殆ど三十日間城兵苦闘奮戦、晝夜砲撃絶ゆる事なく、糧食欠乏し彈藥悉く盡き、然も能く強果驕悍之を支へ得たるものにて、近世戦の最も慘憺を極めしものといふ。若し夫れ糧途り彈多からしめば、落城の日果して何の時かを期すべからざりしならむ。(近世戦史、戊辰戦史、維新史料)

●●●●● 歩兵第六十五聯隊 若松城址の東方にあり。舊城三の丸の址なりといふ。明治四十

年の設置なり。

●●●●● 蒲生氏郷墓 若松市字榮町の興徳寺にあり。寺は弘安年間覺圓禪師の開基にして、

明徳中大圭禪師これを中興す。曾て、應永二十三年天下十刹の一に列せしめられしこ

とあり。また、天正年間豊臣秀吉の行館に充てられしこともありといふ。戊辰の役、

兵燹にかゝりて今昔日の壯觀なし。寺に蒲生氏郷の墓碑あり。五輪塔にして、高さ九

尺、地水風空の五字を彫れり。氏郷の分骨を納むるところといふ。

●●●●● 融通寺 若松市字大町にあり、聖徳元年の創建、淨土宗にして、寶什に後陽成天皇

の宸翰、勅額等あり。また戊辰役官軍戦死者の墓あり。

蠶養國神社 若松市宇蠶養町にありて、停車場より五町を隔つ。弘仁の創建にして式内に列し、今縣社に班せり。境内に松杉多し。毎歳八月一日を以て大祭を執行す。

その他、市中に黒川諏波神社、實成寺、當麻寺、實相寺、高巖寺等の神社佛閣多し。

若松市の東南部には有名な白虎隊の墓、東山温泉等あり。此所に其等を記せん。

白虎隊の墓 若松市の東二十町、飯盛山にあり。戊辰の役白虎隊の難に殉したる地にして、會津城下を一瞬に收むべし。續國史略記して曰「八月二十三日、味爽、官軍進戰大野原強清水、克之、會人卻守瀧澤村、初會人編諸隊、爲四、曰朱雀最銳、曰青龍次之、而老者爲玄武、幼者爲白虎、白虎年自十五至十七、是日、白虎隊將日向某、率隊戰瀧澤、不利、或死或走、留者十六人、苦戰知力不支、登飯盛山、望見城外火起、以爲城已陷、乃向城再拜曰、臣事畢矣、各刺而死、一人不殘、爲村民所救、後詳說其事云」と。今、山腰に石碑あり。櫻樹を栽る、瑞籬を繞らし、左右の石柱に「精忠

貫日月」「勁節凌風霜」の十字を鏤刻せり。碑文を一讀するもの誰か往時を追想して、感慨無量たらざるべき。

榮螺堂 飯盛山腰、白虎隊墳墓の下にあり。堂は寛政八年の造立にして、六稜三層高き八間半、下部差渡し三間半にして、漸々盤旋して頂に至り、又漸々に降りて下にかへる、榮螺の殻中に似たるを以て、その名を命じ、昇降その階梯を異にす。また堂の西側に宇賀神堂あり、白虎隊十九士の木像を安ず。

石部櫻 瀧澤村の北三町にあり。傳へて五百有餘年の古樹と稱し、花時來觀の男女多し。高さ及び根の周圍各々三丈餘といふ。寛文中の風土紀にて已に其名見えたり。

東山温泉 若松停車場の東方一里十五町にあり。停車場より自由に人車を通ず。その地、東山村大字湯本に管し、會津地方著名の温泉場なり、東南北の三面は峯巒を以てこれを繞らし、西方の一面遙かに開けて若松市に對す。温泉場は奇石怪岩に富める湯川の岸を挟みて、旅店はいづれも高樓大廈、紅欄干の畔、をり／＼絃歌の起るを聞

湧泉の量は甚だ多く、泉質は鹽類泉にして、無色透明、玲瓏として玉の如し。旗野廉堂「荒城樹古擁仙裳、樓閣依然紫翠間、兒女猶關興廢恨、紅絃唱出小東山」俗調「出羽で庄内、最上で上の山、此所は會津の東山。」

東山の諸勝 湯川に沿ひて幾多の瀑布奇巖あり。その重なるものを雨降瀧、傘巖、伏見瀧、金壺瀧、屏風巖等とす。雨降瀧は温泉より川を上ること八町にあり。數多の大石壘起し、飛泉數級となりてこれに瀉ぐ。廣さ凡そ六間ばかり。右に相向ひて傘巖屹立す。伏見瀧は川の下流にして、會津電燈會社發電所と相對す。雨降瀧に比して更に大なり。その他、湯上羽黒神社、淨光寺、天寧寺等皆一訪すべし。

若松市より白河町、棚倉町を経て常陸に入る街道を茨城街道といふ。その途中、安積郡の三代村は模範村として甚だ有名なり。山瀉驛より里程約四里を隔つ。

岩越鐵道は若松市を出で、更に北を指し、鹽川驛を経て喜多方に至る。

喜多方町 もと北方に作る。會津盆地の名邑にして、若松市の北四里とす。今、耶

麻郡役所を置き、人口八千二百餘を有す。器械製絲業、漆器等甚だ盛なり。附近、土地平衍、俗に北方八萬石の稱あり。南方坂下町を距ること三里二十町とす。

願成寺 喜多方町の北、上三宮村にあり。淨土宗寺にして、叶山三寶院願成寺と稱し、古昔は奥羽二州の得度受戒者は皆な此に集りたるものなり。創建は後堀川院の御宇嘉祿三年にして、後寛文年間行興上人當寺を建立す。

加納鑛山 喜多方停車場の北二里にあり。鑛脈頗る豊富といふ。

熱鹽温泉 喜多方町の北方二里にあり。鹽類泉にして、熱百四十七度を有す。昔時この地に鹽井ありしといへり。また村内に日中温泉あり。大鹽村に大鹽温泉あり。

示現寺 熱鹽村にあり。往古、源翁和尚の開基と傳ふ。又、村内に瓜生刀自の生地あり。

檜原湖 喜多方町の東北六里にあり。明治二十一年磐梯山破裂の際、その北麓に生ぜし小湖中の最も大なるものなり。而して地形上、これを分ちて檜原湖域及び雄子澤

湖域となす。檜原湖域は南北に狭長にして、東西約一料餘、南北九料に及び、その水面は高距七百八十七米を保つ。その北端にありては西方より溪流の注ぐありて、湖水はその方に彎曲し、東西の幅二料に達し、最深點は中央部より少しく北方に偏在し約二十五米と鍾測せり。湖岸は概して第三紀層の山脈より成り、湖面清瑩鏡の如く、綠蔭これに映じて風景自ら幽邃を極む。往時檜原川の溪谷に繁茂せし森林は今や全く湖底に没し、湖岸水淺きところに於てはこの頂水面上に出で、枝枯れ葉落ちたる往時の樹木叢生するの狀頗る蕭條の觀を呈す。湖の南方に於ては磐梯山破裂の際、岩塊の堆積によりて生せる圓錐狀の小丘水中に散點碁布し、或は楊柳緩かに垂れて激漚たる鏡面を廢し、蘆荻靜かに瀟洒たる淺灘をなし、また一種の風致を具ふ。湖の西岸はやゝ平地を開きて二三の沼澤を存し、その東南岸に近くソハラ湖あり。雄子澤湖域は猫魔火山の火口湖(雄園沼)より北に東に流走する雄子澤の涵養するものにして、檜原湖域と直角をなし、且つその東北部に於て檜原湖域と連絡す。蓋す、要するに、檜原湖

は二個の堰塞湖の連絡して一となりたるものにして、磐梯山爆發の際その溢流せる泥土は、檜原川及び雄子澤川を塞ぎて各々その上流に小湖を湛え、その後水量次第に増加してその間の界を潰決し、以て一大湖を現出したるものなり。

飯豊山 三國山といふ。耶麻郡と越後國、羽前國に跨れり。標高六千二百四尺、一の木村大字一の戸より里程二里二十八町にして頂上に達すべし。山頂、飯豊神社あり、現今縣社に列す。新篇會津風土記に曰く「飯豊山、上に五社權現の祠あり。年々八月に至れば多く參詣あり。西に越後、佐渡、北に出羽の山海を望み、天氣晴朗なれば、駿河の富士も遙に西南に見えて、眼界甚だ廣し。封内山多けれども、誠に無雙の高山なり。されば四時雪有て寒氣甚しく、七八月の間、登山するもの櫻花を見、杜鵑を聞き黄葉を踏み、四時の風物、一時の佳觀に入る。里俗四季の山と稱するもさることなきや、満山大抵他木なく、五葉松のみ奇石怪岩の下に蟠り、萬古の色を改めず、西端の絶頂を大日嶽と云、大日貴命を祭れる石窟あり、巉岩にして躋攀するものまれなり。

又六七月の間、府城の西北に屹立し、積雪嘖々として怒るかごとく、人の肌骨をして寒からしむ、中にも朝暮殊に勝れ、日暉映發し、極て明媚なり。多くは朝雲に隠れ、其眞面目を見ることまれなり。此山に「ミヤマセウビン」と稱する鳥あり。頭背腹脇共に赤く、嘴と足と最赤し、大さ鳩のごとく、其聲大豆を轉ずるに似たりとて、里俗菽轉とも名く。此鳥鳴ときは必兩ふる雄て、雨乞鳥とも云、又黄蓮を産す、熊、羚羊の類多し。」

再び若松市に歸れば、その南方一里餘に本郷町あり。西方三里に高田町あり。此所にその二町附近の名勝を記せん。

川南村 若松市より一里餘を隔て、大沼郡の本郷町に接す。同町と相並んで所謂本郷焼の製産地とす。

本郷町 大沼町の南隅にあり。即ち鶴沼川の西邊にして、南方山を負ふ。人口二千七百餘、素より一小邑に過ぎざれども、古來陶器の製産甚だ盛にして、本郷焼の名世

に開ゆ。

本郷焼、一に會津焼といふ。天保二年、藩主保科正之が美濃人水野源左工門に命じて窯を開かしめしに濫勝す。源左工門歿後、その弟長兵衛の長濱にあるを招き、俸祿を與へ以て製陶に従事せしめしより、本郷焼の名漸く世に聞え、單に一地方の産物たるに止まらざるに止まれり。而して磁器は安永六年を以て磁器工業を江戸より招き、本郷村の人佐藤伊兵衛等をして、就いてこれを學ばしめたるも、初めは苦慮多くして完全なる器を造る能はざりき。寛政九年、伊兵衛藩命を奉じて關西、九州地方に至り、所々の陶窯を巡視して、同一年歸歸、始めて新窯を開き漸く堅牢なる磁器を製出せり。寛文に及びて、瀬戸宇右衛門兄弟隣村川南村に於て更に新たに陶窯を起し、藩主の保護に由りて益々盛大に赴き、維新前已にその名天下に揚れり。明治に至り、専ら急須、土瓶の類を製したるか爲め、その産額は著しく増加せり。而してその製出品は重に内地向實用向なれど、價額の低廉なると、而もその價額の低廉なるに比して甚だ精良なるとを以て、需用甚だ全國に多く、去る三十五年の如き、現に五十萬の多額を産出せりといふ。また、輸出品として紫地を横濱に送り同地にて繪付を爲すもの多しといへり。

高田町 若松市の西方三里にあり。大沼郡の治所にして、宮川の上流に泄む。西南山を帶ぶるも、猶ほ平行にして交通至便なり。町に會津第一の名祠伊佐美神社あり。

伊佐須美神社 今、國幣中社に班す。祭神は伊弉諾尊、伊弉册尊にして、崇神天皇

十年の勸請、欽明天皇十三年明神嶽より今の地に遷座せり。現在社殿の数は神殿、幣殿、拜殿、神饌所、神樂殿、神庫、社務所、御旅所本殿、同幣殿、同拜殿等にして社殿の周圍には叢林鬱蒼し、天日を見ざるが如し。南に郊原あり高天原といふ、御旅所此に存す。東に流水あり宮川といふ。西は高田町の民家簷を連ね、遙に一里餘を隔て、明神嶽高く雲際に聳ゆ、山頂に往古鎮座の礎石を存す。北は田圃にして當社の正作田此中にあり。是れ豊太閤寄付の神田なりといふ。例祭は九月十五日なり。

○越後街道と沼田街道 若松市より西方坂下町、野澤町を経て、鳥井峠を越えて、越後國に出づる道路を越後街道といひ、坂下の西より南折して遠く只見川の上流に遡り、以て上野國沼田に通ずる道路を沼田街道といふ。有名なる柳津虚空藏及び沼澤沼の勝は共にこの沼田街道中にあり。

會津中央藥師堂 若松市の西南勝常村にあり。堂は桁行五間、梁五間にして、足利時代の建築といふ。近年特別保護法に與れり。また、弘法大師作藥師佛は、その丈七

尺、去る三十六年國寶に算入せられたり。

坂下町 若松市の西北三里七町、喜多方町の西南三里にあり。人口凡を五千、東に宮川を帶び、西方高寺、東松、野澤の諸村邑を控へて、人烟稠密なり河沼郡は今この地に郡衙を置く。

心清水八幡宮 坂下町の西北約一里塔寺村にあり。天喜五年源賴義父子こたを創建すと傳へ、爾後義家また之れに修補を加へ崇敬淺からず、後伊達氏の兵燹に罹りて社殿頽廢に歸したるを保科正之これを修營す。傍らに觀音堂あり。相傳ふ。大同三年阪上田村麿僧空海の勸めに由り此地方に惠隆寺を草創す。此觀音堂は恐らく同寺の名殘なるべく、傳空海作二丈八尺の觀世音像を安置せり。

沼田街道は坂下町の西稍南坂本村より越後街道に岐る。

野澤町 坂下町の西約五里にして、山間の一驛市なり。越後街道はこの地より車峠を越え、約三里半にして國界鳥井峠に至る。町に如法寺あり。

年初て巖上に本堂を建立し、佛思階一百餘級を跣登して菩薩を禮拜し、同年十月寺領二百石の寄進狀を興へらる。徳川六代將軍は最も當寺菩薩を敬信し、金襴の幢幡打敷等を寄附せりといふ。是より先き、當時の仕職初て二代將軍に謁見し、時服と白銀を受領す。後來は五ヶ年毎に謁見するを例とす。舊領主松平家に於ては、維新の際に至るまで先規に従ひ、二百石及山林等を寄進し厚く保護せしが、宗旨に於ける轉變は一ならず、初め法相宗を臨濟宗とし、後ち若松興徳寺の末となり、又再び臨濟宗に復し妙心寺派となりしは寛永四年なり。伽藍は屢水火震の災に依り廢失することありしも、寺領及び領主の保護により常に再建するを得たり。

安井息軒の紀文に曰「予嘗聞柳津之勝、必欲一往、問之、只六里、驟然而出、行官道四里、至栴宮而左折、山川皆凡、秋陽如燬、心頗悔之、且行且止、既而還一阜、地勢隨變、巨流西來、曰忠見川、怪巖捲底而起、雙於兩岸、互相疊架、如舟如樓、皆銀錫色、爲劈斧皴、巍閣構於上、輪奐入雲、卽柳津也、閣下曰魚潭、深碧無底、小溪東南注之、僧房市店、夾溪而居、亦皆倚奇石、負怪松、無一凡形、信乎名不虛傳也、降磴道數十級、皆片石刻成、出吹雲關、渡橋沿小溪而北、臨魚潭、溪鮮方鋪淨、喁々待群、女兒鬪餅者、群來相呼、買

而投之、潑瀾爭食、須臾便盡、遂擇潭上最勝樓而宿焉、仰觀廟塔、直壓眉宇亦一怪也」。

不動瀧 中川村大字肖中にあり。東北方高田町を距ること六里十九町とす。飛瀑直下九十尺、幅六十四尺、四面峨々たる深山の中、雜林森々、晝尙は暗く素練其間に懸りて風景最も佳なり。山腹瀑に沿ひて道あり、田島街道と稱す。下流は一脈の清泉滾々として流下し、田時に灌漑す。若し此飛瀑に臨んで閑に山水を賞すれば、恰かも羽化登仙の思を爲さしむものあり。又不動瀧の近傍半里以内には、鑛泉の湧出する所六ヶ所に及ぶ。

沼澤沼 高田町の西方八里餘にして、沼田街道にあり。卽ち只見川の上游にして、小高森山の北麓とす。湖の東西十九町、南北十四町、周圍凡そ二里五町、小山これが四境を圍んで、鏡水その中に開け、積翠澄波の景尤もすぐれたり。また、湖の西南に八町及び玉梨の兩温泉あり。

本名村 沼澤沼の西方にして、高田町を距ること十三里餘とす。只見川に沿ひ、一

小村落に過ぎざるも、有名なる模範自治村なり。附近に温泉を湧出す。

沼田街道は本名より益々只見川の上流に沿ひて南行し、大瀧、伊北、朝日、八幡、富田、大宮、伊南、大川、檜枝岐等の各村落を經、遂に尾瀬峠を越えて上野國に出づ。途中、伊北村に製絲場南光社あり。

○下野街道沿道 若松市を出で、南方鶴沼川の上流に沿ひて下野國に入る道路を下野街道といふ。南會津郡の東邊を縦走するものにして、重なる村落に大戸（北會津郡）、長江、旭田、荒海等あり。而して田島町はこの街道中の名邑、旭田、荒海の間に入りて、南會津の郡衙を置く。街道は國界山王峠を越えてより二路に分岐して下野國に入る。重なる名勝に塔の嶽あり。

●大川橋 北會津郡大戸村にあり。岩石奔流の勝地とす。また、十五町を隔て、小谷及び蘆牧の兩温泉あり。同じく河岸好景の地とす。

●塔の嶽 南會津郡二川村大字白岩より旭田村大字澳田に通ずるところにあり。山水秀麗、奇石怪岩の美、蓋し南會津第一の名境なるべし。

●田島町 若松市の南方十一里強に當り、塔の嶽の勝より南に六里を隔つ。即ち郡治の所にして、人口四千四百を有し、この街道中の名邑なり。町の西北に荒海川あり、荒海山より發し、大川となりて北會津郡に流注す。下野街道はこれより二里半糸澤に至り、更に二里半にして山王峠に至る。道側に羽鹽瀧あり。

陸前國

一三四

陸前國は本地方の中央東部に位し、南は磐城國に接し、西は羽前國に境し、北は陸中國及羽後國に連り、東方は全く太平洋に瀕す。其形西南より東北に長く、東西凡そ十五里、南北凡そ二十五里、面積五百六十方里を有し、一市十三郡より成る。一市は仙臺市にして、十三郡は柴田、名取、宮城、黒川、志田、加美、遠田、桃生、登米、栗原、玉造、本吉、氣仙是なり。大部は、宮城縣これを管し、氣仙一郡のみ岩手縣の管轄に屬す。國の西部には脊梁山脈蜿蜒として南より北に連互し、先づ西南境に藏王火山あり。その北方に仙人山(一一五九米)あり。其南に笹谷峠(九五八米)の一路あり。其北に野尻峠あり。共に陸羽連絡の主要路を成せり。其北に大東山(一四九二米)面白山(一二九二米)等相接して聳起し、其北關山峠(六二九米)を経て、陸羽の界に聳ゆる船形火山に接す。船形山の東方船峠を経て根白石嶽(一三七〇米)あり。この南北及び仙臺の

南方には第三紀層の丘陵東西に連りて、二三の隆起帯を作り、名取川、廣瀬川、七北田川等皆なこの狹隘なる谷を東方に流走せり。脊梁山脈は船形山以北稍低く、荒神山吹越山(九三二米)大門神山(七三五米)大豆山、禿山(一三〇四米)を起し、遂に須金嶽栗駒山等に連互す。栗駒山は陸中、陸前、羽後の三國に跨り、或は駒ヶ岳と稱し、或は酢川岳といふ。二重式層狀火山にして、最高所千六百五十七米を有し、國中屈指の高山たり。この南方に荒雄岳火山あり。荒雄川の一水其東麓に發し、北西麓を繞りて更に南嶽に出で、殆ど山の四周を環擁して、遂に東南に流走せるは、地理學上著しき現象として著名なり。山の西麓に、有名なる鬼首の間歇泉あり。國の東邊、太平洋に瀕せる地方は、所謂北上山脈の南部を成し、山勢また脊梁山脈の如く峻峻ならず、丘陵起伏せる高原性に似たり。金山(一六七米)上品山(五二二米)猷上山は北上川畔に連互し、牧山は(三二〇米)黒森山(四〇〇米)石投山(四五三米)はこれと並行して連る。この南方に雄鹿半島の軸に添へる大六天山(四六四米)袴ヶ嶽(三五六米)人石山(三一

八米)等あり。追波川以北は、本吉郡の西境を走り、群峯相連り、遂に東北隅、五葉山(一三九八米)大窪山(千一五九米)に至りて稍高峻なり。以上春梁山脈と北上山脈との間には、廣漠たる一大平原を開き、南方磐城國互理平原と連続する地方に、阿武隈、名取の二川流れ、其西北丘陵に接して、國中第一の都邑仙臺市あり。此平野西方は隆起して丘陵地を成し、東方は次第に低夷して太平洋に盡く。北方にある部分は成瀬川、北上川及び其支流の灌漑なる處にして、主として第四紀層より成り、夥多の湖沼を有し、概して、卑濕の地多し。涌谷、白川、岩出山等の諸邑此間に點在す。國の海岸には島嶼多く、松島灣中に日本三景の一たる松島あり。牡鹿半島の沿岸に田代島、網地島、金華山、江之島列島等あり。北上川は國の東部平原を縦流する大河にして、河口に國中屈指の名邑たる石の巻町あり。舟楫の便あり。

沿革 大古は磐城の條に記せり。天正の末南部信直斯波氏の地を併せ伊達晴宗の孫政宗、二本松、二階堂二氏を平げ蘆名氏を滅し石川、大内二氏を降し其他を有して會

津郡黒川に徙る。同十八年豊臣秀吉東征し政宗の會津仙道の地を收めて蒲生氏郷に賜ふ。氏郷黒川若松と改稱すに治して陸奥及び出羽の守護たらしめ結城、田村、大崎、葛西の地を没す。葛西晴信は清重の後なり。今の陸前牡鹿、登米、桃生、本吉の四郡及び陸中の氣仙、磐井、膽澤、江刺の四郡を領せり。岩城、相馬二氏の地舊に仍り南部、津輕の封を定め、葛西、大崎二氏の故地を木村秀俊に賜ひ關一政を白河に封す。又伊達政宗の米澤及び三郡伊達、信夫、刈田を削り氏郷に加封し秀俊の地を奪ひて政宗に賜ふ、政宗終に治を仙臺に定む。此時政宗の領する所二十一郡、蒲生氏の領する所十四郡、後ち蒲生氏を宇都宮に徙し上杉景勝を封す。關ヶ原役後南部、津輕、相馬三氏封疆故の如く白石を伊達氏に加封し岩城貞隆の地を收め景勝の封を削いて米澤に徙し再び蒲生氏を若松に封す。爾來各藩多少の變動ありしと雖も伊達氏の封に於て敢て異動あるなし。明治元年王師東征し若松藩罪に伏し伊達、南部、丹羽、阿部、田村諸氏は其黨とし削封各々差あり。此年陸奥を分割して五國となし陸前は其一國となれり。而して仙臺藩は仙臺

及び名取、宮城、黒川、加美、玉造の五郡と志田郡の一部を管治し、盛岡藩は磐城の伊具、互理、刈田の三郡と此國の柴田郡を併管し、更に桃生郡、牡鹿郡、本吉郡の地は高崎藩取締地となり、登米郡及び志田郡の一部は土浦藩取締地となり、栗原郡は宇都宮藩取締地となれり。明治二年六月白石藩を改めて縣とし十一月更に角田縣となり、高崎藩取締地は同二年七月桃生縣となり同八月石の卷縣と變ず。土浦藩取締地は同年八月登米縣となり明年九月石の卷縣之に合す。仙臺藩は同四年七月其一部を割いて一の關縣に隸せしめ他は同四年十一月に至りて角田縣及び登米縣の一部を合し同五年一月初て宮城縣と稱す。是より先き宇都宮舊取締地は明治二年八月膽澤縣となり同四年十一月仙臺縣の一部及び登米縣の一部を割き合して一ノ關縣に隸す。同十二月水澤縣と改め同八年十一月復た磐井縣と改稱す。同九年四月宮城縣の一部を割いて磐前縣に屬せしめ、而して宮城縣は更に磐井縣を合し、同年八月氣仙郡を除くの外は悉く宮城縣に合轄するに及べり。

交通 圖の交通主要線は、國中平原を南北に縦貫する官設東北線にして、磐城國白石より來り、大河原、槻の木等白石川の流域を西走して、岩沼町に達し、官設常磐線を合せ、全く平原に出で、増田、長町を経て仙臺市に達し、岩切驛より鹽釜支線を右に岐ち、利府、松島等丘陵の間を過ぎ、鹿島臺に至りて全く平野の北部に出で、小牛田、瀬峰、新田、石越等の卑濕地を経て陸中に入る。岩沼驛は南部の交通を司る爲め、仙臺驛は地方中心をなせる爲めを以て大驛の趣をなす。吉岡地方に赴くものは仙臺にて下車すべく、石の卷地方に志すものは鹽釜支線に由りて海路これに赴くべく、陸行には小牛田驛より至るを便とす。小牛田驛は此他西部諸道に至る衝に當るを以て旅客の乗降頻繁なり。鬼首地方に至るも、亦此處よりすべし。其他北上川を上下する汽船あり。石の卷より登米、米谷地方に至る唯一の交通機關たり。道路は陸羽を連絡する線數條あり。南より數へて、笹谷越、野尻越、關山越、銀山越、鳴子越、栗駒越等なれど、奥州東西線の完成せる今日は、これに由るもの甚だ稀なり。

●産業 市場に言ふ所の奥州米中、本國は最も質の良好なるものを産す。主産地は平原地方にして、志田、遠田、登米、栗原地方に産するものは仙臺米と稱し、玉造地方より産するものは玉造米と稱し、共に市場に名聲を有せり。麥作また甚だ盛なり。食用農産物には大豆、馬鈴薯等あり。麻は登米郡に産し、葉藍は名取川流域に多し。中部以南地方には往々茶樹を栽培するものあり。蠶業は志田、遠田を主産地となす。牧馬は玉造郡殊に著名にして、鍛冶屋澤には軍馬補充支部あり。逸物を産するを以て世に聞ゆ。林業は玉造郡の野生杉殊に美なり。水産は所謂仙臺マダロの本場にして東海岸一帯殊に牡鹿半島附近より産する漁獲物は年々非常の巨額に達せり。鯉、鮪、鯛、鰯等にして、鮪漁殊に盛に、鯉業これに次ぐ。従つて鯉節の産額は多く、東海岸地方この製造に従事せざるもの稀なり。織物には仙臺平あり。仙臺味噌は地方に名あり。製作工業品には名取川の埋木細工、牡鹿の石細工等あり。

○官設東北線沿道 國中を南北に、横断せる線路にして、交通の主要路なり。大河原、槻木、岩沼(常磐線これより岐る)増田、長町、仙臺、岩切(鹽釜線これより岐る)利府、松島、鹿島臺、小牛田(古川町へ鐵道馬車あり。玉造郡地方に至るものは此處にて下車すべし。涌谷町、石巻町にも至るべし。)田尻、瀬峰、新田を経て陸中に入る。松島以北は卑湿地多く、沼多し。右の平野は北上川の流域なり。鬼首温泉には小牛田より古川町を経て至る。二十四里あり。馬車の便あり。松島は鹽釜より舟にて至るを順路とす。松島停車場より松島五太堂附近に二十町餘あり。

●大河原町 東北線中白石驛(磐城國)の次驛を置き、停車場は町と白石川を隔て、その東にあり。人口約四千五百、柴田郡役所以下の官衙あり。また、町の東方一里に船迫あり。吾妻鏡に文治五年八月島山重忠が西木戸國衡の首を頼朝の實檢に供して、和田義盛と其の功を争ひしとあるは即ちその地なりといふ。大河原町より仙臺市までは約九里十町を隔つ。

●大高山神社 大河原の西三十四町にして、金瀬村の斐神山下にあり。式内の古祠に

して東鑑にもその名見えたり。祭神は日本武尊、橘豊日尊と傳へ、社殿は元祿の再營といふ。縁起説等奥羽觀蹟聞老志に詳し。就て見るべし。

大河原町より北方村田町を経て川崎に通ずる街道あり。即ち仙臺市南より羽前國關澤に達する笹谷街道に連絡するものにして、同町より羽前への順路とす。また、川崎より南方宮、白石町(磐城國)等に通ずる街道あり。

●青根温泉 大河原停車場より七里十三町にして、柴田郡川崎村字前川にあり。また磐城の白石停車場よりすれば約六里餘にして、遠刈田温泉を去る一里十三町とす。道路平坦到る所馬車人力車ありて、頗る往來に便なり。泉源は藏王岳(一名不忘山)の半腹より湧出す。地は南北二方山を以て圍み、西は高嶽重疊一大山脈をなして山形縣に境し、藏王嶽は巍然として炎天尙ほ白雪を頂きて蒼空に聳え、東は太平洋に面して遙に松島金華山の勝景を水天髣髴の雲間に認む。眼下に大白嶺を瞰み、阿武隈川の清流は宛から白布の如く東海に注ぐ。温泉涌口は三ヶ所にしに浴室六宇あり。即ち大湯、瀧湯、上等浴室、上新湯、下新湯及び名號の湯とす。鑛泉は鹽類泉に屬し、無色透明

にして、少しく鹹味あり。中にも大湯には二個の樋を設け湯瀧となりて落り來り、且其浴場の廣きこと、其泉量の多きこと、他に類を見ざる所にして、殆んど西洋の遊泳浴場の如し。温度は攝氏五十五度を保ち、浴客養焚の用に供するを得、効能は慢性麻痺質斯、慢性痛病、諸癩衝、諸神經病、婦人生殖器病、萎黃病、腺病、皮膚病、創傷脚氣、創傷後の滲出物等に宜し。浴舎數戸、浴客の總數例年凡そ五萬以上に及ぶといふ。而して、開湯は遠く四百餘年の昔に係り、享保年間より寛永に至るまで凡そ八十年間に國守及夫人の駕を枉ぐることに十數回、故に別に殿閣を造營して青根御殿と稱し以て國守の旅館に充てしといふ。以てその盛なりしを推知すべし。また、この地より藏王嶽を越えて山形縣下の高湯温泉に出づるを得べし。

●藏王嶽 別に不忘山、刈田嶽等の稱あり。磐城國刈田郡と羽前國南村山郡に跨る。

標高六千三十四尺、登路教條あり。山嶽志に曰く「白石停車場より西北六里三十町、青根温泉より登る、或は大河原停車場より、遠刈田温泉を経て、青根に至り、それよ

り登るも亦可なり。青根より山頂まで、西三里の登道なり。こゝには後者の登山記を
 艸す。大河原停車場を下り、金ヶ瀬を離れ、宮より奥州街道と分れを右折し、松川を
 渡り、山間の寒驛永野に入り、遠刈田温泉を過ぐ。藏王嶽、青麻山等、圍繞の底に在
 りて、松川溪谷を擁し、寂寥をきはむ。是より岨道を経て、青根温泉に到るや、已に
 海面を抜くこと三千三百尺、是より直に急阪を攀つるや、二溪右より左に流る、南を
 清川といひ北を濁川といふ。即ち清川に沿ふ。溪きはまるところ、大瀧を見る、幅十
 餘間、直下百間、雪山を崩せるが如し、更に右徑の嶮を踏み、岨々温泉道（急阪を下り
 濁川の水系に入る）と分れ、竟に藏王嶽に登るや、矮樹絶えて眼界漸く闊く、青根の
 山、船岡山、白石川、或は阿武隈の大江まで、脈絡分明なり。已にして賽の河原に出
 づ、廣袤數里に亙り、大小の石片重疊狼藉す。是より爛砂焦石を踏み、一條の溪流（三
 途の川）を見、赭黒の岩塊を跳越して登る。山嶺藏王沼に出づ。周回一里、略ぼ圓形
 を成し、水色血の如く、摺鉢に充つ。その東面は五色山の斷崖之を遠ぐり、西北南の

三面は、噴火孔底の低地を隔て、馬の背、熊野嶽、刈田嶽に對す。この中熊野嶽最
 も尖聳して、山中の最高點をなす。藏王權現の一小祠あり。周圍に石を積むこと七八
 尺許、烈風を防ぐなり。この山磐城の西北境にあれども、陸前、羽前の三國に跨がり
 頗る雄大の風象あり。登路は（一）東方遠刈田より岨々温泉の南を過ぎて到るもの、即
 ち遠刈田温泉より、青野温泉に到らざる前、追分より左の支道を取りて、藏王山に向
 ひ（本道は青根）藏王川を渡りて、早川町場に到り、猶行きて不動瀧に達するや、幾何
 もなく路は二分す。一は八町にして岨々温泉に到る。他の一を取りて、藏王嶽に向ふ。
 二里にして賽の河原に達す。以下前文に同じ。（二）遠刈田、青根温泉を経て岨々の北
 方を通ずるもの（前に擧げたる説文は則ちこの途なり）。（三）西方山形街道より、高
 湯を経て來るもの（四）山形寶澤を過ぎて到るもの。（五）上の山より上野を經、俗に所
 謂「おすい」を過ぎて到るもの等あれども、東方よりするもの、最も登攀に便に、（三）
 の高湯を経て到るもの、如きは、高湯爆裂火口内を過ぐるを以て、岩塊磊々、凹凸亦

甚だしく、道路最も峻悪なりといふ。地學雜誌曰く「藏王火山はその活動全く息止せるにあらず。その大勢は熊野（一九六〇米）は北に、刈田は南に、五色は東に聳え、三山恰も鼎足をなし、西の一面は熊野、刈田の二峯に連る地徑にして、俗に馬脊と稱し、長丘の狀を成す。この環圍の四山は共に噴火口の外輪山にして、中央凹所に所謂御釜なる圓地あり、直徑三百三十間とす。爆裂の記事あるは寛永元年を始めとし、以前の説は得る能はず。古へは不忘山と稱し、佛氏の寺院を開基してより以降藏王山の名行はる。その熊野神祠及び刈田神祠に參詣するを俗に「お山をかける」といふ。毎年夏秋の交、山神に賽するもの數百、今に於て然り。猶、大日本地誌二卷藏王嶽地形説に參考すべし。

●●●●● 温泉 青野温泉場を距る西一里半、柴田郡川崎村川音官林内にあり。道路峻岨にして、或は獨木橋を渡り、或は羊腸たる徑路を辿り、或は斷崖絶壁を攀ち登るあり。或は綠雨湛るが如き密林を跋涉するありて、宛も仙郷に入るの趣あり。旅舎あり、病

ひを養ふに足る。効能は皮膚病、子宮病、梅毒といふ。明治元年一度廢湯に歸し、同八年再びこれを開ひて以て今日に及ぶ。慶應三年には藏王嶽の舊噴火口俄に爆發して多く泥砂を噴出し、この地の堆砂七尺餘に及びしといふ。

●●●●● 有耶無耶關 川崎村大字今宿の西羽前の國境にあり。即ち青根浴場の北笹谷峠の西に位し。今尙ほ古關と稱す。東鑑に「文治五年八月十五日大木戸の戦ひ敗れて主將國衡大關山を越えて出羽に之かんと欲す」と。其所謂大關山とは有耶無耶關の別名なり。頂上上大悲閣を安置す。古へ稱する所の關山無也の觀音是れなり。寺あり東奥山仙住寺といふ、本尊は傳行基僧正作なり。左右山水の眺望奇絶言ふべからず。土御門院の御製に「みのみ來し人の心もかはるやと問ふても見ばやうやむやの關」。又宗良親王の御歌に「きりふかきとやくとりの道とへば名にさへ迷ふうやむやの關」。俊頼朝臣の歌に「すぐせ山なといなむやの關をしもへたて、人に音をなかすらむ」と。其他古歌數多く著名の古蹟なり。(或はいふ其の關趾は羽前に屬せりと)。

汽車大河原驛を東に去れば僅々五哩にして槻木驛に達す。即ち阿武隈、白石兩川合流の左岸にして、磐城の國界に近く、同國伊具郡の角田町に馬車の便あり。更に四哩にして岩沼驛に達す。

岩沼町 即ち日本鐵道海岸線の分岐點にして陸前濱街道もまたこの地に來りて陸羽本街道に合す。阿武隈は驛南を流れて海にそゞり。地はかく交通の至要地に衝れるを以て、市街繁盛、人烟頗る稠密なり。人口約七千五百、仙臺の關門を成して、鐵道同市へ十一哩、福島へ三十八哩、原町へ二十五哩を隔つ。また、馬市と武駒神社とを以てその名遠近に揚る。町の東南は平田遠く連なり、廣袤數里に涉るといふ。

武駒神社 岩沼町の中央に鎮し、同停車場より八町に過ぎず。武駒、一に竹駒に作る。創建は承久九年と稱し、稻荷明神を奉祀し、奥羽稻荷頭領の聲名既に久し。社殿の結構また宏壯にして、毎年春秋の祭日には餘市あり。紅白の帛を盛飾せる馬匹堤の内外に群り、壯觀比なし。寺あり、武隈寺と稱し、往昔能因法師の開基と傳へ、所藏の舊物多し。また社寺の背後に寶窟と稱する地あり、石窟斷崖に開く。郷人以て稻荷

の神室となし、その眞體を以て狐となす。神社の縁起略に曰く「仁明帝御宇、承和九年、小野篁爲陸奥守赴任時、詣城州紀伊郡伊奈利山、恭請稻荷明神、爲國府鎮護神、明神感高懇到之情、假現白狐形、篁乃函之昇到鎮守府、暨途過名取郡南長谷村橋、狐啼八聲、篁怪之開函、則白狐奔走入武隈茂林中、不知其所往、篁規其地造營神社、爾來稱其橋曰八聲橋、後世訛呼彌五郎橋、後漸頽廢、天文六年、直山公傷之、周覽古跡、再興神祠及寺、且寄附本郡小豆島村云々」。

武隈の松 竹駒神社を距る二町餘にして、岩沼町の西數町にあり。所謂往昔の雙株松と稱するもの、一株は枯稿し、今一株を餘す。舊の枯木に新松を植繼ぎたるものといふ。里人はこれを武隈の二本松と稱せり。古歌頗る多し。後撰集「植し時契りやしけん武隈の松を再び相見つるかな」能因法師「武隈の松は此のたびあてもなし千とせを經てや我はきつらむ」橘季道「武隈の松の二木を都人いかゞとは三木とこたえむ」芭蕉曰「岩沼に宿る。武隈の松こそ、眼さむるこゝちはすれ。土際より、二本に岐れ

て、昔の姿うせずと知らる。先づ、能因法師思ひ出づ。往昔、陸奥守に下りし人、この木を伐りて、名取川の橋杭とせられたること有ればにや。「松は此のたびあともなし、とは詠みたる、代々或は伐り、或は植ゑ繼ぎなどせしと聞くに、今はた、千歳のかたち整ひて、めてたき松のけしきになん侍る。「たけしまの松見せ申せおそ櫻」と擧白といふもの、、餞別したりければ「櫻より松は二木を三月越し」。

●千貫松山 岩沼町の西南半里許、千貫村字南長谷にあり。山頂に深山叢祠あり。山下に古刹あり、深谷山眞珠院といふ。青松萬株、山勢の高低に随ひ相連ること數十町、翠色滴るが如く、遠海航行の人見て以て目標となす。その價千貫に易へ難しとて古來皆呼んで千貫松と稱するに至れり。

●東平王墓 千貫松山の下にあり。塚上に青松十餘株を植ゆ。

觀應中、釋宗久の「都のつと」に曰「白川の關を過ぎて、二十日あまりなりしに、ひろき川のほとりに出でぬ。これなん阿武隈川なりけり。都にて、遠くき、わたりし所の名なれば、かぎりなく遠く來にけるほど、おもひしらる。わたし守、船さしよせて、みちゆく人ともいそぎのりて出で侍りしに、水上遠くみわたせば、か

さなる山の中に、烟のたちのぼるところありしを、船子どもにとひしかば、元弘のみだれに、鎌倉の滅びしより、この烟たちそめて、今にたえぬなりと（これ即ち藤王嶽なり）いとふしぎなりしが、船よりおりて、行く道のほとりに、一の塚あり。ゆき來の人のわざとおぼえて、あたりの木に詩歌などあまたかきづけたり、むかし、東平王といひける、唐人の墓なり。ふる郷をこひつゝ、こゝにて身まかりけるが、そのおもひのすゑにや、塚の上の草木も、皆な西へ傾くと申ならはせり、とかたる人ありしかば、いとあはれに覺えて、かの照君が、青塚の草の色も、ことほりにぞおもひやられし。誰れも旅の空にて、はかなくなりなば、夜半の烟もなほ、ふる郷の方にやなびかまこと、うき世の妾執もあぢきなくこそ覺え侍りし。かつ、かのうへに、松の木あまた生ひならべるも、うな井松とは、これにやとあはれなり。物かたりのためしも、おもひいでらる。ふる郷はげにいかねば夢となる後さへなほも忘れざらん」それをも、なほすきて、武隈の松の陰にたびねして、木の間の月に心をつくし、名取川のわたりを過ぐるとは、行く水のかへらぬことをあはれむ云々。

●増田驛 岩沼の次驛にして、同驛より四哩を隔つ。町の人口凡そ四千五百、實方中

將墓、秋保温泉等はこの驛より行くべし。

●實方中將墓 増田停車場を南に距る三十四町、笠島村字鹽手にあり。按ずるに、昔、一條院の御宇中將實方行成卿を打ちたる罪に依て陸奥守に任じ、歌枕見て參れとて奥

州の地に下向せられ、阿古屋の松を尋ぬ。時に鹽竈明神の靈あり實方に謂て曰く阿古屋の松は出羽國に在りと、實方依て出羽に下りて松を尋ね千歳山を経て歸り途上笠島の社前に到る。人に就て神の由來を聞き、是れ下品の女神なりとて例を破り馬より下らずして經行す。馬俄に斃れ、實方また死し、同じく社側に葬ると。觀聞志曰「實方中將墓、有兩地、一則在鹽手村山畔、一則社北七町餘、在農家後、曰北野宅、設護祠、是其墓址也、或曰作術者墳址也、是傳古之佐貝叙神社、而鄉俗誤其語音者也、然不能質傳來之衍心焉、可惜、笠島村、實方火葬之地、俗人曰竈地、蓋、死者之於火化也、猶烹爛魚櫛於竈中、仍曰諸竈地、或曰、實方沒後、送戸羽州、而瘞于千代山、下建寺曰唐松山萬正寺、以阿古野之松在所也」。後拾遺集「實方朝臣陸奥國に侍けるころ言ひつかはしける「都には誰をか君はおもひ出るみやこの人は君をてふらむ」大江匡房朝臣同ざく返し「わすられぬ人の中には忘れぬをまつらん人の中に待つやは」藤原實方朝臣」山家集西行「朽もせぬその名ばかりをと、め置て枯野のすゝきかたみとぞ見る」

芭蕉「笠すり、白石の城を過ぎ、笠嶋の郡に入れば、藤中將の塚は、いつくの程ならんと、人に問へば、これより遙か右に見ゆる山際の里を、箕輪、笠島といひ道祖神の社、かたみの、芒、今にありと教ふ。この頃の五月雨に、路いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら詠めやりて過ぐるに、箕輪笠島の名も、さみたれのをりに觸れたり」と、笠島はいつこ五月のぬかり路。關元龍「寂寥山村外、弔來古塚春、山蹊荒薄亂、斜日落花頻、元是西京客、曾爲東海塵、悲鳴林裏雀、遺恨似呼人。」

秋保温泉 増田停車場を距る西北四里、山形に通ずる笹谷街道中、秋保村大字湯本にあり。その地、三面に山を帯びたれど、東の一面開けて、交通の便甚しく悪からず。名取川の北岸に位し、仙臺を西に距る五里とす。泉質は鹽類性に屬し、熱度は約百三十度を保つ、効能は胃弱、胃加答兒、佝僂質斯、脚氣、子宮病、打撲、創傷、火傷、梅毒、皮膚病等に適せりと。發見の來歴を聞くに、人皇三十代、欽明天皇小瘡を患ひ給ひ、勅して此温泉を召し奉りしに、日ならずして龍體平癒あらせられしかば叙感

斜めならず、左の御製を賜ふといふ。』おぼつかかな雲のうへまてみてしかなとりのみ往はあとかたもなし』是より御湯と名つく。即ち八雲御抄の名取の御湯にして日本三御湯の一なりと傳ふ。規橋の勝あり。

秋保大瀧 秋保村字馬場、瀧の原の奥深谿密林の中に懸れり。馬場は奥羽兩州の境界に當り、昔し二口番所のありし處にして、近く東奥岳、磐山の諸高山と接す。秋保温泉の湯元を距ること約三里なり。齋藤竹堂の遊記に曰「仙臺府城之西八九里、峯巒相接し、溪水盤廻し、皆以て遊覽す可し。而して秋保の大瀧を最勝と爲す。大瀧は羽山之麓に發し、而して名取川之源と爲る。凡そ此間、境僻にして而して勢阻。幽潛、隱逸之士の樂む所也。余、天保某歲を以て往て遊ぶ。某日府を出で、湯本に至て宿し翌、名取川に沿ふて而して行く、坂路崎嶇、乍ち上り乍ち下る。二驛を経たり。長袋と曰ひ、馬場と曰ふ。山愈よ深く、地愈よ僻、不動祠を得。祠北は逶迤として而して降る。忽ち滴々として聲有り、海濤驟かに作るが如きを聞き、驚て而して之を顧みれば

四山環翠、萬木參天、陰寒晦冥、奇鬼毒龍の窟に入る如し。其西、石壁東立して、瀑布懸る焉。直下二十餘丈、廣さ三之一なり。簾の垂るゝ如く。玉の碎くる如く。銀河天に落つる如く、其初尙ほ小、中間石に、觸れ一激して而して大。再激して而して倍す大。再激之後は、散じて雲霧と爲り、紛紜混蒙、碧潭其下に在り。竊然底無し。激賞之際、清風乍ち至り、飛沫、人に濺ぎ、衣襟之れが爲めに淋漓。毛竦髮豎、蒼海之底を穿ち、而して雪山之頂に登る如し。余又林樾を排し、巉巖を踰え、近く瀑下に就て彷徨し、縱覽以て其勝を悉さんと欲す。而して天方に暮れ、溪路陰惡、歩を措くに由無し。悵然として歸る。』

所謂二口街道とは仙臺より羽前に出づる作並街道中、熊の根と稱する地より南に分岐して、馬場、滝原等を經て、二口峠を越え、以て羽前の馬形に達するものなり。

笹谷街道とは仙臺市南の長町より茂庭、小野、川崎（大河原町より村田町を經て來る街道と、白石町より宮を經て來れる街道とは、共にこの地に於て會合す）を經て、笹谷峠を越え、以て羽前の關澤に出づるものなり。

増田驛より長町驛を過ぎて直ちに仙臺市に達す。實に東北第一の大都たり。鐵道、

東京を距る二百十七哩、青森を距る二百三十九哩とす。

○仙臺市 宮城縣下の殆ど中央部に位し、同縣廳の所在地なり。西に青葉山を負ひ西南に廣瀨川の流を擁して、東方の一方遠く開けて海に至る。街衢の數二百有九、人口九萬三千餘を有せり。地は初め千躰或は千代に作りしを、徳川氏の初期伊達政宗新に地を青葉山に爲して築城し、慶長五年十二月二十八日を以て岩出山の城より出で、居を此に移し、町を城下に開きて街衢を経營し、千代を改めて仙臺と命名したるものなりといふ。爾後、明治の廢藩置縣に至るまで、二百七十年間六十八萬石の城邑として雄を東北に稱したり。されば街巷は規矩整然として縦横相通じ、苟も亂雜の狀はこれあらず。また以て自然の發達に委せられたる地と自ら趣を異にする所あるを見るべし。されど嚴密にこれを批評する時は、市は寔に東京北方の大都會なれども、そは單に政治上の一小中心地を爲すに過ぎずして、その商業は福島市に及ばず、その工業は若松市に劣り、有名なる仙臺米の多くこの地を經由して他に出づるものあれども、そ



の商況は必ずしも活潑といふべからず。また、仙臺平と稱する織物の如きも、その名徒らに高くして産額は寧ろ少く、従て市況に影響する程のことはあらず。然れども流石に地方の大郡邑と目すべきの地なれば、雜貨の集散には多少見るべきものなきにあらず。金融機關も第七十七銀行(資本金百五十萬圓)宮城商業銀行(資本金五十萬圓)宮城縣農工銀行(資本金六十萬圓)等ありて、縣下金融の半を司れり。要之、市が一般に活氣に乏しきは、數百年來大藩の戒下として衣食に安んじたる餘弊なるべし。重なる物産には仙臺平の織物、仙臺味噌、仙臺米、綿糸、埋木細工等あり。交通機關としては東北鐵道の停車場は、南町通五丁目にあり。また地は國道の要衝に當り、陸羽街道は大河原、岩沼、中田等の諸驛を経て來り、更に吉岡、古川、築館、澤邊等の各驛を過ぎ陸中に入る。又作並街道は仙臺より起りて愛子、作並に經羽前に入り、石ノ巻街道は仙臺より利府、小野、石ノ巻、横川、雄勝に至る。今此地より近傍府廳所在地及び國內名邑に至る里程を擧ぐれば左の如し。

東京府	九十二里二十九町	大河原町	八里十町	築館村	十六里十六町
福島縣	二十一里三十五町	茂ヶ崎村	一里一町	佐沼町	二十二里十七町
岩手縣	四十七里二十六町	原 町	二十四町	飯野川村	十四里九町
山形縣	十六里三十三町	吉岡町	六里二町	石巻町	十二里三十三町
秋田縣	六十五里十町	古川町	十里三十四町	本吉町	二十二里一町
青森縣	九十八里三十四町	涌谷町	十二里十町	鹽釜町	四里六町

芭蕉辻 仙臺全市の中心地をいふ。即ち國分町、大町の交叉せる丁字街頭にして、四隅の商家は城樓造りの巍然たる大厦より成り、瓦葺高く中空に聳えて、仙臺隨一の偉觀を呈せしものなり。今は祝融の禍にかゝりてこの三個を失し、舊觀見るに由なしと雖も、尙ほこの地繁華の燒點たるを失はず。芭蕉辻の名は、蓋し藩祖政宗公が僧芭蕉なるもの、効績多きを没せざらんが爲めに、その名を取りて市の中心たる地に命じて、永く紀念となしたるものといふ。辻より東方に一直線に走るものは新傳馬町にして、停車場はこれに沿ひて市の東部にあり。行客百貨と共に輻湊し、現在に於て仙臺市の門戸を爲す。辻より西に大町通を進めば、約五町にして、廣瀨川の大橋に至る。

その傍の高丘を櫻岡公園といふ。

櫻岡公園 園は舊と互理、岩沼、錦織の三邸宅地にして、明治四年始めてこれを開き、借樂園と稱し、士族遊覽の場となす。青葉城その前面に對し、廣瀨川はその西を流れ、遠く泉ヶ嶽の白雪を眺めて風光の美愛すべし。園内に櫻岡神社あり。もと荒卷村伊勢堂山の明神を遷座せるものにして、皇太神宮を奉祀す。祠の左方斷崖に數十株の老櫻あり、數株の翠松これに交はる。また祠の右方に梅林あり。別に華表の側に老梅古松二株あり。周らすに柵を以てす傳へていふ、これ征韓の役に政宗公の齋らすところと。一を八房梅といひ、他を磐若松と名く。その他、園の一隅に階行社あり。

青葉城 廣瀨川の大橋を渡れば、金碧燦然たる青葉城の城門を目前に仰ぐべし。城は青葉山の中腹を剗きて經營せしもの、自ら天然の要害にして、その後方は幾重の深谿幽澗を以てこれを環繞し、懸崖相連り、叢林鬱茂し、今なほ人跡の稀なる所多し。已に背後にこの嶮を負ひ、前而は即ち廣瀨川の急流を擁す。これ城が要害無双の名高

き所以にして、特にこの地を撰定したる伊達政宗が眼識の非凡なるを推知すべし。惜哉、明治十五年火を出して、封内百餘萬石の富を盡して結構せられたる殿堂門廡は悉く焦土に歸し、現今はたゞ僅に一の城門を剩すのみ。今、その城址には第二師團司令部を置く。また、天守臺の趾には征清紀念標あり。尖頭巨鷲あり、翼を打つて舞んとす、また一偉觀あり。頼鴨涯「落日僊臺下、古今事奈何、曠田窮海盡、群障春城多、偉志遠時運、英雄遭止戈、可憐一市雨、唯唱潛々歌」關元龍「僊臺風物自濼々、十二樓頭花鳥時、比屋可封三萬尺人烟蒸作彩雲飛。」

第二師團司令部 即ち青葉城址にあり。

諸兵營 青葉城址より北方澁橋に至る間を河内と稱す。歩兵第二十八聯隊、騎兵第二聯隊、野砲兵第二聯隊、輜重第二大隊以下の諸兵營は皆なこの間にあり。

龜岡八幡宮 諸兵營の相連る西方龜岡町に鎮す。舊藩侯の遠祖宗村公が建久三年に鶴ヶ岡八幡宮を伊達郡高古城（岩代國）に勸請せしに始まり、爾後歴代居城の遷徙す

る毎にこれを奉遷してその祀を厚うす。慶長七年政宗公これを仙臺の城東に遷し、更に元和元年城後青葉山の北、即ち今の地に奉遷す。されど、明治廢藩後は通路閉塞せるを以て、參拜の人少く、今は社宇も廢頽して、當年の壯觀の半も止めず。

經ヶ峰靈廟 青葉城の南方に經ヶ峰の小丘あり。政宗以下伊達氏三代の廟宇ある地にして、満山老樹蒼鬱として茂生し、廣瀬川其下を流れ、眞に人をして幽邃限りなきの情を起さしむ。寺門の前を横り、靈廟の山門に入れば、十歩にして柵門の傍、一大華表あり。これより廟門に入り、石階を上げれば即ち前殿にして、爰には佐々木文山の揮毫せる瑞寶殿の大額をかゝぐ、即ちこの奥に貞山公の靈像あり。衣冠束體、儼然としていますが如く深殿の中に坐したまふ。殉死者二十名の塋墳も亦相亦んでその右左に運る。廟後に古碑あり、傳へて満海上人の碑なりとなす。普通參拜者は正門の側なる小門より入りて、前殿を經、廻廊を行きて直ちに靈廟の前に到る。靈宇、結構最も壯麗を盡し、彫彩の美を極む。義山、雄山兩公の廟宇たる感仙殿及び善應殿は、當